352
783

①

0021157000

0021157-000

特２１３－３３

経済第一線

倉田春一・著

大鵬書房

昭和１０

ADC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第６７条の規定に基づき、平成１２年３月２
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

142

特213
33

經濟

第一線

倉田春一 著

大鵬書房版

序言

財界の人物百人を拉して寸評を加へて見た。筆者の選んだ百名が財界を代表する全部だと云ふ點でなら恐らく妥當ではないであらう。しかし、現在産業日本の一方の指揮者たることに於ては、些かも疑ふ餘地はあるまい。

人間のなす凡ゆる行動はその人物の個性の發露である。事業の興廢がこれを掌握する人によつて決定され勝ちのものであるだけに、代表的人物の性格的影響が時代の思潮をなす時代を理解するにあたつて人物の研究を必要とする所以ここにある。この見地からして憂進途上にある産業日本の中樞をなす主要人物を拉して、これを解剖し、批判することは決

して無意味ではあるまい。この小著はその要請の一部に添はんとするものである。筆尖よく其片鱗をでも傳へ得れば幸である。

著者の寡聞なる、各部門に亘つて第一線の人物に論及することの出來なかつた憾みがある。他の分野に就ては稿を更めて筆を執る事にした。幸に一顧を與へられて續「第一線」を書く勇氣を起すことが出來れば何よりである。

昭和十年十二月十五日

著者

目次

序……一
鮎川義介……一
淺野良三……七
有馬頼寧……一二
井上篤太郎……一五
有島健助……一七
石坂泰三……二一
石原廣一郎……二四

（順不同）

井上治一……一九
池尾芳藏……二一
井坂孝……二四
池田成彬……二七
梅浦健吉……四〇
大久保利賢……四三
小倉正恒……四五
大田黑重五郎……四八
川田順……五四
庄司乙吉……五六
片岡安……五八

河西豐太郎……六〇
金光庸夫……六三
城戸四郎……六七
栗本勇之助……一〇
後藤國彥……七二
鄉誠之助……七五
小竹茂……七八
小日山直登……八〇
五島慶太……八四
小布施新三郎……八六
小林一三……八九

齋藤定吉……九一
佐々木謙一郎……九八
下出義雄……一〇〇
正田貞一郎……一〇一
瀧下清……一〇五
千石興太郎……一〇七
末象要……一一〇
鹽原又策……一一三
澁澤正雄……一一四
四條隆英……一一六
眞藤慎太郎……一一九

白石元治郎……一二〇
上甲信弘……一二四
勝桂之助……一二七
高島菊次郎……一三一
田中鐵三郎……一三三
武智直道……一三五
瀧山米太郎……一三八
津田信吾……一四〇
十河信二……一四三
遠山元一……一四六
利光鶴松……一四九

遠山芳三……一五一
中村庸……一五五
名取夏司……一五七
中川末吉……一五九
南條金雄……一六一
長尾欽彌……一六四
中井勵作……一六七
中根貞彦……一七一
中野金次郎……一七四
西藤右衛門……一七七
沼間敏朗……一八一

野依辰治……一八三
野間清治……一八七
萬代順四郎……一九一
鹿村美久……一九四
早川德次……一九九
林甚之亟……二〇二
弘世助太郎……二〇四
藤原銀次郎……二〇八
藤山愛一郎……二一一
廣田嘉一……二一六
福田英助……二一八

平生釟三郎……二二一
原邦造……二二二
松永安左衛門……二二七
松崎半三郎……二二九
牧野覺……二三三
松岡洋右……二三六
松江春次……二三九
松方乙彦……二四二
牧田環……二四六
南完爾……二五〇
村田省藏……二五二

增田次郎……二五五
宮島清次郎……二六八
宮川竹馬……二六三
森岡善照……二六五
望月軍四郎……二七〇
森廣藏……二七三
森蘊……二七五
山口喜三郎……二七九
杉野喜精……二八七
小野耕一……二八九
安川雄之助……二九二

清岡榮之助……二九五
山下繼三郎……二九八
結城豊太郎……三〇〇
吉田勉……三〇五

鮎川義介

鮎川が慧星の如く財界の第一線に出動したのは、昭和二年に勃發した金融パニックに先だつこと二ケ月前である。久原鑛業の主人公久原房之助が、年來の大臣熱に金缺病を併發して身を政界に轉上の時、久原の義兄として關係から久原に代つて久原鑛業經營の任に當ることゝなつた。處が大將田中義一を總理大臣にするために二百萬圓を投げ出し、又、自らも遞信大臣を買つた久原の後だ。久原鑛業がどの位疲弊を極めてゐたかは想像に餘りある。これより先、鮎川は久原の資本戸畑鑄物(岡産工業と改稱)にあつて、刻苦勉勵、同會社をして、日本一の優秀鑄物會社に盛り立てた。同社の製品は、三井三菱の手を經て海外にまで販路を獲得し、戸畑鑄物社長鮎川義介の名は鑄物業界に輪炙されたものであつた。

◇

昭和三年三月、日産社長に就任した鮎川は、經倫の第一歩の新案として、新株の拂込と不良資産の全面的な整理を實行した。これで前社長時代の穴を埋め、社名を久原鑛業から今の日本産業に改め、更に翌年春、日本産業の本體とも云ふ可き鑛山事業を分離して日本鑛業を作つた。が其後に來るものが、井上緊縮財政による經濟界の萎微沈衰で、日産、日鑛ともに支離滅裂、兩社とも減配無配、さうして赤字に又赤字。其のどたんばに政變が來て、金の輸出再禁止は斷行された。金は炎天の寒暖計と同然、鰻上りを續けた。一番酷い時には親株日産十三圓を往復した株價が忽ち三十圓五十圓、一足飛びに百圓を突破した。それ以來鮎川の向ふ處破竹の猛威を擅にして、遂に今日、三井三菱につぐ、大日産コンツエルンの總帥として、押しも押されもせぬ財界の大立物となつたのである。

◇

今日大日産コンツエルンを構成する事業各部門の資本總額は、約二億六千萬圓、それに日産自體の資本金を合併すると、實に三億數千萬圓の大資本になる。これだけの大資本をあゞ一つで右にも左にも動員し得る倭漢鮎川の存在は實に偉大なるものである。

鮎川は君の獨想になる公開持株會社（オープン・コンツエルン）のことを、君の製作によるパンフレットでいろ〳〵の言葉でいろ〳〵の效能を書きつらねてゐる。簡單に云ふと公開持株會社こそは新資本主義に最適の企業形體で「日本産業を核心として、資本主義に一つの新機軸を設け度い」と云ふわけなのである。世間では、自己辯護と云ふ處から、折角の鮎川の主張をも、餘り眞面目には相手にしてゐないやうである。然し、この公開持株會社制度は、必らずしも頭から馬鹿にしたものではないと思ふ。鮎川の主張のうち若干の點に就ては眞面目に學問的取扱を受けてもよいものがある。

第一は、投資會社の支配權を握ることゝ、事業撰擇に無目的であること。日産式持株會社は何でも御ざれで、無差別に、各種の事業に進出することを原則とする。安全、確實と云ふことを、必ずしも第一條件としない。當分の間は駄目でも大きな資本の後援で面倒を見れば、將來有利な事業に發達し得る、と云ふものに對しては勇敢に手を延ばす、卽ち子會社の撰擇に當り、その事業の性質について全然豫定した目的をもたぬことを原則とする。

然るに從來の投資會社は、持株の範圍が、特に限定されてゐる譯ではないが、直接に投資するだ

けの經濟的能力を持たぬ公衆に代つて、投資の事務を引受けると云ふのだから、自然、その持株は安全確實を第一條件とする、と云ふ具合に、原則的な制限が置かれてゐるわけである。さらに持株した關係會社に對して、經營上の支配力を占めることは原則として不必要なものである。

第二の特色は、その名の示す通り、持株會社の株式を公開し、公衆の資本參加を許すことである。そして、この第二の特色こそが、最も重要な意味を有つてゐると考へる。

公開持株會社の第二の特色とする內容を分解すると(イ)資本支配效力の增大。この點は、諸財閥の持株會社に比較して見るとよく解る。たとへば三井合名の資本金は三億圓、これを今公開持株會社に改組したとすれば、現在の三井系事業を支配するためには、三井が三億圓を出す必要はない。少くとも、その半分の一億五千萬圓は、合名株式を公衆に持たせることにより、公衆資本によつて調達することが出來る。從つて三井の資本の事業支配力と云ふ點では、公衆持株會社とすることにより、その支配能力を二倍三倍に增大することが出來る。

今、日產の具體的事實について見れば、最近增資決定前の總株式數は百九十八萬株、その內鮎川一族はとりまぜて十五萬株位のもので總資本の一割にも足りない。子會社に持たせてある株式を聚り合せても、日產株數三分の一にも滿たないものと見られる。この比較的僅少な資本で、比較的多くの子會社を支配する、と云ふことが、まづ、第一に擧げられる特色である。(ロ)資本の膨脹速力が大であること。從來のコンツエルンに於ては、その資本の膨脹は、配當收入の蓄積か、持株の賣却に依つて得られるプレミヤムの蓄積かに限られる。然るに、公開持株會社は、必要に應じ、增資または他會社合併によつて、急速に資金の增加を劃することが出來る。(ハ)冒險的事業、または新事業着手に便利なること。舊來コンツエルンの資本は、全部が、首腦者自身のものであるが、公開持株式會社のものは、その半分、或は三分の二以上は公衆の資本である。道德論としては、自分の金よりか他人より委託された資本の方を、より大切になす可きものであるし、實際、資本家の多くは、さう云ふ道德論を口にしてゐるが、經濟論としては、そして實際論としては、他人の寶の方が大膽に使へる。だから公開持株會社では、普通の財閥が二の足を踏んだ仕事にも將來性さへあれば冒險的に投資出來る。寧ろこの點が公開持株會社の最大の特色だとも考へられる。

資本主義の發達した今日では、將來性ある事業にしても、その經營に要する資本單位は、昔に比べて著しく增大し、實を結ぶまでの辛抱の期間も、はるかに長くなつてゐる。從つて、かういふ事

業の經營は株式會社發達期の當初におけるやうに、新しく、單獨の會社で發足することは、大いに困難となつて來たわけなのである。かういふ困難を征服する一つの手段として、公開持株會社本來の使命がある。簡單に云へば一つの事業の冒險を二重の株式會社でカバーするのである。

◇

以上が鮎川の公開持株會社の特色の要點であると思ふ。だが公衆から資本を吸收するためには、大日產は、安全性と有利性の二つの資格を持たねばならぬ。

安全性は、公開持株會社の多角性經營によつて保證されると云ふ。一般論としては、これは間違ひではない。だが、これは一に經營首腦者の雙肩にかゝる。

有利性については、かなりの問題がある。單獨の株式會社に於てさへ、外部の者には仲々懷具合は解らぬ。一割も二割もの配當をやつてゐる會社が、あつと驚くやうな破綻を暴露したことは多く經驗してゐる處である。況んや、數十の子會社を持つ持株會社の內容は、寧ろ判らないのが當然である。實に雲を摑むやうに莫然たるものがある。その不利を克服するためには、自然、無理な高率配當を必要とする。既に日產に於ても其傾向の見受けられないでもない。

要するに、今までの資本主義發達期に於て普通の株式會社がなし遂げた役目を、今後の資本主義時代においては公開持株會社が果すのだと云ふ見方は十分正當と認めてよい。必ずしも鮎川個人の馱法螺だと一笑に附し去る可きものではない。たゞ君は日本資本主義發達の爲め、これを正しく利用することである。

たゞし、景氣もやうやく天井を衝いた感がある。君の云ふ公開持株會社が、子供の火遊びに近い危險なきを得ない。颯爽たる鮎川の爲め、これは筆者個人の杞憂であつて欲しいものである。

浅野良三

◇

デフレ時代には可成あぶなかつた浅野財閥である。浅野セメントは十圓臺に落ちたことさへあるこれでも先代總一郎は、積極的政策を何處までも押し通さうとした。何と云つても獨力であれだけの大事業をなしとげた傑物だけに、家の子郎黨は一樣に不安の念にかられながら、面と向つて建言

する者とてもない。やつとの思ひで外遊させて一意氣と云ふ時、先代總一郎は大樹の倒れる如くポックリと死んだ。たしか昭和五年のことであつたと思ふ。

先代の目には口さきの黄色な若造ばかりで任せ切れないと見えてゐたのだが、さて先代が死んで見ると淺野王國には多士濟々、時代の進展をつかみ經濟界の歸趨を見透した相當な人物を持つてゐる。日本の資本主義が一途に上向線を辿つてゐた頃、即ち資本主義華かな頃なら、先代一流の遣り口でこそ、あの大成を見られたのである。然し昭和四五年のデフレの波は、淺野王國を完全に呑み込まんとした。當時既に時勢を知り、思想を知つてゐた若い人々は、必死になつて奔馬の手綱に取りすがらんとした。そしてこの保守政策、整理の進行、六年末からのインフレの勃發が幸して、淺野は更生の機運漲つたのである。この難局に處し第一線に立つて淺野王國を守つた騎手、御大二代目總一郎の令弟淺野良三を語らう。

大社長亡き後、長男の持權で淺野系全事業を總攬することになつた泰次郎が、一躍二代目總一郎となり、これを實際に引き廻す人に、淺野良三がある。セメント副社長の要職にあつて才氣煥發、野心滿々とした典型的な次男坊である。當代總一郎より五歳の年少で本年四十七才、正に働き盛り

である。君はハーバート大學出身、語學は得意中の得意、昨年資本家代表として渡歐の歸途、ホワイト・ハウスにルウズヴエルト大統領を訪問、膝つき合せて日米問題を論じたと云ふことである。

見も角少壯實業家としては、相當アメリカで名を賣つたのは事實である。とかく引つ込み思案の多いわが實業家中、君の果し得る役割は、將來頗る多いわけで、財界國際人としての君に多くの期待をもつ所以である。一面會社經營者としても、亦相當なものであらう。淺野系全事業に參劃してゐること勿論であるが、中で東洋汽船會社の更生については君の功績は沒すべからざるものがある。今日、東洋汽船は長い悲運のドン底から起き上り配當復活にまで漕ぎつけた。一面時代の力によるとは云へ、君の方針宜敷を得たことを見逃してはならない。一見派手好みの君が、先代總一郎の積極政策を一擧に引きしめて整理の實をあげるに至つたのは偉とするに足る。

君の若い時代の放蕩は實に痛快を極めたものであつた。當時の君を知るものにとつて、現在の君は隔世の觀に堪えないと云ふ。流石の亡父總一郎老も、これには呆れはてゝ、一計を案じ毎朝五時本部集合、朝飯を共にして事業の打つ合せをすることにした。朝の集合時間に缺席しやうものなら雷が一時に落ちる。かくてはこれまでの深酒も出來なければ紅夢に浸つてもゐられない。この藥が

利いて、だんだん酒盃から遠ざかつたと云ふのは世間周知である。今は昔、君は不肖の子ではなかつたわけである。

◇

淺野王國の代表的事業セメント界の紛糾に一言觸れやう。セメント界の六ケしい紛糾の果て東西手切れとなつた唯一の原因は、淺野關東側の統制至上主義に對して、關西側が反旗を翻したことである。統制主義と云ひ、非統制主義と云ひ、共に深い理論的根據のあるほどのものではない。各々自社の利益になるやうな議論を立てゝ、それがたまさか、カチ合つての物別れである。セメント統制協定は、昭和五年に第二次聯合會規約として成立したもの。當時のセメント界は、濱口内閣のデフレ政策で、各社とも軒なみの赤字、無配の悲況に陥つた。それまでは生産制限で市況をコントロール出來たものであつたが、限産ぐらゐでは効果がなくなつて來た。そこで、五年末、生産制限と併立して、全國を數個の販賣區域に分割し、各社の出荷比率と値段協定とを實行することゝなつた出荷割合は、過去二三年の實際販賣量と生産能力とを基礎として定め、値段は各販賣區域毎に一區一値段を原則とした。この結果セメント業は、獨占價格としての機能をもつことゝなり、其上インフレ景氣と相まつて、當時の赤字會社が增配又增配を續けて、すつかり好い氣持になつた。だが、有頂天時代のさう長く續くものではない。セメント界大動亂の直接の原因となつた各社の增産計畫の猛競爭が突發したのは間もない事である。

實際の所、出荷比率が出來た以上は、自社の利益をより多く增加させる爲めには、生産原價を安くあげるか、生産能力を增加して能力を基礎として按分的に定められた販賣割當高を高めるかの二つの方法しかない。そこで各社とも先のことなぞどうでもよいとして增産計畫に着手した。今日あることは誰にでも想像されたことだから、最初から增産計畫の中止を計ればよささうに考へられるが、因果なことにセメント業はそれが出來ない。原料は全國何れの處にもあるし、工場設備は簡單なので、マゴマゴしてゐる間にアウトサイダーが幾らでも發生して、聯合會を窮地に追ひ込んで仕舞ふのである。アウトサイダーの發生抑止の爲にも能力增大をはからねばならぬことになつた。

淺野の對敵、小野田セメントは財力の許すがまゝに、比較的早くより增産に着手し、やゝ安心と云ふ時、他社がせり上げて來たので、又相對的地位が顚落して來た。それなら、今ひと奮發と云ふことになつて立ち上がらうとする時、産業統制法の發動によつて法律の力で增産中止が計畫される

時、小野田は奮然として脱退した。

セメント界のこの紛糾は益々深刻に、益々永く續くものと見なければならぬ。その中で、指導的な人物はと云へば淺野セメント意外にはない。指導者と云ふものは、强氣ばかりで、我利一天張りでは、その地位はつとまらない。淺野セメント當時者としては、多少の我慢は忍んでも、まづ業界全體のため、と云ふ態度でありたい。セメント界、淺野王國、共に君の才腕に待つこと至大。

有馬頼寧

◇

産業組合中央金庫理事長の有馬頼寧伯が、嘗て日比谷原頭に草取を試みて、華胄界の新人、華族階級の異端者と呼ばれたことは、まだ世人の記憶に新なる所であらう。その有馬伯が農林政務次官から八條隆正子の後を襲ふて現職に就いた。當時「僕は良い所があれば、何時でもそつちへうつるよ、之れは處世の方法だ」と言つたものである。往年の新人も隨分と俗化したものである。考へやうによつては、ロボットの政務次官よりは中央金庫理事長の方が、事業の内容もあり興味も深いと云へるものである。一體産業組合中央金庫と云ふと農村金融の中樞機關で、近來頓に活況を呈してゐる産業組合運動の臺所方を承つてゐるところ、その重要性は今更喋々を要するまでもないが、從來の中央金庫は餘りに消極的な憾みが多かつたのである。然し茲一二年、所謂農村非常時出現以來政府は尨大なる農村救濟インフレを起して、其金は中央金庫を通じて系統組合農村へ浸透してゐる從て中央金庫を中心として、種々の問題が發生してゐる。現在中金の中心問題は、餘裕金の運用如何である。銀行預金だけでも約五千萬圓もあると云ふ餘裕ぶりである。これを如何に運用するかが中金現下の重大問題である。

從來の中央金庫の首腦部は徹底的消極主義、堅實主義の一方で、中金自體の内容は改善大いに見る可きものはあるが、肝腎の事業の對照である農村側から見ると、借り度い金は貸して呉れずで、實に不平の的であつた。今後中金がどの程度に農村の希望に沿ひ得るか、理事長有馬の積極政策の手腕に待つわけである。今や米穀資金の擴大にとゞまらず、山林、蓄産方面へも融資の途を開く可く活躍してゐるから中金としては漸く活動の本舞臺にも立つたと云ふものである。

資本主義と社會主義の中道を往くものとして、産業組合運動の氣運世界的に勃興の時、其發達の一半の責を負ふやうに見られる中金の興廢は、農村將來の爲め至大の役割を演ずるものである。從來古手役人の養老院かに見られた中金が、産業組合運動に十分の理解を持つ有馬理事長を得てゐることは非常なる强味である。積極をふりかさして、産業組合主義を押して行くところ、相當期待出來ると云ふものである。

日比谷の草苅、水平運動の支持などと人道主義、溫情主義の途を歩んで來たのであるが、中央金庫の支配者としては、溫情主義だけでは押し通せないであらう。一萬數千の所屬組合を擁し、農村への金融を一手に引き受けてゐる中金としては、時には外部からの强制、內部からの反對も起るであらう。そんな場合、君の意思力の强靱さがどんなものか。

此の意味で中央金庫理事長は君に執つては一個の試金石であると觀られよう。

× × ×

井上篤太郎

◇

帝都交通機關の統制が種々の觀點から議論されて既に久しいものであつた。最近帝都交通の統制問題も、具體案がほゞ成立した樣子である。この問題に對して多年專門的な研究を重ねて來た主唱者、産婆役の井上篤太郎を語らう。

現在私鐵界隨一の人格者と評されてゐる君でも、青年時代は相當無茶をやつたものである。明治二十一年保安條令に引つ掛つて「お江戸拂」で横濱に追放されたことがあるが、偶然にも尾崎行雄と同日だつたとの事。刑事が下駄ばきで人力車の後を走つて來るのが面白くて、用事もないのに横濱の町を乘り廻したものださうである。この追放が機會をなして、犬養、星と袖を別つて政界から實業界に轉身した。若し當時東京を追放されなかつたら、政界人として今頃は相當活躍してゐるも

のと想像される。

日本絹織紡績から富士紡に轉じたのが明治三十四年の事である。紡績技術には全くの素人が蠶糸溶液を發明して特許を得、富士絹の創始者であつたり、尙三十有餘の特許を得てゐるなど、その研究努力の程が察せられる。富士紡時代は社長故森村男に信任されること篤く、常に社の樞機に參與するなど、君の卓絕した手腕と努力による處大きい。根が政治家出だけに二ヶ年間ほどは朝夕御辭儀の稽古をやつたとも云ふ。

京王電軌の創業は明治四十三年九月で、第一期は笹塚調布間であつた。新宿笹塚間は資金難で着手出來ぬ苦難の時、君は招かれて廿五年間の紡績界から三轉して電鐵業に、しかも受難の當社に入社した。熱と努力、而も旺盛な研究心で爾來二十三年。當社の今日の發展は一に君の功績によるものと云へやう。愉快なのは今流行の乘合自動車の濫觴をなしたものは君の發案である。新宿笹塚間調布府中間は資金難のため着手が出來ない。そこでフォード五臺を買ひ入れて右二區間を運轉した新宿笹塚間の料金が一人二圓二十錢、今の相場に比すれば、五人乘ハイヤー横濱往復の値段である開通當日は折柄櫻の滿開で、近鄕近在の百姓衆が殺到し、起點笹塚に於ける混雜は負傷者數人を出

したと云ふ騷ぎであつた、など云ふこともある。

◇

帝都交通統制問題は過去に於て、京王、京成、王子の三電鐵會社の合併計畫された當時から、君の主張した大理想である。今や、この問題を具體化せんと私利、私慾を棄てゝ努力してゐるのである。現在帝都を中心とする官、公、私營の交通機關を打つて一丸とし、半官半民の資本金六億圓の大交通會社が生れ出んとする時、君の健在を祈ること大きい。

有島健助

◇

明治製糖が、わが糖界に於て嶄然傑出した特色を有し、その基礎の堅實なることはすでに定評のあるところである。

すなはち、同社はまだ社債を發行したことがないと云ふ輝かしい存在となつてゐる。かくて他社

と異りて、金利負擔もしない爲めに、生産原價は著しく低廉となり、平均賣値に對して四圓六十錢の利益を擧げて居る。更に子會社としての明治製菓その他への投資額六百三十八萬圓が平均配當收入六分と見て三十八萬圓、この外銀行預金一千三百四十萬圓を擁して居るからその利子四十七萬圓合計一千三百三十二萬圓の利益、拂込資本金に對し三割一分四厘の利益率となり、前期には二分增配を豫想されたが、それも一割配當據置にして自重あるところを見せるなど、とにかく當社は何處までも斯界に於けるユニークな存在たるを失はない。この明治製糖に專務の椅子を占め縱横にその敏腕を振つて居るのがわが有島健助である。

◇

先年、明治製糖はいはゆる脫稅問題を起して世の視野を蒐めたものであつたが、長らく社長として會社を主宰して來たところの相馬半治がその責を引いて、後任の椅子を原邦造に讓つて平取締役に下つた。同時に、有島專務の位地は却つて、ます〳〵重要性を帶びて來た。蓋し、君が多年相馬前社長を補佐して內外の社務を總覽し、明治製糖今日の大を爲さしめたるその功績は何人と雖も否めないであらうし、また事實、君の居ない明糖は想像さるだに落寞肅條たるものがあるであらう。

君が糖業界の人となつたのは相當に古い。鹿兒島造士館を卒業して大藏省に入り、長らく彼人生活をしてゐる間に、明治二十七八年日淸戰爭の結果、臺灣がわが國の領有に歸し、總督府が設置されたので、氏は進んでその稅關事務官となつた。維新の臺灣の實情は文字通り全くの未開地、當時白面の有島青年は蠻地開拓の爲め勇躍して渡南し、こゝに相馬氏と有識る機會を摑み、糖業界の元勳たる樓機となつたのである。

◇

現在に於てこそ、わが國の糖業はわが重要產業中の白眉として、完全に自給自足の域にまで、飛躍的な發展を見、業態すこぶる有掛に入つて居るものゝ、明治製糖の創立された當時は、未だ海のものとも山のものとも、全然、見究めもつかなかつたらう。

しかも、先見の明と確心とを有せる君等は、雄々しくも萬難を排して成功の鍵を摑むべく堅き決意の臍を定めて、勇ましくも製糖業へのスタートを切つたのであつた。そして、今日までの苦闘の間、もちろん、政府の保護助成政策も與つて力あつたであらうが、技術の點に於て、或は經營の點に於て、また、その他萬端に至り細心なる注意と大膽なる手腕とが振はれざる限り明治製糖今日の

成果を納め得なかつたであらうことは想像するに難くない。

爾來幾十星霜、わが糖業界の歴史には幾多の波瀾と、少なからざる曲折とが繰り込まれて居る。その間、文字通り臥薪嘗膽の苦しみに嘗えいだことも一再ではなかつた。

◇

外國糖に對する壓迫、內地需要の不振、輸出販路の梗塞等々、列擧すれば、わが糖業界に對する不安も今尙ほ存在しないではない。けれどもいま靜かにその辿り來つた苦難の道を顧みれば、蓋し隔世の感を禁じ難いであらう。關稅附加稅摘癈も沙汰止みとなり、糖業助長には手厚い保護が加へられて居るが、それも要するに、事業そのものに自立性があるからに外ならないであらう。

眞に筆者は、この明治製糖が社礎の鞏固なる點に於て、斯界に並ぶものがないと云つた。かく、堅實第一を誇り得るに至つたのは有島專務等の獻身的努力に負ふものであることは、固より論を俟たないところ。まつたく、君こそは明糖生みの親であり育ての親であると云ふも敢て過言ではあるまい。

前社長より現社長まで二代の社長を補佐し、內外重要の仕事を切り盛りして、社の前途を光明に

導く君の懸身の努力も亦偉なる哉と云はざるを得ない。

明治製菓以下九社をその翼下に、糖業界に巨然たる存在を示す君の名聲は、益々輝きを增すであらう。

石坂泰三

◇

一家には後繼者が決つてゐる。會社にだつて後繼者が決定してゐていゝ筈だ、と第一生命の矢野社長が云つてゐる如く、二代目社長として、石坂泰三が總會でも諒解濟みである。さうして實際には既に多年社長としての仕事を切り廻してゐると觀てよい。矢野社長の第一生命に對する地位は、實に絕對的であると云ふこと、石坂は何人の目から見ても、二代目社長たるべき資格と識見を重ね備へてゐる人と云ふこの二點で、何の危惧なく次期の社長を決定せしめたのである。

「最大の會社たるにあらず、最良の會社たらんとす」と云ふのが、明治三十五年、相互組織によ

る第一生命を作つた時の矢野社長の理想であつた。誰一人として顧るものもない悲哀の中に、五萬圓の基金を集めて事業を開始したのであつた。以來努力の結果實績は擧つて、昭和五年明治生命を拔き、七年千代田を追ひ越して、今は日本生命の牙城に迫つてゐる。第一位の日本生命に比べても契約の内容に於ては、寧ろ優つてゐるのではあるまいか。この發展は、矢野社長の一人一業主義を以て「量よりも質」と云ふ經營方針と、相互組織の理想が今日の第一生命を築き上げたものである又それ以上に矢野社長を中心とする陣容が如何に整備されてゐるかを推察し度い。殊に保險事業は事業の主體が、一般事業會社と異つて徹頭徹尾人の運用にあることを想へば、尙更その感が深い。この陣容の第一線に立つて努力を重ね來つた人は、專務の石坂泰三である。

◇

君は明治十九年生れ、秀才の雲集した四十四年に帝大獨法科の出身、同期には、吉田茂、小栗總監、三宅正太郎などがある。大學院を終へて遞信省入をしてゐた際、岡野敬次郎博士の推薦によつて第一生命入りをなし、歐米保險事業視察旅行の後、大正十年取締役支配人となり、九年專務となつたのである。君の入社當時は、六大生命にも數へられない微々たるものであつたが、今日の大成

には、君の蔭れた巧績の大なるものがあつた。蔭の人だけに、これまでは華々しい存在ではなかつたが、取締役に參加の頃から、保險界に重きをなすに至つたのであつた。君の机上には、常に學術的な本が山積してゐて、社員にも讀書の必要を說いてゐる。殊に實際智識と研究心と相まつて生保界に立つ處、大きな期待がかけられるのである。

我國生保契約高は既に百十億圓を突破してゐる。その保險金によつて、公債、社債、地方團體に融資してゐる金額は、二十二億四の巨額を數へてゐる。從つて事業界に於ける役割は益々重要と見なければならぬ。尙一面契約者の掛金を如何に安全に運轉するかに付いては益々其感を强する時代となつて來た。

正義觀の强い、事業に對する不安のない君に最も多くの期待のかけられる所以である。保險事業の勢力が增大し、使命が加重して來ると同時に、これを指導する人物の社會的地位も高まつて來る近く第一生命社長の椅子の約束されてゐる君の將來は實に洋々たるものである。

× × ×

石原廣一郎

◇

何れの時代、何れの社會に於ても、親譲りの身體一つを頼みに、精進これ勤めて、自己の存在を天下に知らしめることの出來る程の者は、慥かに凡人に見られないしつかり者である。その築き上げた資產の點に於てなら、より大なるものは尠なくない。またその主宰する事業の規模の點に於てなら、これを遙かに凌駕するものも勿論乏しくはない。然し、まつたくの腕一本から、年齢やうやく不惑を越すこと幾許でもないのに、孜々奮鬪、遂に今日の石原合名、石原產業の諸會社を主宰するに至り、遠く南洋の天地に鏞業、海運の業を營む傍ら、また、祖國の現狀を憂ひて、大川周明、田中國重大將と相はかり神武會、明倫會に財的援助をする姿を隱顯させる石原廣一郎君は、當今の財界に於ける大きなる存在と云はなければならぬ。

君は明治二十三年、京都吉祥院に孤々の聲をあげた。明治四十三年、府立京都農林學校を卒へ、

一時、京都府廳に一介の技手として腰辨の生活をしたこともある。當時、君の腦裡に描かれてゐた理想は高文にあつたと云ふことである。將來の希望に燃えて立命館大學の夜學に法律を學ぶ。多年の願望を達すべく一二度高文の試驗にも應じたが、語學の不得意に依り、高文への希望は失敗に終り、失望の中に明日への準備を怠らなかつた。

恰度この時、數年前南洋に渡り奮鬪してゐた弟新三郎君が福音を齎して歸京した。この新三郎君と云ふのは、京都府立の農林學校に學んで、卒業後直ちに南洋に渡り、三五公司の護謨栽培に從事してゐた。新三郎君は一通り南洋の事情にも通曉したので、小規模でも自ら經營者となつて活躍すると云ふ希望を携へて歸京したのであつた。

◇

大體、君の生家は代々農を營み、田地も相當には所有してゐたが、京都市の發展につれ土地の騰貴から小資產家の域に達してゐたので、一萬五六千圓を投じて新三郎君の希望を容れることになつた。時恰も君が將來に對する方向の轉換を考へてゐた時でもあつたので、新三新君の提言により相協力して南洋に渡ることゝなつた。

ところが、護謨園經營は、植付後四五年を經過せぬと收入を見られない。そこで手薄な資金の爲め窮境に陷り、窮餘の策としてやつた雜貨商が又豫想に反して失敗に終つた。又京都の技手時代に習ひ覺えた測量技術を賣物にして、事業の中心地バトバッパ町の水道工事を請負つて見たが、これまた失敗に終つた。兄弟二人の窮迫は益々甚しくなつて來た。

◇

偶々、バトバッパ町の附近を流れる川の上流に鐵鑛のあることを聽き込んだ。炯眼の君は直ちにその採掘權を得んとして策謀を開始した。負けじ魂と不撓不屈の勇猛心を以つて、とう〳〵押し切つた。其背後にはワイヤロープ製作會社として名をなす某社のカルカッタ向發送の品代金六七萬圓が原因をなして君の今日の幸運を生んだなど云ふ挿話もある。

採掘權を執つて歸京するや、中川小十郎氏の力添を得て八幡製鐵所と鑛石賣買の契約を結び再び渡南した。これが君の事業界へのスタートである。時に大正九年であつたと思ふ。

そこで、南洋鑛業公司を創立した。これが現在の石原產業海運株式會社の前身である。最初は地より八幡までの運輸は、國際汽船の一手引受けに托してゐたが、大正十三年、船舶部を創設して自前によることにした。

何しろ、南洋最初の採鑛のことであるし、勞働者の募集、訓練、統制、運搬その他、經營上幾多の難局に遭遇したが、兄弟よく力をあわせて奮鬪をつゞけ、四五年にして業礎を確立した。その後鑛區も擴張して、現在では年額八十萬噸前後を內地製鐵業者に輸送すると云ふ狀態となつた。所屬の船舶も十四隻、十一萬餘噸を數へるに至り、南洋に於ける代表的實業家の地步を確立されたのである。又朝鮮に推定鑛量約二億噸の鑛區に近々着手する筈。南洋鑛石に比して品位は惡いが諸掛割安で採算可能の見込みと云ふ。かくて日本源鑛政策の爲め萬丈の氣を吐いてゐる。

◇

數年前、君は大阪商船、南洋郵船、ジャワ、チャイナ汽船などが組織するジャワ運賃同盟と猛烈な競爭を展開したことがある。即ち君の所有船は常に片荷であるのを幸ひ、名古屋——ジャワ間の定期航路を拓いたのである。この競爭によつて石原產業は約二百萬圓位の損失を負擔したが、その代り我國製品の南洋進出に資した點は實に甚大なものであつた。のち此競爭は遞信省の斡旋により最高協定賃銀を舊賃銀の二割引と云ふ處で妥協が成立した。

目下の事業は鐵鑛業の外、シヤムでは銅鑛業にも手を觸れ、又往年鈴木商店の經營した南洋倉庫を手に入れて、大阪商船、南洋郵船に對抗してゐる。ジョホル王國に於ては、最高の多額納稅者として、日本人の爲め氣を吐いてゐる。

遙々南洋の天地に生命を賭しての活躍、多年の苦辛經營やうやく報はれて、安堵の胸を撫で下すまもなく、君は愛國の熱血に燃えてゐる。さきに五・一五事件の大立物として世人の耳目を聳動せしめた大川周明博士、明倫會の田中國重大將とは、肝膽相照す仲、その活躍資金は君の義俠によるものと傳へられてゐる。

祖國の現狀を憂うる痩身長軀の君は、その昔を追懷して果して如何なる感激に耽るであらうか。

因に今回前記石原產業海運を中心として生れ出た南洋海運會社に一言觸れて置かう。同社は神戸日蘭海運商會決裂後の對策として、石原產業、日本郵船、大阪商船、南洋郵船の四社が、協調出資の上設立された會社である。その成立經緯は、表面遞信省の斡旋によるものとされてゐるが、內實は石原の書き下しに寄る筋書である。神戸會商を決裂させた責任上、君は其善後策として思ひついたのであらう。會商決裂後、遞信當局は拱手してなす所を知らず、漸く石原の提案による合同案を作り上げた狀勢である。中途板谷順助の橫槍により種々の紛糾はあつたが、兎も角、日蘭會商に對する邦船側の準備工作は完成した。從つて、いざ日蘭海運會商が開催される場合は、我國の立場に非常な强味を加へた譯である。

井上治一

◇

東洋レーヨン會社に新溫情主義を振りかざして、同社を切盛してゐる人に常務井上治一がある。佐賀縣出身、明治二十年生れと云ふからまだ〳〵これからの人物である。明治四十一年神戸高商を出身、それから一ツ橋の專門部に入り四十三年社會に出る。學校時代は、珍しいまでの俊才形で、殊に英語は得意中の得意であつた。

どうも自分の希望とは、反對へ反對へと歩いてゐる間に、何時の間にか、今日の大成をした人のやうに思はれる。尤も君の卒業當時は相當にせち辛く、學校を出たからつて簡單に就職の出來る時

代ではなかつた。先づ君は意に滿たぬまゝに明治火災に入社した。保險事業にさして興味をもつでもなく夢の如く五年を經過して愈同社を去る機會が來た。それは同社の專務原錦吾が姉妹會社東京海上の各務鎌吉と意見合はず明治火災を去るに當つて親分原と進退をともにした。

五年の浪人生活を味つた後、三井物產大阪支店棉花部に嵌いた。時の同部長は兒玉一造で、その下に一年位世話になつた。英語の達者な處から兒玉の推薦によりテキサスの出張所棉花買付主任となつて渡米した。以來歐米を股にかけて駈けずりまはつて十三年といふ海外生活をなした。

君が米國で棉花の買付に東奔西走してゐる頃、三井物產の棉花部は東洋棉花會社となり、棉花部長兒玉一造は東洋棉花の專務の椅子に就いてゐた。多年の棉花買付から、君は終生の事業として紡績業に身を投じ度いと云ふ希望を持つに至つた。當時東洋棉花が新に紡績會社を作ると云ふ計畫もあつたが、遂に實現に至らなかつた爲め、一時の心積りで上海紡績に出かけた。東洋棉花の紡績會社經營も兒玉の突然の死によつて、大きな支障を來たし、君のあてごとは、すつかり外れた形となつた。遂ひうかうかと四年を上海で辛捧させられて終つた。

上海でくすぶつてゐた君に、思ひがけなく降つて湧いたのが、東洋レーヨン專務の椅子であつた

丸も君と東洋レーヨン現專務辛島淺吉は、ニューヨーク時代に一緒に仕事をしたこともあるので、「やつて來ないか」といふ辛島の請ひに君は快く應じたのだつた。

同社の重役陣に列して以來、君は購買の方面を擔當してゐる。その方法と云ふのが、又君獨自のものである。使用原料の中で硫酸、曹達が一番金高を占めるのであるが、三井物產から、それらの全部を買入れやうとしない。特定の一箇所から買入れることは、良くて良くない。情實が出來て兎角高くなり勝であるから自分は各方面から買入れを遣ると云つてゐる。

東洋レーヨン會社の新溫情主義の强化徹底には、君自ら溫厚親切な紳士だから、持つて來いの人物である。溫情主義の對象は個人、工場の職工、社員に限らず、土地の商人にまで押し擴めやうとしてゐる。君は何時までも購買の人でもあるまい。會社の外國取引は益々增すであらう、外人との接觸なら得意中の得意とする處、君の本領は寧ろ此の方面にあるものと見られる。ともかく、君の活躍の舞臺は愈これから幕があく。

× × ×

池尾芳藏

◇

増配と増資の競演時代、これが最近電力界の姿である。爲替安で外債の利拂と元本償還に負擔加重を強ひられて、インフレ景氣から遠ざかつてゐた電力事業界も、漸く軍需工業などに喚まれて景氣線に浮び上つたのである。事業の本質が地味であるから、一割二厘の高配率は及びもつかないが資本が億を以て數へる電力事業の配當復活、増配、株價の上進は、景氣行進への華かな伴奏となる

電力國營、電力の農村普及化、等兎角財界の問題となり勝な時社業の擴張に猛進し、關西より遂に關東にまで進出した日本電力社長池尾芳藏はどんな抱負を持つ人か。

君は明治十一年江州草津に生れ、小學時代身體の虚弱だつた爲め、京都府立一中に入學してからは、運動第一に轉向し、漕艇、野球、何でも來いのスポーツマンとなつて身體の鍛錬に意を盡した當時の運動家の例にもれず、相當あばれ者であつたらしい。

三年頃から、酒、煙草を呑んだと云ふ。明治三十七年東大政治科を首席の吉野作造と共に銀時計組で卒業、將來を嘱望されて遞信省入りをした。

後、職を離れて浪人生活の悲哀を味つたこともあつたが、大正元年大阪商船會社に懇望されて經理課長となり、漸次才腕を認められて重役陣に入る。偶々歐洲大戰の好況の波に乘つて同社が大飛躍をなすや、所謂商船系の實業家によつて、日本電力の創立をみるに至つた。創立と同時に社長山岡順太郎の下に專務として社業を背負ふことゝなつた。

日本電力創立より今日に至る君の生活課程は、さながら日本電力界の發達史であり、闘爭史である。大正、昭和を通じて電力界の紛爭で、直接或は間接に君の影の投じてゐないものはない。君は性來俊敏で異常の事務的才能を有し、着實、固着性がある。加之大の負けず嫌ひのガンバリストである處から、これら限りない戰ひに打ち勝つて來た。

殊に十五年から八年間に亘る庄川流木權問題の騒ぎは、日本電力事業の將來に關する問題だけに精魂を盡して對抗した。終始一貫、不動不變の根强さから、電力業者の爲め萬丈の氣を吐いて有利な解決を觀た。又黒部川水利權問題で不正の嫌疑を受け、會計帳簿は六ヶ月に亘つて押收され、當

々たる世の非難を一身にあびたが、結局一種の風説として解決したなど、此間可成り苦難にあつたが、絶始一貫「千萬人と雖も我行かん」ことを處世の信條として如何なる難局に向つても、強大なる戦闘力を以て、相手方を粉碎して行く。この戦闘力が、日本電力をして、今日の大をなさしめたのである。君は朝鮮の電力統制を目ざして、朝鮮電力會社を起した。内地、殖民地、共に電力統制の問題重大化する時、電力界の麟將君の活躍の舞臺は益々廣い。

井坂孝

◇

資本主義の成長につれて金の力は益々強く、人が金を使ふのでなくて、金が人を使ふ時代を來してゐる。金の威力は人間の活動を左右するのみでなく、屢々人間の生命をすら自由にする。その爲め一個の算盤、一個の金庫にしか値せぬ人間が益々増加する傾向にある。斯樣な社會的情勢にあつては、人間が本來の使命を觀じて活動する場合に金の必要が不可分になるは必然の結果である。して見れば金も亦決して蔑視の出來ないものと謂はねばならぬ。

人間の活動に金が絶對必要の社會となるにつれて、財界に有爲の人間が愈集中される傾向も亦見逃がせぬ事實であるが、その中で日本財界の麒麟兒と云はれ、その將來に多分の望みを囑されてゐる一人に井坂孝がある。三井の池田、三菱の串田、住友の小倉等人傑勘しとしないが、これらは何れも主人持ちであり、既成の人である。新たに興る者は、製紙の藤原、電氣の小林、今語らうとする井坂に指を屈せねばならぬ。

井坂は、もと東洋汽船の出身、ニューヨーク支店長を勤めたことがあるが、その當時の君は、俊敏と剛直を以つて聞え、時既に將來を期待されたものであると云ふ。久しく横濱財界の元老として商業會議所會頭、横濱取引所理事長、横濱火災社長其他凡ゆる事業に關係して來たが、其後、東京瓦斯の社長に乘り出して、今では日本財界の俊傑として重きをなし、横取、横商を後進に譲つて東京瓦斯を中心に存分の飛躍を見せてゐる。

◇

財界人の常として、金儲けにのみ沒頭して、讀書、修養に意を要ひる人などは、實に曉天に星を

望むが如くである。殊に甚しいのは、黄金の奴隷となつて、世に云ふ所謂高利貸的人物も決して尠くない。その中にあつて、井坂は理論經濟の原書に目を通すと云ふ型の人である。

横濱財界に多年元老として重きをなした君は、常に行き詰つた會社の整理を持ち込まれて、否應なしに引受けさせられる傾きがあつた。さうした會社を一意更生させては、又元の持主に返す。その緣故によつて經營の陣に割り込まうなどとは決して考へない。人の弱味につけ込んで、他人の事業をまきあげる多くの實業家とは選を異にしてゐる。君が財界にあるのは、財を得る事ではなく事業を樂しむ點にある。

一昨年、東京株式取引所理事長に推薦する運動が猛烈に起つた。關係者は君を最適任者として熱心に勸説したが、どうしても受諾しない。瓦斯會社の方では心配して、どうしても引受けねばならなくなつたら、どうしますかと聞いたら「財界を引退しやう」戯として云ひ放つたと云ふ事である。

剛直、廉潔、人に屈することを好まない。目下産業合理局の顧問を兼ね、日本産業の合理化と統制の爲め豐富な識見と明敏な頭腦を以て活躍しつゝある。目下財界に大きな足跡を印しつゝ歩む君の將來は大きな期待を以つて見られものと云へやう。

池田成彬

◇

三井合名に於ける池田成彬の覇權は成つた。君はいま、ピラミツトの頂上に立つて嵐の中を「我れ獨り行かん」としてゐる、君は、今一個の人間成彬、一三井財閥の大番頭と云ふよりか、日本資本主義の運命を背負つて鋒臺の正面に押し出されてゐる人である。資本主義將來の動向に多少とも關心を持つものは、いやでも池田成彬と直面しなければならぬ。君の存在はその意味で全的である

◇

非常時日本の尖端的表象——血盟團と五・一五事件——に對して國民は漸く興奮から覺めて、今では當時の情景を客觀的に展望する冷靜さとなつた。血を以て彩られたこれらの事件は如何なる結果を生み出したか。この事件の價値判斷は人々によつて各異なるであらうが、とにかく政治上には政黨内閣が影を潜めて協力内閣、ファショ内閣に近いものが出現した。

併し財界は藏相井上準之助、三井合名理事長團琢磨を失つただけで、それに何等形式上の變化は認め得ないのである。一つの組織とこれに對する個人の價値に就て深〳〵考へさせられるものがあるつまり事件は經濟機構の上には何等の變革をも齎さなかつたのである。

◇

人間池田成彬は、重厚な性格、高潔な人格、高邁な精神、深厚な友誼、それに實業家としては信ずることも出來ない程の金錢への恬淡さ、實に稀な紳士である。

しかるに、ひとたび組織人としての池田は、無慈悲にも等しい壓力、迫力、速力とを以て、何處までも相手方を粉碎する體の人物である。例へば、森銀のコール引上げによる鈴木商店沒落、東電整理、王子による製紙界統一、更に世人の注目を惹いたドル買事件、何れも世間常人の企及することの出來ない放れ業である。個人及び組織人としてのこの二重性格、これが最も端的に現はれた例として世間に云ひ傳へられてゐるのは、岳父中上川彦次郎の遺族に對する君の辛辣な貸金請求振りである。個人としての君は、身錢を出して遺族を心配したが、一面一歩も假借せずに貸金の取立を實行したと言ふことである。

ところで一度相手方を信用すると隨分思ひ切つた貸出もやり、然も立派に取立てゐる幾つもの實例がある。公人としての池田は、すべて三井財閥の利益を前提として行動する。いさゝかも「私」がない。だから怨むもの、不平を云ふものがあつても、一人として君に後指を指すものはない。君のどこを指しても、一點の暗い半面がないからである。

◇

池田の財閥轉向案は昭和四年歐米漫遊の土產だと云ふのが一般である。あの當時、すでに五・一五事件の萠しが成熟しつゝあつた。國本社の理事たる池田の耳には、當時デフレ政策に惱み、軍縮會議の結果に憤激した呪詛の聲が聽えてゐた筈で、池田自身、それとなく三井財閥の行くべき道、延いては日本資本主義の運命と云つたものに、多大の關心を持つてゐたと想像される。

ところが關男の「悲劇」となつて池田の合名入りが現實され、矢繼早やに、世に云ふ「轉向案」なるものが發表された。それに資本主義弊害の原因は、一に財閥の責任のみではないといふ認識が、漸次深まつた勢もあつてか、池田式轉向を機會にアンチ三井の風潮は事實上大分緩和された。けれども、元來資本主義の獨占强化は、好むと好まざるとにかゝわらず、世界的共通現象である。それ

は資本主義がその自己運動を貫徹する上に當然辿りついた段階だからである。轉向とはこの必然の段階を出來るだけ圓滑に、摩擦なしに推移させる過程に外ならない。この點池田は、なほ一層の用意と工作を必要としないであらうか。

最近くらい「國家」「愛國」の言葉の輕々しく亂用されてゐる時代はあるまい。恐慌の過程にある日本資本主義の全運命を背負つてピラミットの頂點に立つ君は、これを如何に指導せんとするか。

梅浦健吉

◇

財閥暴露小説「眞理の春」で梅浦は放蕩實業家若尾の爲めに向島の待合で骨拔き泥鰌にされ、千萬圓の大穴のあいた東洋モスを背負ひ込まされたと書いてゐる。實際にも九百萬圓餘の負債があつて、當時、一部では再起不能を懸念されたものであつた。その男が今は羊毛工業界の麒麟兒として押しも押されもせぬ地位を占めてゐる。起伏萬丈は人生の常としながら、目前の苦境、現前の榮達のみを以つて、人物を評價し去ることの危險を最も雄辯に語るものである。

學歴は水産講習所出身、性格は學者肌で、他人を信ずることの厚い人物である。それが君の失敗の原因でもあつた。君は東洋モス引受けに關して苦杯を浴せられるまでは、相當好調の波に乘てゐた人である。學校卒業後、朝鮮水産會社に勤務し、技師或は支社長として約五ヶ年の間、漁業と魚市場經營に從事した。大正二年に東京に轉じて大倉入りをしたのが、畠違の方面に飛び込んだ最初である。數ヶ月の間先代喜八郎の秘書をやつた後、選ばれて小樽木材會社の整理を鞅掌することゝなつた。丁度時代が幸した點もあつたか、數百萬の利益を擧げて會社を復活し、自らは引き上げて先代の秘書役として大倉財閥の樞機に參與することゝなつた。かくて順調な數年を送つた後大正十五年に至り有名な沿海洲の山林伐採問題の時、林業組合の代表として沿海洲林業利權交渉の使命を以つて露都に渡つた。此の交渉に於ては君の外交的手腕は遺憾なく發揮されたのであつた。露國一流の引き延ばし外交に禍されることなく、相手の策術を看破して對戰すること一年半にして目的貫徹に成功した。王子、東拓、秋木、富士、樺工と共に露領林業會社を組織して、此の利權を生かさうとしたが、赤露の勞働法に束縛されて、經濟的な採算がとれず、遂に解散の憂目を見たのは、君

のけちのつき始めとも謂られやう。次に表はれたのが、前記の東洋モス引受問題、これは一口に云へばイカ物を掴まされたのである。若尾の財政不如意を理由に根津の仲介で引受けたのであるが、溫厚な君は缺損二百萬程度と云ふのを其儘に信じた。此の整理に當つても、君は彼等の背德を責め或は自分の人の好さを悔ゆるよりも、若尾が周圍の人々に過められてゐたことを氣の毒に思つた。君は大倉に對する自己の責任を考へ中傷と非難の中に立つて、命がけで此の難關を切り拔けるべく努力した。即、中島久萬吉の助力を得て資本金を十分の一に減資すると云ふ財界未曾有の大鉈を振つた。多くの人より嘲罵されながら苦を苦とせず忍苦久しい努力の結果、東洋モス再興の成果を以つて君の苦勞に酬いた。昭和七年下期五分の配當を復活し、遂に今日の隆盛を來した。それも全然畠違ひに育つた君だけに、君の撓ゆまぬ努力を賞せねばなるまい。

君は實業家には珍らしく學究肌の男で、勉強家であり、健筆家である。寸暇を選んで書き上げた著書も尠くない。「ソヴエートロシヤの現狀と勞働法典」「ソヴエートロシヤの社會保險」など當時のロシヤを知る文獻として今日尙愛讀されてゐる。又最近には「羊毛工業論」を上梓してゐる。

君の熱は將來我國羊毛工業を世界的なものたらしめたい事であらうから、我羊毛工業界に君の存

在こそ力强いものであらう。

大久保利賢

◇

大久保は一昨年、武内重平の後を襲ふて正金副頭取と昇格したのだが、今日では最早や兒玉頭取の後繼者として自他共に許す人物となつた。

勿論君には他の絕對追從を許さない家柄がある。明治の元勳甲東大久保利通の末子で、大久保利武侯を兄に持ち、また高橋藏相の三女和喜子さんの女婿である。生れは明治十一年、利通卿が紀尾井坂で刺された年の秋と云ふから宿命の子である。後年政治界や官界へは一切關心を持たず、まつしぐらに財界、しかも正金畑に根をおろした。君は明治三十六年の帝大獨法家出身、川崎卓吉、故吉田伊三郎などとは、何れも同期生である。若し君が政界又は官界に生きやうとしてゐたのなら、今は相當な地位を得てゐたであらうことは疑ふ餘地もあるまい。

然し、君は默々として正金の平社員、一書記から叩き上げ、遂にロンドン支店支配人、本店支配人、取締役、つゞいて副頭取となつたのである。

昔から「親の光りは七光り」とか「名門に二代なし」とか種々諺があるが、少くとも君に限つては通用されない。甲東と云ふ偉人を父にし、牧野伸顯といふ傑物の兄を持たずとも、君は結構正金の副頭取位にはなり得た人物である。

◇

兒玉頭取も大男であるが、君に至つては見上げるやうな巨軀で、文字通り堂々たるものである。流石にそこいらの平民とは品格が違ふ。ところが外貌ばかりではない。人柄が又どことなく常人と違ふ。一見ヌーボーに觀えて、どこかピンと締つてゐる。銀行家としては、珍らしく線の太い男である。一體行内の信望は、ともすると兒玉頭取を凌ぐものがある。あながち將來の頭取に對する功利的なものばかりとは考へられない。君に對する信賴と、期待の賜物であらう。

君は又頭取に劣らぬ爲替通、國際金融のエキスパートである。由來正金の重役は何れも生え抜きで、いづれも其方面の權威者であるから、この點獨り君のみの長所ではないが、爲替の主と云はれた五十嵐直三が東電入りをしてからは、君が柏木秀茂あたりを督勵して、國際金融の中樞を握る立場にあり、この重任を果してゐることは人の知る處である。

兒玉頭取は、よき後繼者を得て何時でも後顧の憂なく引退出來るわけである。たゞ高橋藏相在任中に君の頭取が實現することは、何となく面はゆい思ひがするかも知れない。尤も藏相は、世の毀譽褒貶など眼中にないであらうが。

小倉正恒

◇

資本主義日本の代表的財閥と言へば、東に三井三菱、西に住友であらう。德川時代に既に別子銅山を中心に當代一の鑛山資本家と成長してゐたのを思ふと、住友こそ日本資本家の鼻祖と言ひ得るであらう。日本の財閥組織形態は、純然たる番頭政治で、財閥の主人公はたゞ資本の保有者としての地位に立ち、實際の經營戰線からは全然逃避してゐるのが常である。住友でその番頭政治の第一

線に立つものは小倉正恒である。

小倉は伊庭貞剛總理事の推輓により住友入りをしたのであるが、この男用ゆべしと眼をつけたのは鈴木總理事である。鈴木の知遇、田中、湯川などの先輩にも愛せられ、遂に多くの同僚を拔いて住友王國最高執政官の榮位を握つたのが昭和五年であつた。

財閥の人的機構を一瞥すると官僚上りが非常に多い。しかも多くの場合それが經營の主權を握つて跳躍してゐる。斯うしたことは、官尊民卑の時代にあつて天下の秀才が官界に志した關係から、自然官界に人材を求めなければならぬといふ結果によつたものであらう。特に住友は官界出身が目立つて多い。古いところでは中田錦吉、湯川寬吉、君も亦官界出身の俊秀である。生れは金澤、大阪での財人堀啓次郎、林安繁、片岡安などは同鄕の人物である。生家は代々前田侯に仕へ、槍一筋で食つて來た舊家だと云ふ。さう云ふと隆起した君の肩骨には古武士らしい精悍さと威力が現れてゐるやうな氣がする。三十年の東大法科出といふから銀行の八代則彥よりは一年の後輩、理事の松本順吉より一年の先輩、學生時代に高文を取つて內務省に入り、二年の間に內務事務官、山口縣參事官とトントン拍子に昇進した。斯ふした順潮の官界生活は僅か二年できり上げて、三十二年前垂

掛けの住友入をした。若くして經濟的發展の前途を達觀したのか、それとも自由奔放な青年正恒の精神が官僚としての生活を許さなかつたのか、この心境の變化こそ君の運命を開拓したサイコロであつた。一躍前垂掛となつた君は入社第一年を總本店にあつて商人實務を勉强し、翌三十三年、經濟事情研究の目的で歐米の旅に出た。當時隔絕の差であつた歐米經濟機構の見學は、若い財人小倉正恒の經濟的關心を躍動させたものあつたに相違ない。歸朝後間もなく總本店支配人、以來住友の母體をなす銅山經營にも卓拔した手腕を見せて次第に地位を得、昭和五年前總理事湯川寬吉の勇退と同時に現地位につき、文字通り住友王國の執政官となつた。

住友に於ける君は、一切對外的には名を求めやうとせず、默々として誠實一貫住友の爲に立ち働いてゐる。入念又入念一分の隙のない迄に仕事に精進してゐる。一見大學の漢學敎授と云つた形で財界人に珍しく物慾に恬淡である。年齡六十一歲、ゴルフを樂しむ。劍道をよくし竹刀を持てば天稟的にある風格を備へてゐる。才氣煥發とは言ひ難くとも、よく人を統制する力を持つてゐる。そして何處となく冒し難い威力のあることは君の身上である。

財閥の主宰者は腕がさへてさへゐればよいと云ふ譯ではない。勿論腕も必要であらうが、要は手

腕よりもその人格と器量である。君にはこの力がある。すればこそ、よく老巧を抑へ、小壯を引具し、住友一門から絶大な信用をうけてゐるのである。小手先でなく實力で行く、これが小倉の全貌である。

大田黑重五郎

◇

久原を「久原君」と君づけで、久原は「大田黑さん」とさんづけにする。根津嘉一郎も、矢張り「大田黑さん」と呼ぶ。それでゐて何等の不自然もなく、至極親しみがある。大田黑は一見、麻生家の資本のもとに活躍する一企業家に過ぎない觀があるが、それでゐて何ぜ東京財界上層部に王者の如く迎へられてゐるか。

◇

大田黑は靜岡縣の生れ、明治二十四年熊本縣の名家大田黑家に養子となつた。先代の惟信と云ふ人は、日本鐵道の創立者の一人で、北九州に於ける錚々たる財人であつた。後年重五郎氏が北九州に雌伏二十年を暮したのもかうした緣故によるものであらう。

大田黑は高商を出ると、一時大阪商品陳列所幹事などをしてゐたが、當時有名な矢野二郎の推薦益田孝の斡旋で、廿七年三井物產に入社した。先づ大阪支店に、それから、三池支店支配人となつた。この支配人當時に於ける彼の活動が、今日北九州に於ける活躍の素地をつくつたものである。恐らく其當時、故麻生太吉との交渉も生れたものと思はる。當時大田黑が政治家としての凡ならざる手腕を振つたのは、故野田卯太郎との接觸である。

野田は後政友會副總裁とまでなつて政治家としての大きな足跡を描いた人であるが、彼が三井の弗箱を握つたのは大田黑のおかげである。三井は又野田を利用して北九州に於ける地盤を益々擴大强化したのである。由來、三井王國と北九州は切るに切られぬ關係にある。三井財閥の興隆は發生學的に云へば、德川以來の爲替業務を土臺とするが、明治以來は、三池其他の炭礦により基礎を固めたものと云ひ得るのである。故團琢磨も九州に默々として働いたばかりに、三井財閥の總帥となつた。そこで、益田も龍兒大田黑を三井物產に入れ、三池に特派したのであらう。

ともかく、三池に於ける大田黒の活躍は、大益田の期待に背かなかつた。野田が大臣になつた時大田黒は「あれも大臣になつたか」と述懐したさうであるが、全く野田も大田黒の前には頭が上らなかつた。尙野田に限らず、九州の政客、目醒しい財人は、多かれ少かれ、大田黒の息のかゝつてゐないものはない。

◇

三井系の芝浦製作所が死線を彷徨した時代、藤山雷太のあとを受け、三代目事務として大田黒が起用された。大田黒としては、物産の本店にでも歸つて益田の庇護のもとに遺つた方がよかつた。しかし大田黒はそんな卑怯者ではなかつた。彼は益田の知遇に感じたばかりでなく、人の嫌がる仕事を進んでやることに興味さへも感じてゐた。ところで、內外の期待に背かず、首尾よく製作所の整理に成功した。彼の成功の秘訣の一半は、天性具はつた人心收攬の御蔭であつた。當時製作所の所員は、この人の爲めなら、生命もいとはぬとまで、感奮して文字通り一致團結して整理に當つた頭よりも、腕よりも彼には高い德があつたと云へやう。

かくして芝浦を立て直した處へ、時の三井合名副理事長の早川千吉郎とのわだかまりから、身を

引くことになつた。それも矢野式のこだわらずに云ひ度い事を云ふ哲理が、やがて氣まづい雰圍氣を來したからであつた。

◇

大田黒の名が、再び財界注目の的となつたのは芝浦をやめてから、鳴かず飛ばずの十五六年後の昭和五年、九州電氣軌道事件の整理からである。こゝでも彼は整理の役を押しつけられた。

大田黒は、たしか麻生老の懇請で、大正三年九州水力の取締役となつた。麻生と云ふ人は、一代で炭礦王となつただけに、徹底的な我儘と短氣とを押し通した人である。然しこの大田黒を識るに及んで、すつかり心を許し、無二の心友として遇した。大田黒も亦麻生を一生の中、たゞ二人の心の友と云つてゐた。もう一人と云ふのは、多年親交を結んだ一代の文豪長谷川二葉亭四迷であつた

九州水力は故和田豐治、先代森村市左衛門、麻生太吉の創立したもので、昭和三年麻生が社長となつた。ところが、昭和五年多年の競爭相手たる九州電軌と接近して、麻生と大田黒が九州電軌の取締役に就任した。すると、數日過ぎて、例の松本松藏（九軌社長）が二千二百五十萬圓の大穴事件を發表した。元來九州電軌は松方幸次郎や、その義兄弟松本松藏が創立したもので、松本は道樂

の書畫骨董蒐集に浮身をやつしたり、その他松方系の關係事業等に投資して、この大穴をあけたのであつた。

松本はこの不正事件を麻生に打ち明けて陳謝した。驚いたのは麻生である。大田黑とその善後策を講じなければならぬことになつた。大田黑はこれは國家の力を借りて解決する外方法がないと考へ、愈不眠不休の九軌救濟運動を開拓した。

時の藏相井上は三ケ月後に金解禁の大芝居を打つべく大童の體だつたのだから、九軌のこの大不祥事件には、のけぞる程びつくりした。流石の井上も、さつと顏色を變へたさうである。萬一、この不正事件が世上に暴露されたら、金解禁どころか、歲末を控えて、どんなパニックが起らんとも限らない。そこで、井上は土方日銀總裁と結城興銀を呼んで、强談的に九軌救濟資金の融通を承認させた。この際の井上は、勿論自己の政策にもなることであるが、麻生や大田黑、殊に大田黑の純眞な態度に感激して衷心から事を取り運んだのであつた。剛腹な井上は、後日大田黑に對して「先日はさすがの麻生さんも蒼くなつた」と自分の蒼くなつたことを誤間化すと、大田黑は「イヤ麻生さんは豪傑ですよ」と輕く一本小手を取つて、今度は井上を赤面させたさうである。

◇

大田黑は、九州電軌の社長(數ケ月前村上巧兒に椅子を讓る)となつて整理にあたり、今日では配當も出來やうと云ふ復活ぶりである。また大田黑は麻生の後を受け、九州水力の社長となり、北九州の電力及び私鐵界を完全に牛耳る人となつた。

しからば、將來の大田黑は、どこへ行くか。最後まで麻生のなきあとを見まもつて、北九州にとどまるか、或は又一度中央財界の大舞臺で、往年の切れ味を見せるか。恐らく、大田黑自身はどうでもよいであらう。

若しこゝに一人の政治家がゐるならば、多事多難の大滿鐵の總裁に迎へて、思ふまゝ大田黑の天分を發揮させて見るであらう。

× × ×

川田順

◇

住友家の事業は百花爛漫である。今度のインフレは住友の大當りである。その仕事が重工業に偏してゐたことが、時にとつての幸ひでもあつたが、一つは人の力にも原因する。

合資の總理事小倉の下に、常務理事として果敢な働を見せてゐる川田順がゐる。君は住友の重役としてよりか、アララギ派の歌人として令名高く、歌では勿論主人吉左衞門の先生格である。東大を出ると、すぐ住友入りをしたと云ふから、監事の松本順吉同樣、子飼の住友ッ子である。總本店詰となつてまもない少壯時代より理事の卵として折紙のつけられた人物ほどあつて、才氣潑剌、又明朗である。本店經理課長、製銅所支配人、更にビルデング常務となり、續いて合資の常務理事に榮進、現在住友系諸會社の重役陣にあつて總理事小倉のよき相談相手となつてゐるが、年から云つても、文字通り拔群の榮進と云へやう。

支那に旅行すること數回を重ね、住友家第一の支那通として知られてゐる。歌人としての川田順は、茂吉、空穗と並び稱せられて、財界人としての川田順を遙かに凌いでゐる觀さへある。君は明治時代に文名を馳せた文學博士川田剛の次男として東京に生れた純粹の江戸ッ子である。中學時代に既に佐々木信綱博士の門に入り本格的な三十一文字の道に精進した。歌人、小說家を以つて身を立てやうと志し、東大英文科に入り、同級生の小山内薰など丶同人雜誌「七人」を發行して、盛に氣勢を上げたものである。ところが「金になる實業家になつて歌や小說は餘技にせよ」と兄にたしなめられて政治科に轉科した。故小村欣一侯、山室宗文など丶首席を競つて明治四十年東大を出た

生來頭もよい上に、歌人だけに感受性が强い。其半面、又歌人とも思へぬほど、明快な人で、話し振りから仕事までハキハキしてゐる處、江戸ッ子の故ばかりではあるまい。斯くも事件を直截に解決する人物は殊に大阪財界人には珍らしい存在である。また友人に對しての友情の厚いことは有名で、かつて武林無想庵が、文なしでフランスから歸朝した時、彼を神戸埠頭に自ら迎へて、自分の別莊に引き取つたなど、心ゆかしいエピソートとして知られてゐる。然も何者にも臆せぬ大膽と押しもあり、時代を見る理解力もある。歌集に「陽炎」「技藝天」「山海經」などがある。

庄司乙吉

◇

産業日本の最高峰をなす紡績界に、堅實を謳はれてゐる東洋紡社長阿部房次郎は突如東紡社長、紡績聯委員長の職を一度にやめてしまつた。其の後釜に据つて社長になつたのが、副社長の庄司乙吉である。君は不撓な忍耐と圓熟した器量を以て、英雄肌の津田信吾と勢力伯仲してゐる。阿部社長の時代から社内行政を一切獨りで切り廻してゐた事だし、脇役時代から次代統制者として約束されてゐたから、今更社長になつたからとて社内の統制は微動だにしない。

君は前社長阿部に增して調和性に富む人。身體は小さく、風采もあがらず、それに時代ものの背廣を着用のあたり、何處にあの氣骨と機略が抱藏されてゐるかと思はれる。物事に對するネバリの强さに於ては財界寸度及ぶものがない。三十一年に一ツ橋を出て、紡聯に入り會員會社融和の爲め紡聯の機能を十二分に發揮して、名書記長の名を謳はれたものである。のち、三十才の若さで今の東洋紡、當時の大阪紡に支配人として招かれ實際經營の舞臺に働くことゝなつた。

以來快刀亂麻を斷つと云ふ腕は揮はないが、糸のもつれをほぐす根氣と熱心で、實質の重役の仕事をやつてゐた。そして其頃から、將來主宰者となる折紙を斯界の一部からつけられてゐたのであつた。阿部か、谷口、武藤のやうな獨裁者でなく、社長としての經營の大綱を握るだけで、一切を庄司にまかせてゐたから、大東洋紡の經倫は、凡て君の頭と腕によつて行はれたものである。

今まで何回となく歐米纖維工業を視察した外、大正八年十一月、米國で第一回國際勞働會議の開かれた時は、資本家代表武藤山治の顧問として出席、更に大正十四年、北京で開催された支那關稅特別會議にも帝國代表隨員として出席するなど、綿業の圖外に於ても相當働いてゐる。

詩藻にも豐で、詩人吐峯として、およそ重役業とは緣遠い境地に置いても、立派に一家をなし、地味で、多分に學者肌の點があり、仕事には畑違の方面でも熱心に研究をする。

内審參與に推薦されてから、間もなく東紡社長の印綬を帶びることになり、更に今一つの椅子は紡聯委員長である。一體紡聯委員長は可成うるさい仕事である。現在斯界では既にやかましい問題になつてゐるが、綿業界としては對外的にも對内的にも多くの問題が山積してゐる。尙その何れもが未解決のまゝである現狀に於ては、對立關係にある會社が一方的な態度を持してゐたのでは圓滿

に行かない。その點で、これまで委員長としての立場から、比較的不偏の體度にある東洋紡が最も適任であることは云ふまでもない。で結局は東洋紡の重任、庄司新社長の委員長繼承はまぬかれぬものと思ふ。尙現在では、繼ぎ役としての委員長は君を除いて見出せない狀態であるから、受任の外あるまい。

何と云つても綿業界生えぬきの人であるだけに、綿業に關する限り、當代稀の人物である。殊に拔目のない關西人の間を巧みにくゞりぬけて、今日の地位を築いただけに人間が出來てゐる。往年の武藤、和田時代を再現すべき庄司、鹿村、津田時代の來るのも近い將來であらう。

片岡安

◇

大阪財界に巢をくふ集團、大阪商工會議所の內部にも親分、子分があり、ギルドがある。會議所の大親分稻畑は會頭をやめたが、彼の餘勢はまだに大小の姿を見せて踊つてゐる。この稻畑系に楯つく一方の親分片岡安とは、どんな人物か。死んだ片岡直溫の養子で、工學博士建築の技術家である。直溫在世の當時は兎角パッとした華やかさを飾るに至らなかつたが、今は大阪財界に、一方の聲望を背負つて立つ人となつてゐる。この頃目立つのは事業慾に燃えてゐることである。最近の買收會社は、日滿皮革興業、東滿パルプ、高粱工業と滿洲方面投資事業に特に興味を持つてゐるやうである。殊に高粱工業は滿洲產の高粱を原料とする建築材料を製造して、高層建築界の特質を發揮しやうとするものである。その外陸軍新京代用官舍株式會社の創立に參劃して、日夜企業熱擡頭の波に乘つて、自らの事業慾滿足に突進してゐる。

商工會議所副會頭としての君の存在は、君の開口肺を衝く毒舌と、精悍さとにより大いに巾が利く、尙多數の手兵を擁する處からアンチ稻畑の族がしらとなつて、森會頭を煙つたがらせること十分である。大阪工業會理事長の職は、君にとつては、ウチツケの仕事で、根が技術家出身だけに、中小工業家の間には果敢な働きを見せて全幅の信賴を得てゐる。

既にもつと大阪の爲めにも働ける器量の人物であるが、背後に光る親譲りの金力の爲め、常に何分かの割引をして世間に考へられて來たことは、惜しいことであつた。人物としてなら會議所會頭

などには森會頭よりも嵌り役かも知れない。中央へでも出れば、君の押しの強さと、雄辯の力が役立つて、大阪の爲め、大いに仕事をするであらうと期待される。

性來の毒舌に禍されてか信頼を缺く向きもあるやうであるが、度胸と他人の面倒をよく見る長所を持つてゐる。その意味で、君の乾分役をつとめる人物も相當に養生されてゐるから、近い將來大阪財界を背負つて立つ人と見られやう。

君は又郷里金澤から推されて市長の要職にある。金澤市民は故直温翁の申し送りの黄金を目當にしてゐるのではないかなど失禮なことを想像してはなるまい。公私とも多端の將來を持つ人である

河西豐太郎

◇

四億三千萬圓の大資本を擁して、極東最大を誇る東京電燈は、來年上期で創立五十年を迎へるがその間同社を通してみた財界人の榮枯盛衰の跡は、實に日本資本主義經濟の興亡史の觀がある、世界的不況の餘波に、流石に豪華を誇る東電も譯く間に大地に叩きつけられて、若尾一家は沒落した。其後、軍需インフレ、低爲替に幸されて、四分配當を行つて數萬の株主に活を入れ、前期は六分配當とまで漕ぎつけた。何しろ一日四十萬圓の現金が嵌まると云ふから驚かされる。種々の網を張つて、金儲けには萬人血瞳になつてゐるが、こんな現金を扱ふ商賣は外にはない筈、先づ極東第一と云へやう。この尨大な世帶を切り廻はすのが、今書いてゐる河西豐太郎である。

◇

君は所謂甲州系の財人で、若い頃から甲州の熱血氣風を受けて政治運動に沒頭し、三回民政黨代議士として活躍して來たが、親分根津嘉一郎の推輓により東電入りをなし、小林の社長就任を機に拔かれて專務となつた。同時に代議士商賣はきつぱりとよして完全な電氣屋に轉向した。朝八時半から飛び出し小林のよい女房役として斷然光る。事務一切は君の采配になるもの、今では東電ではなくてはならぬ存在となつた。政治家出身に似ず、萬事が事務家肌で、然も半面親分肌の處があり會社内外の信望は加はつて來た。こゝで一言、根津及び甲州人が東電に對して根强い地盤を持つてゐる點に觸れて置かう。東電と根津は、甲州人佐竹作太郎社長時代からの因緣である。佐竹は根津

を見込んで東電に迎へて常務とした。當時資本金百五十萬圓の小會社であつたが、深川電燈、品川電燈の群小會社を合併して、大東電の第一歩を踏み出したのはその頃のことである。だから根津は東電中興の祖を以て自ら任じてゐる。以來、甲州人と東電との關係は一切に深く、東電の運命卽ち甲州系財閥の運命であつた時代さへあつた。だから東電に覇をなすことは、又甲州財閥を掌中に收める者である。小林社長は、凡そ、根津とは相反する人であらうのに、小林が頻りと根津に接近するのも、そこいらの消息を語るものであつて、小林の知策をもつてしても、根津卽ち河西一派の意を受けてゐなければ何事も出來ない。それだけではない、小林は其地位も危ないものと稱されてゐる。以つて河西の東電に於ける影の力は推察も出來やう。

かつて東電、東京ガスを甲州一派に握つて帝都財界を席卷したあの豪勢さを追懷する時、深き今昔の感なきを得ない。今は既に統制力も衰へ、根津小林なき後を思ふと、正に秋風落莫の感さへ起るのである。此時、君の存在は甲州人にとつて力强い楯である。君は其の豪放さに於て、未だ先人に及ばずとは云へ、人物才腕に於ては甲州財閥中興の資として十分期待さるべき人物である。

君の力によつて再び甲州人の眞價が發揮される時、先人と異つた特徴を浮出さずには措くまい。

金光庸夫

◇

由來わが國に於て、政治家としてすでにその將來に大體の限界を置かるゝ二つの職業人があるやうだ。その一つは學者と稱せらるゝ人々であり。また、他の一つは實業家と云はるゝ御仁達である

なる程、こう見渡したところでは、學者として名ありしかも一廉の政治家となつて居る者も見當らないし、財界、政界の二タ道に大成して居る者も特異の一二者を除いてはまづ無いと云つても良ささうだ。けだし、「二兎を逐ふ者は一兎をも得られない」證左でもあらう！

そうした世の定義を破つて政界財界に二股かけて堂々巨歩を運んで居る者ありとすれば、それが特異の存在であるにしても、傑出した人材であるに相違あるまい。われ〳〵は、かゝる人材をわが金光庸夫の上に見出すのである。

◇

君は人も知る如く、現在政友會所屬の代議士として黨内に重きをなして居る。所で、政友會にとつて君が必要なばかりでなく、黨の會計監督として、無くてまた叶はぬ存在となつてゐることはすでに大方の先刻御承知の如くである。のみならず、諸種の勢力相交錯して漸く多事ならんとする黨にとつて、議會開けの黨役員の改選こそわれ〳〵の多大の興味を惹くものであるが、殊に、何人が幹事長の要職に就くか多くの人々に興趣を投げ與へて居る。その幹事長候補者の中にわが金光君の呼聲のかまびすしいのを見ても、君の政治家的の手腕の凡ならざることが理解されるのであらう。

大體君の辿つて來た人生コースの跡を辿つて見るに、明治十年に大分縣に生れ、最初教育家たるべく縣立師範を卒業して小學校の教師をして居たが、後間もなく教師の職をサラリと止めて、大牟田稅務署の官吏に轉向、こゝで役人生活のスタートを切つたのであつた。爾來各地の稅務署、小倉長崎等の稅關に轉勤し、後、福岡縣に稅務署長、熊本稅務監督局等に轉任したのであるが、明治四十一年官界から足を洗つて神戸の鈴本商店に入つた。これが、君の財界人としての第一歩だつた。

◇

かくて、財界へのスタートを切つた君のその後の活動振りたるや、まことに目醒ましき限りである。それが酬はれて、早くも明治四十三年には同店代表として太陽生命の取締となる。また、その翌年には專任支配人に推された。その後、大正二年に鈴木商店を主體として大正生命の創立が企圖されるや、これに參劃して取締役支配人となり、專ら社礎を固むることに精進し、同六年には專務取締に進み、また同年、日本教育生命を買收しその專務をも兼ねて敏腕を振つた。更に、同八年、新日本火災海上を創立して、專務に擧げられ、また、日米信託が鈴木商店に買收されて、千代田信託と改名躍進を期するや、その取締役會長に推されるなど、その非凡なる手腕は財界一般に認められるに至り、斯界に於ける君の地盤は漸く鞏固を加へて來つた。

かくて、君の財界人としての手腕力量、その性格の溫和、恭謙、至誠を以て事に當る人格は、衆望の歸するところとなり、昭和六年選ばれて第十五回國際勞働會議に資本家代表として出席したこともある。

◇

現在君は、前記の大正生命、日本教育生命、新日本火災海上等々の保險會社に社長たるの外、王子電氣軌道、東亞煙草、人造羊毛、日田金山等々の事業會社にも社長の椅子を占め、その他多くの

會社に重役として顔を出して居つて、まさに、押しも押されもしない一流の財界人たる貫録を示して居る。

かつて一兩年前、東京近郊の私鐵の大合同が唱導されたことがある。暉に上つた會社は、京王、王子、京成、玉川電鐵の四社であつたが、問題は何人を社長たらしむるかにあつた。京王の井上篤太郎君、京成の本多貞次郎君、倶に第一人者ではある。併し、何れを立てゝも一方が納まらない。結局、兩君を相談役に、金光君を社長にと云ふ下馬評が喧傳せられたものだつた。この話は立ち消えになつて仕舞つたが、之が實現すれば恐らく君の社長委が新會社に見られたことであらう。

政治家としての君は本文冒頭に叙べて置いた。何れにせよ君に對しては政界人として財界人として大いに期待されるものがある。

× × ×

城戸四郎

◇

松竹對東寶は我が國興行界の二大勢力であるが、この角逐の歸趨が、我が國の演劇映畫の將來を決定するのではあるまいか。東寶が舊勢力松竹に對立するかに觀へる發展を來したのは、一は事業經營の近代化であると云ふ點である。もと興行界には野師的風習がはびこつて事業其ものを水物視して來た。松竹が日活を引き離して今日の王座に地位を占めたのも、この社會の缺點に氣づき、改革につとめたからである。然し既に古い歴史を持つだけに、新興勢力のものに比べれば未だ因習の跡が多いと見なければならぬ。今假りに松竹の殘されてゐる因習を精算して所謂「常識經營」をなし得るとすれば、將來とも王座を持續することは問題ではない。組織制度の變革、今一層經營の近代化することが松竹に課せられた今後の問題である。東寶の進出に依つて猶更其必要に迫られてゐる。城戸はこれを敢行し得る人物であり、又敢行せねばならぬ使命を擔つてゐる。

映畫界と云ふ一社會を見渡した場合、城戸は何と云つても現在の第一人者として擧げねばならぬ人物である。君の松竹入社は大正十一年。因習と傳統に囚はれた映畫界に、近代的な教育を受け、明朗な環境に育つた君の這入つたことは、それ自體既に意味深いことであつた。

君は極めて順調な學校生活を終へて、二十九才の時、松竹合名の副社長として入社した。云ふまでもなく君の夫人は社長大谷竹次郎の養女である。君が學生時代より深い興味を持つてゐた新聞、雜誌經營の理想を演劇、キネマに活かすことになつたのである。君が松竹に於て、第一に遂行したことは、因習の排除である。當時のスター・システムに於ては、徒らに俳優を活かすことのみに力を入れて、映畫自體を默殺する場合さへあつた。從つて、苦々しい俳優の我儘さへも多くの場合赦されてゐた狀態である。そこで君は敢然デレクター・システムへの烽火を擧げた。それから猶一層映畫全體を活かし、藝術的價値を高める爲に、ストリー・システムに更へやうと努力してゐる。俳優が河原者の名で呼ばれた時代から、今日の藝術家としての價値を社會づけた改革には、時代の要求があつたとは云へ、君の撓まぬ努力に據る所又大きいと云はねばならぬ。

◇

興行の經營は、一般の事業と同じく、事業家的手腕を要すること勿論であるが、第一に興行と云ふ特殊性に對して適應する性格が必要である。君を興行人として見た場合、君は一個の藝術家である。小說も書けば、脚色、監督もする。君の書き下した映畫は二三十本を下らない。映畫事業は監督、俳優、技師が仕事の主要部である。從つて君自身が夫れを備へてゐることは實に大きな强味である。

又經營者としての手腕も十分試驗濟みである。日活が未だになし得ずして同社の癌とされてゐる樂士、說明者の解決が松竹では既に行はれてゐる。

日活に對して常識的な經營方法に依つて勝利を博し、今又東寶小林との對立によつて層一層內部の改革に迫られてゐる。

これからは、城戸、白井信郎兩氏の提携によつて大松竹の興廢を決するものであるが、表面華々しく見えてゐる獨壇場にも案外イザゴサが伏在してゐるかも知れない。映畫事業に於ては殊に理解ある獨裁が必要である。議論を闘はしてゐた際には果てるべくもない。松竹は君の現在の地位を確保して、一意惑星小林に對抗さすべきであらう。

栗本勇之助

◇

十二ケ年の會頭、八ケ年副會頭と明治四十四年以來四分の一世紀もの長い間、大阪商工會議所に屋を据えてゐた稻畑勝太郎に對立する親分に栗本勇之助がある。アンチ稻畑の點に於て片岡安、平生釟三郎と同列である。片岡は死んだ片岡直溫の養子で工學博士、金力はウナル程ある處からあくまで强い。この片岡とよい對象にされるのは栗本である。何れも押しの强さ、一言居士、よく似たところがある。しかし兩者の性格は全然反對で、片岡の陽氣に對して、君は陰性とでも云ふか、相當重い感じの人である。君は和歌山縣人獨特の智謀の人であるが、東大時代には哲學をやつたと云ふ變り種、司法官、辯護士、機工業者として今日に至る。君の聰明は却つて大阪紳商仲間の恐れとなるのかも知れない。兎も角大阪財界きつての論客で、これが君の長所となり、短所となつて人格的に人の尊敬を集め得ないうらみがある。大阪財界に於て、これまで持ち味の發揮出來なかつたか

に考へられるもの、これに原因する所か。

商工會議所に問題の起きる毎に立役者となつて、立派な働きを見せてゐる。求めざるが如く見えて、その實相當の野心も伺はれて萬事にそつがない。森平兵衛が稻畑の跡を追ふて會長に押し上げられた時、次の會長或は多額議員の椅子が約束されてゐるやう喞つたことを云ふ向きもある。君としては、多年會議所に於ける一勢力とは云ひ條、競爭してまで會長の椅子など覗ふには當るまい。もつと大きな道が開けるものではあるまいか。

君の事業栗本鐵工所は、よき後繼者を得て不動の基礎も確立した。此際事業と手を切つて國家的事業に邁進したらどんなものか。君の敎養と人格の力を以つて大衆に眞價を問ふて見る覇氣は望まれないものか。云ふならば、來年の總選擧に、まる裸の栗本勇之助が立候補することを期待したい精練された論旨は、將に往年の武藤山治を凌ぐものがある。

◇

かつて、國際勞働會議に、使用者代表となつて出席したことがある。資本主義日本の爛熟期に嵌らうとする時、體驗より出た勞働問題研究の權威者を一人位は中央政界に持ち度いものである。

君は本業である製鐵業に對して製鐵の四權分立を主張してゐる。實際事業の合同統制と云ふことについては、地理的關係、技術關係等に於て深甚な考慮が拂はれなければならない。同じ製鐵と云つた所で、それ〳〵の特異性がある。從つて合同統一にあつてはさうした特異性を尊重し國家的並に國防的資質の完成を目標とすべきである。事業の合同統一と云ふことが、利益の擁護であつてはならないと云ふのである。之れに對しては君は實例を擧げて根據ある主張を持つて居る。

君の主張は寧ろ全國を資本的或は地區的に四ブロック位に分割し、相互に經營單位として對立せしめ、半國策機關として運營したいと提唱してゐるのである。相當思ひ切つた主張であつて實際家としては當然かくあるべきであらう。

後藤國彦

◇

例の東電千葉區域の電燈電力譲渡問題は、意外の横槍に依り、不成功かに見えたが遂に當局及び東電小林を說き伏せた處、後藤は確かに我が電鐵界の花形役者である。君の電鐵界の足跡は今や既成老大財界人の疊をぬかんとするものである。

今では目蒲からは全く手を引いて、專心京成電軌經營とその發展に努力してゐるが、君の仕事はかなりに忙しい。それと云ふのも、事業に對する熱心から夜中獨り鐵道沿線を見廻りレールの狀態車臺の動靜を密かに調べなければ氣の濟まぬと云ふ經營者だからである。この熱意こそ、今日の發展を產み出したのである。

君は明治二十四年、大分縣生れ、法政大學を卒へて、讀賣新聞に入り、入社二年にして經濟部長に拔擢された。後兼ねてより深く接近してゐた鄕男に、その才幹を買はれて、東洋製鐵庶務課長となつて玆に實業界入りの第一歩を踏み出した。之れが大正六年二十七歲の時である。後國際信託の創立に關係して外遊し、歸朝後、三十一歲で內國通運の取締役、日華生命の常任監査、三十五の年には池上電鐵專務、三十八歲で京成電軌專務と云ふ急テンポの出世振りである。

君は智惠、肚、腕と三拍子揃つた逸材である上に金に執着がない。豪放で親分肌の處が多分にある。池上電鐵を辭した時、退職金の內三萬圓を投げ出して大阪ビルに事務所を設け、君に殉じた社

員に、在社時代と同額の給料を與へて就職するまで遊ばせて置いたり、又は五千圓を以て記念品を造り之れを從業員に賜つたりしたものである。かうしたあたりが君の酸いも甘いも、かみ分けた苦勞人であることを物語るものである。君自らは、よく鄉男と川崎八右衛門のお蔭で今日あると云つてゐるが、今や川崎財閥を離れて、愈君の眞價を天下に問ふ時代である。

◇

かの帝人問題では、番町會も酷い目にあつた。永野、河合などが會員に入つてゐた爲めに鄉男、後藤などもまきぞへを喰つたが、君はあんな奸策を弄してまで金の儲けたい男ではない。もつと國士氣分のある人間である。電車を上野に乘り入れた、あの强引の處をまた〳〵發揮して、ぐん〳〵延びて貰ひ度い人である。

× × ×

鄉誠之助

◇

澁澤子亡き後の鄉男は政界に於ける閑公同樣、財界の元老である。東電の總會に閑公の往來の如くサーベルの多い偉觀も、將に元老待遇たる所以であらう。

かの「番町會を暴く」では、流石剛膽無頓着を以て聞える男も、相當痛手だつたらしい。明治、大正の時代と異て今日の如き輿論の時代にあつては、その反映が鋭くかつ種々と異るからである。番町會があらゆる方面へ策動すると云ふので、一時世間不評の的となつたが、實際は會員所謂取卷連のすることで、男自身は一向に與り知ることでない。即ち子分の爲めに看板を貸してゐるのだそうである。と云へば番町會を繞る男への風評は寧ろ寃罪と云へやう。

男をして今日あらしめたのは剛腹果敢な性格に負ふ處勿論、又天稟の高邁な識見を見逃すことは

出來ない。明治、大正と澁澤子健在の當時、大實業家と自稱する連中でも、翁の前に出ては御無理御尤御說の通りで、引下つて來たものであるが、男のみは堂々所信を披瀝して財界の爲め建言したものださうである。

今や功成り、名を果げた上は、少しく中小商工業者の爲に働いて、より大きな鄕男をなして貰ひ度いものがある。一部產業資本家の擁護は、工業倶樂部の門前にサーベルの立つ偉觀を生ずることゝなるから始末が惡からう。

それに、序に云つて置きたい一言は、男が澁澤子ほどの財界世話業的才幹がないと云ふのではないが、澁澤時代ほど世話業の「必要」がなくなつて來た事である。それは一口に云へば日本資本主義の發展と、その行き止りに原因する。澁澤子の口をきいたものが多く發展成長したのは、資本主義の發展途上にあつた爲めである。面倒見た事業が全部花を咲かせ、實を結んで行く世話業は繁昌し、澁澤禮讃の聲はます〳〵高くなると云ふ譯だつた。ところが澁澤が死んだ時は、もう日本資本主義も發展の頂上で、寧ろ下り坂となつた。澁澤の世話したのは子供を育てることであつたが、今後のは成人した人間のイサゴサである。女出入もあれば資產整理もある、と云ふので大變うるさい

おまけに今日の財界には各部門にわれこそと思ふ人物がゐて、世話役振つた男を走り使ひにこそ使ふが、三拜九拜して奉らない。澁澤は有難がられたが、中島久萬吉は蹴落され、龍門社は　が盛つたが、番町會はあの破綻を描いた。もはや必要のない處に第二世澁澤の發生する筈がない。各部門に幹事役位の存在は續くであらうが、全財界を打つて一丸とし、その上に君臨して絢爛目を奪ふ活躍をする世話役なんと云ふものは成長すまい。

然し、男は既に暖簾も古いから資本家的腦力者の最後を飾る人として、花々しく活躍して見て貰ひ度いものでもある。

◇

世の中には國益にはなるが儲らぬと云ふ仕事がある。儲らなければ仲々手を染める者がない。さう云ふ仕事には高邁なる理想を以て、身自ら飛び込み得る人物である。世間の見離した難事業に身を挺して驀進する強さを持つてゐる。

あの氣宇廣大な體度を以て日鐵社長としての活躍の日が來るではないかと云ふ氣がしてならない

これは財界世話業の看板を下した鄕男の一面である。

小竹茂

興銀總裁結城豐太郎の働きは、從來の特殊銀行主宰者としての形を破つて、思ひ切つて活潑なものであつた。東株融資問題、中小商工業金融、起債界の淨化と相當大きい足跡を殘して、インフレ財界に躍る花形の名に恥ぢない。結城は生えぬきの銀行家、安田銀行を出て、井上準之助の膽いりで興業銀行入りをしたのが昭和五年であつた。當時は財界混亂時代とも見るべきで金融主宰者に執つては、隨分擴汎な活動舞臺が展開されてゐた。

當時興銀は中小商工業金融、農村金融に進出して好評を博したものであつた。然し最初中小商工業金融は、專門家仲間では、どこかしらパットしない、それに貸す方ではどうも危げで、まして無擔保貸付などゝはもつての外であつた。この狀勢を見て取つた結城は、たとへ無擔保でも將來建直りの見込あるものを救濟しないのは殘念だとばかり、理事の小竹に劃つて無擔保制貸出に着手した

小竹を責任者としての此方面の貸出は興銀の爲め大いに氣を吐き豫想外の成功を收めた。商業組合、工業組合、輸出入組合への融資は特に目立つた。無擔保ではと躊躇した金融界でひとり興銀の融資は目立つてあざやかなものであつた。興銀の名聲と共に小竹の名は中小商工業金融の本尊の如くあがめられたものである。殊にこの融資で世間の耳目を惹いた活躍は、先年關西風水害への貸出で、中小商工業金融は府縣市の補償金融をスローガンとして、關西の金融界をリードしたことである。興銀として年來の中小商工業金融の腹案は實演者小竹の協力を得て見事に實を結んだのである

も一つ興銀主腦者に就て見逃してならないのは、起債界の淨化運動である。之れは勿論結城總裁就任以來の主張であつた。此の主張を去る一二年の間に實行した。社債は一切擔保付で發行すれば起債界の淨化は實行出來ると云ふ主張のもとに、これを例のオープン・エンド・モーゲージと結びつけて、從來は三〇パーセント位であつたものを社債七〇パーセントまで擔保付發行と云ふ素晴らしい成績を擧げた。

この結城總裁の蔭には市場通の河上理事、公社債界の第一人者公森太郎理事が帷握に參畫したことと勿論であるが、上記二理事の外に小竹理事を背景として、興銀創立以來の輝かしい一大收穫を收

めたのである。

君は愛媛の產、才幹、度胸兼ね備へた將來性に富む人である。

小日山直登

◇

昭和七年銑鐵共販組合が解散して、銑鐵共販會社が設立された際、滿鐵の人選により專務となつた。共販會社は滿鐵、三井、三菱、大倉などの合辨であるから、一つの片よつた財閥から專務を出すことが困難な處から滿鐵に一任されたのであつた。

從來、相場の變動、事業の不安定から各社間に絶えまなかつた紛爭が、君の共販會社が設立されるに當つて、一應平和の保たれることになつた。年額約四千萬圓の輸入は、其全部と云つてもよい數量が、君の手を經て供給されてゐた。處が九年一月、日鐵の成立により、輪西、釜石、兼二浦の所有株肩替を繞つて紛糾が卷き起され、結局共販會社は日鐵と手を切つて、滿洲銑の販賣機關と變

質して今日に至つてゐる。

この紛糾に處して、君の活躍才腕は目ざましいものであつた。極東第一位の日鐵が小日山只一人に掻き廻された醜體であつた。當時、あんな男を日鐵の社長に据ゑ度いものだ、と日鐵側の人がもらしたものである。それ程君の立ち廻りは鮮なものであつた。一面國策を無視して一に滿鐵に追從するものとして、多くの非難を受けたやうであつたが、君はもつと大きな抱負があり、經倫がある一意銑鐵需給の調節を主眼とし、安い銑鐵の輸入を計るなどの國策に觸れたものであつた。

君は又北滿金鑛會社を創立して社長となり、日本產金國策を提唱してゐる。正貨準備の貧弱な日本の財政狀態は恢復する筈がない、金鑛の開發にあると確信してゐる。兎に角山の仕事であるから當る當らないは別として「產金報國」「產金國策」の希望に燃えて滿洲に活躍する君の前途は洋々たるものと云へやう。

事業家としての君を考へる時、滿鐵と切り離すことは無意味である。明治四十五年帝大を出ると同時に滿鐵へ行つた。滿鐵撫順炭礦庶務課長時代、搭連炭礦買收問題に僞證罪として連座し、結局無罪なれど、一時滿鐵を退き、昭和二年より五年に至る松岡副總裁時代理事として迎へらる。

今度松岡が滿鐵經營に當つては、副總裁以上のよき相談相手と見られる。松岡を中心とする滿鐵首腦部に、萬一統制の亂れるやうな場合は、是非一枚加はる可き人物と見られる。斯ふした意味で滿鐵及び松岡とは形式的な副總裁以上の關係にあることが想像される。前記北滿金鑛、滿洲國に於ける他の一面の活躍が考へられる時、この間の事情が明かになるやうに思はれるのである。君を評して、小日山は財界人といふよりも、政治家としての方が適してゐるのではあるまいか、政治家としては大臣になれる器である、と云つてゐる人がある。勿論これはよい意味の政治家であり、賞讃しての言葉である。

◇

明治十九年會津武士の家に生れ、幼少の時代から落城の悲しい物語の中に育つて來た。白虎隊の中には、君の大伯父も親戚の人も參加してゐた。後に二十四萬石の會津が四萬石の南部に移されたのである。其處では昆布の根を食はねばならぬ程の慘めな生活に追ひやられた。廢藩置縣で再び會津へ返されたが、それは君の母の時代であつた。質實剛健の氣質は斯ふしたことから養はれたのである。君は一面非常に卒直な處がある。最近よくファショ的な傾向があるやう評する人があるが、

これは、將來の君の足跡が證明づける時が來ると云ふだけの事で、今は兎角の批判を避け度いが、「搾取を目的に出掛けるから、失望して歸らねばならぬ、滿洲國を開發し、滿洲國の富を殖やして共存共榮の實を擧げることだ」と云つてゐるが、この言葉は、兎角滿洲國に失望してゐる實業家の多い昨今、一つの警告をなすものではあるまいか。君の著書「日滿統制經濟論」は正にこの指導原理のもとに立論されてゐる。

思索の人としての君は、新詩社の同人として「多柏」に生馬、柏亭、大學、晶子と共に活躍して一木一草にも豊富な詩情を盛られてゐる。詩歌は、奇矯も衒氣もなく、僞らざる感情の表現である政治家、實業家のものする綿入作品とは愛に選を異にした風格のものであると云ふ。

今、既往共榮の問題で、にくいまでの才腕を振ひ、滿洲國の建設開發の波に乘つた君の將來には相當大きな期待が持たれるものと思ふ。

× × ×

五嶋慶太

◇

大東京の膨脹と、それにつれて外廓的に張り廻されて行く交通網の整備は刮目に價するものがある。尙大東京交通機關統一の聲も大ならんとするに當り最も著しい飛躍を見せてゐるものに東横と目蒲電鐵がある。この二會社を主宰して氣を吐く五島慶太は、名は專務であるが、社長を置かない兩社に於ては、實質上の社長であり、實權者である。

大正十一年、姉妹會社目黒蒲田電鐵を起して東都電鐵界席卷に着手したのを手始めとして、近くは池上電鐵會社を目蒲に合併し、又東京地下鐵道に自ら常務として參加するなど、四方八方に驥足を伸ばし、電鐵人となつてから、僅か十數年の間に、押しも押されもせぬ東都電鐵界の寵兒となつてしまつた。更に田園都市、駒澤ゴルフ場、多摩川園等を經營し、東横乘合、東横タクシーの設立をなし、尙ほ百貨店進出を畫して昨年東横デパートを起すなど、三面六臂の働きをなして、財界を

縱横に馳驅してゐるさまは、蓋し財界近來の快事と云つてよい。

明治四十四年東大政治科を出て農商務省に入る。同期には吉田茂、小栗毅視總監、石坂泰三と實に多士濟々である。其後鐵道省に轉じて監督局總務課長まで累進したが、大正九年實業界に轉じ、東横電鐵の專務として迎へられた。それ以來、第一生命の矢野恒太によく、絶倫の精力と碎身の努力によつて、我が電鐵界に堂々乘り出したものである。君は人物、背景その他の點から考へて、もつと知られ、もつと表面に立つていゝ筈の人物であるが、自己宣傳をしない。信州人特有のねばりで行く方の人である。

實業界へ轉向の當初は、一面官僚臭もあつたが、今はすつかり拔け切つて、風貌から受ける柔軟性をもつた感じと、不斷の人格練磨とによつて、事業家的鋭さの中にも、圓轉自在の人格となつてゐる。

社員間の相互親睦の機關として雜誌「情和」と云ふのを、東横、目蒲の社員倶樂部から出版してゐるが、毎號、自ら筆を執つて人生哲學を說き、同時に自らの修養の資としてゐるあたり、偉とするに足る。趣味は書畫骨董、中でも觀音像の蒐集に對しては趣味を通りすぎて、一種信仰的なもの

があると云ふ。

小布施新三郎

◇

世の進むに隨ひ、世知辛くなるに伴れて、兜町にも、眞の株屋街氣質が段々とその影を潜めるに至つた。兜町人の特質、商賣に於ては「細必と放膽」社會に對しては「仁俠」この二つの特性を兼ね具へてゐる者に六二の小布施新三郎がある。一人の小布施の存在が如何に兜町を輝かしいものにしてゐるか。

六二商店の名は、東京株式取引所の創設された間もない明治十八年の昔より、常に一流商店として兜町に君臨してゐる。波瀾重疊のこの街に於て、創設以來常に一流の信用を保持し得たものは六二商店に於て始めて見られることである。

先代小布施新三郎は、横濱の外人街六十二番館に番頭として勤め、後東株取引所員となる。先代

は震災直前八十餘歳の高齢を以て永眠した。先代の在世中は現新三郎は、全くの蔭の人で終始した父を飽くまで表面に押し立て、自分は部屋住みを以て滿足し、然かも店務一切を切り廻して父を思ふ儘に働かせた。元來父新三郎は萬年强氣で賣ることを知らぬ株屋人であつた。從つて三大戰爭の後に來た大暴落恐慌の際に、克く發展の經路を辿つて來たのは、父が無錢砲に買ひ進む時にも、現主新三郎は、默々として父のなすがまゝに任せて、自分は私かに反對に賣り込んでゐたと云ふことである。關西の雄、野村德七が今日あるは、同君の蔭に弟實三郎が、或る時は兄德七の反對を打つて野村の危機を救つたと云ふ話と、東西好一對として、街の語り草とされてゐる。

◇

小布施は兜町の事に就ては、生來の温情と義俠から隨分隱れた德を施してゐる。或人がアレは小布施でなくて大布施だと評してゐるが、之れは蓋し適評である。兜町政治に對しては、常に大衆の利益を目的として多年活躍してゐる所から、野黨の總裁とも謂はれてゐる。殊に過去數年間市場の不況から、兜町は一勢に生氣を失つたものであつた。小布施は、この街の人々の爲めに、私財を以て、或は精神的に業界振鼓の爲め奔走を續けて來たものであつた。元來多くの人のやうに表沙汰に

しない性質の爲め、世間には餘り知られてゐないが、その恩顧を受けた人々の間によく感激の聲を聽くことがある。

君は溫厚な長者の風格を具へ、茫洋として一見捕捉し難く思はれるが、その眞の姿は、堅實な小布施商店を反映するに足る剛直の士で、而かも非常に進步的な氣慨を藏してゐる。かうした人物であるから社會的の信用は絶大と云へやう。

君は又單に汲々たる蓄財家ではない。一面經世家的な面影を持つてゐる。かの日支事變に際し三十萬圓を投げ出して、愛國機四臺を陸軍に獻納して、個人獻納のトップを切つた。この事が國民に如何に大なる刺戟を與へたか、而して又烈々たる愛國心を誘發したかは、實に思ひ半ばに過ぎぬものがある。又教育事業に貢獻する處も多い。先年兜町の取引員によつて計畫された取引所關係子弟並びに店員教育の爲め、兜町商業學校が開設されるに當つても、卒先して出捐に應じてゐる。しかもかうした事を別に誇るでもなく、單に、國民の義務だ位に考へてゐる處、彼の人柄が窺はれる。豚が競馬場に飛び込むと同然、無鐵砲者の多い街である。株式街改革も君の稀才に負ふ處多いものがある。

小林一三

◇

最近我が國事業界に何かと問題を投げかけてゐる小林一三が、東電の社長に就いてからの日は未だ淺い。曩に阪急と寶塚の經營で一世の手腕を認められ、愈中央に乘り込んで、東電の復活に參劃した頃から、君の將來に非常な期待を懸けられるやうになつた。小林は甲州生れの俊才、子供の時から目から鼻へ抜けるやうな才走つた男だつた。それに環境の支配を受けて頑張りの强い血を享けた爲め、これと思ひつけば何處までも初志を貫徹すると云ふ風格を備へてゐる。この性格が仕事の上に反影してか、凡ゆる事業に當つて獨特の場面が展開されてゐる。昨年の五月社長に就任した時東電には配當問題が紛糾してゐた。卽ち鄕會長と五十嵐常務で、外債の整理、銀行業者との折衝に腐心して、遂に解決至難と見られた該問題を、小林は君特有の手腕と强靱な性格の力により、難な

く解決の曙光を見、愈四分配當復活を實行した。

この一役で果然カミソリと云はれる小林の人氣も一轉して愈智惠の塊だと云はれる程の名物者になつた。レヴューを以て東京進出をすれば、これが天下の流行となる。行く處として可ならざるなき才腕は、實に千手觀音の樣な男である。

◇

從來甲州からは實に多くの實業家が出るが、小林に至つては、その中でも、特に目立つた存在である。その策略、權謀の巧妙な事、近い話が東電問題がこれを證明する。その前日まで一般には、會社の總會は小林副社長の送別會だと思はれてゐたのに、さて議事が進行すると驚いた。却つて社長の鄕男が會長にまつり上げられ、意に合はない重役は馘首され、利用に利便な男を要位に据ゑて辭める筈の御本人は社長とおさまつて了つた。この一幕の演技振りは、實にあざやかなものであつた。同じ甲州人でありながら、若尾璋八とは、凡そ大きな違である。若尾は自分を扶けて貰ふ心算で、小林を入れて、扶けて貰ふ代りに引導を渡されたのだから、同じ甲州產でも、斯くも違ふ所、人間は全く面白い。然し若尾璋八も決して馬鹿ではない。それ所か彼も亦甲州財閥を代表する立派

な財界人であつた。それでも小林にかゝると斯くも他愛なき人間になつてゐる。

小林の切れ味を財界人に求めると、安川雄之助位が對照となる人物であらう。然しその安川も、あまり切れ過ぎたのが、わざわいして三井を去つた。無理な巧名を急ぐと安川の覆轍を行かぬとも限らぬ。

東電と競爭の立場にある諸會社に對する東電の積極的態度は、近來目に見えて甚だしい。相當にお人の惡い處を見せてゐる。弱いとみれば、無理押しに出て、強いものには藥籠中のものにせんと大いにつとめる。

然し、これも東電が關東電力界を一手に收め、群小電力會社を合併して、將來益々內容の充實を圖らねばならぬ現狀から推せば、又止むを得ない。

◇

君は東電の社長として、隨分幾多の至難なる懸案を解決して、東電の歷史に一大轉換を劃したがこれは君の卓拔した手腕による處として大いに賞讃に値する。

君は隨分と非難も受けた。然し當時の東電としては、凡ゆる犧牲を忍ばなければならなかつたの

であらう。混沌の中に整然たる途を拓く事業家の努力は此處に認めなければならないであらう。

從來の東電は、君にとつては草創時代と觀ることが出來る。これからの東電は君にとつて一歩一歩の建設時代と觀ることが出來る。君が努力の後に實を結ぶのは、これからである。故に情の人、溫かい人としての性格を、十二分に發揮し得るのも、これからであらう。

齊藤定吉

◇

東株市場で何か問題が起つて、大手筋が話題に昇る時、必ず齋藤と中野が引合ひに出される。それほど齊藤は、玆數年來賣つた買つたの大きな御本尊となつてゐるのである。

齋藤は勿論玄人の取引員ではないが、玄人筋を向ふに廻して、悠々と相場三昧に耽り、而も勝機を摑むコツを會得してゐることは、時に堂に入りきつてゐるかと思はれるほどである。看板を上げた相場師がコツコツ手數料收入だけを當てに稼いでゐるのなど、足もとにも及びもつかぬのである事相場に關しては、齋藤には齋藤の性分が表はれて、或一定の張り方をなしてゐる。只殆んど休むことなしに、賣りか買に出てゐることは越後の中野とよく似てゐる。

◇

齋藤はなぜ、斯くも絶えず全精力を相場に集中してゐるか。恐らく君は、相場は生命なりと考へてゐると云ふであらう。君が帝大を出て會社へでも勤めてゐたのなら、やつと課長位になつて得々としてゐるのが落ちなのに、そこまで行く前に、君は肺をおかされる身となつた。勿論會社員の名もかなぐり棄てゝ、療養につとめなければならぬ破目に陷つた。さうなれば世の常の人とは異つた處世法を執らなければ、うだつの上らぬ位のことは、君ならずとも辨へてゐる。相場なら時間の束縛を受けずに、自由に自分の意志を暢達することが出來る。それに相場に當つた時の快味、勝利者の法悦がある以上、この道を選ぶより外はない。齋藤はこの意味から相場道に浮身をやつすことゝなつたのである。中野忠太郎は云ふまでもなく親譲りの一億圓長者である。彼は新東一本に意を注いで、他の株は一切顧みない。こゝに彼の彼たる所以があるので、人氣の中心をなしてゐて、絶えず波を描く新東を彼でなければ出來ない金の力で動かして儲けて行く。彼の相場を張るのは、ほん

の手なぐさみで、何の心勞もなく金の力で所得稅の二百萬圓位は稼いで知らぬ顏をしてゐるのである。斯ふ見て來ると大手筋二人が絕えず相場に手を出してゐる事由が、極めて明白で、恐らく今後とも兜町の大手の話題から、この二人を無くして了ふことは出來ないであらう。

然しこの二人の相場に對する態度は瞭りと別がつく。齋藤は、昨年十一月の大安値をつける前七八月頃から新東と日產を賣つてゐた。新東にしては百四十圓臺であるから餘り高値と云ふのではない。その爲め八月百五十圓を拔いた時には、齋藤の賣玉は引かれて買方から目標視された位である。そこを踏みこたえて十一月の安値百二十圓割れまで賣つてゐた。當時の賣玉は新東、日產で約三萬株、この安値で手仕舞すれば、百五十萬圓位は利得出來たであらうが、彼の筆法としては、一旦當つた玉は容易に利喰しない。新株が百三十圓に引き返した時、やつと利喰を始めた。誰でも、高値安値の天井底は豫想出來るものではない。當つた玉はそのまゝ放置して十圓位に逆に動いたころ手を入れる。即ち大相場を取る筆法なのである。君は卽ちこの筆法を最も度胸よく行ふ。君が大相場を常にモノにしてゐる所以である。

其後十二月新東百四十圓臺から、買向つた玉約三萬株を今日まで持ちこしてゐる。日步、乘換料が嵩んで相當の痛手になつてゐる筈であるが、これを今後どう所理するか。元來君は病弱のせいか引かれ腰は極めて弱い男である。今度は何か期する處があるものと觀られる。

何でも君は、世界の狀勢から見て、結局惡性インフレの到來を堅く信じてゐる一人だと聽く。果してどうなるか。

中野は機關店五軒から、指値で一勢にどつと注文を出す。出は大變金持らしい襟度を持つて立派なものであるが、相場は徹頭徹尾、小相場を小ずくひに行く人である。大相場を大幅に取る齋藤と小幅に行く中野と、何れが優つて、何れが劣つてゐるかなど、優劣論を述べる愚は避け度いが、要はその人の性格と立場から發して、相場の還境如何が、一切を解決する。唯齋藤の相場に對する熱と膽とは當代第一人者であらう。

齋藤はインフレ景氣による大相場で、少なくも五六百萬圓は儲けたであらう。青春を樂しむには病弱と來てゐるので、一意金力によつて何事かを成さうとして相場街に勝利を贏ち得た人である。

相場を玩弄物視して悠々迫らざる處に中野の成功があり、思ひ切つた體當りの戰法で、東京株式街に颯爽たる雄姿を仰がれてゐる人に齋藤がある。近來、心境の變化と云ふか、金鑛などに手を出

してゐると云ふが、それよりか將來相場人としてより大きな齋藤を像想し度い。

佐々木謙一郎

◇

すでに餘りに云ひ古された言葉ではあるが、滿洲はわが國の「生命線」だ。しかも、その滿洲の「大動脈」に當るものは八億と云ふ巨額の資本を擁し、その數無慮四萬の社員を持ち、五十有餘の傍系會社を運營するところの「大滿鐵」それ自身である。

元來、滿鐵の本來の使命とするところは、わが國策としての大陸發展への足場となるべきものであつた。けれども中途にしてその滿鐵の機能は歪曲され、本來の使命は完全に沒却されて純然たる營利會社たるの存在に轉落し、政黨や財閥の喰物たる觀を呈するに至つた。

かゝる秋に滿洲事變が勃發した。そして、それが楔機となつて滿鐵が本來の使命に立還ることになつた。昨年夏からの在滿機構改革問題の經緯その他から察するに、恐らく滿鐵の存在が、わが國策の線に沿つて行くであらうとは可なり明白なことでもあらう。

◇

ところで、從來の如く滿鐵が政黨や財閥との一脈の關連の下に繫がれて居つた時代には、その首腦部は當然に政黨財閥との間に緊密なる關係と云ふよりは、寧ろ、政黨財閥の手足である觀を露骨に示して、世評如何がはしき者の就任を見ること決して稀とはしなかつた。

併し、事變後の情勢は一變した。すなはち、輿論の納得する人物のみが首腦として迎へられることになつた。わが佐々木謙一郎君も昨年の理事の改選に際して迎へ入れられたところの一人である。

大體君は、明治四十年に東京帝大の政治科を卒業し、直ちに大藏省に入つて役人生活を初めた。そして本省から專賣局へ出て、整理、販賣の兩部長も勤め、先年、平野高平君の後を襲つて長官の椅子に就いたのだつた。專賣局に移つてから昨年辭任まで十數年にもなるので局內のことなら何でも知らぬことは無かつた。曾つて筆者は、極く下つ端の役人が「佐々木さん程の名長官は未だ曾て無かつた」と絶贊して居るのを聞いたことがある。なる程、長官就任以來どし〳〵新計畫を遂行して實質を擧げたにも頷かれる。

◇

人も知る如く、君は前の第一銀行頭取として令名を馳せた佐々木勇之助君の御曹子。だから、君は世に謂ふところの分限者だ。だが、君に會つて誰でもが驚くことは、君が非常に質素な服裝をして居ることだ。しかも、人に接するには鄭重慇懃を極め、少しも尊大振つたところが無い。よく、金持の伜と云ふ者は、金力の背景を笠に着て、酷く傲岸に構へ、輕薄この上も無いものだが、君にはそんな點は些かも見當らない。と云つて、人摺れから故らにそんな虚勢を張つて居る譯でないことは勿論だ。まづ、飽くまでも温厚にして純情なる君子人である。

君はまた、怎んな人が君を訪ねて行つても、時間の許す限り引見して與れるし、たとへ、君と意見の異なる者の説に對しても快くそれに耳を藉すだけの雅量も持つて居るし、自已の抱懷する意見を悠々と話す親切さも持ち合せて居る。だから君は、怎んな者にも、對者を撰ばすに話の出來る人だ。「佐々木君程缺點の無い者は無い」とは、君を知る誰でもが異口同音に云ふ君への賛辭だ。

◇

君は決して世の所謂秀才型ではない。外見はむしろ鈍重な印象を受ける。しかも同時に一種の頼母敷さを感じる。君自らは讀書家でないと告白して居るが、それは勉强家で無い、と云ふ意味で、一通りの書物は讀んで居るらしい。殊に宗教には一種の憧憬を持つて居る。曾つて、某ミッションスクールに通つて居る君の令嬢が、ある時、バイブルを購め度いと父君たる君に乞ふた處「お父さんがずつと前に購めたのがある筈だ。バイブルは古くつても同じだから、あれを上げよう」と云つて書棚から探し出してそれを與へたら、令嬢は如何にも不思議相にして居た相だ。また、令嬢を宗教學校へ上げる處に「人間は何時も順境な時ばかりは無い。逆境になつて感じるのは神への信仰だ信仰を持つことは自らの行爲を反省する尺度ともなる」と云ふのだ。

こゝに、君の世の中に生きんとする眞摯な態度が窺はれる。政黨、財閥の喰物から脱れた滿鐵はかくて、人事的にも浄化されつゝある。

× × ×

下出義雄

◇

下出義雄は實業家として經歷も淺いし、名古屋財界の大御所でも、大立物でもない。然し實業家として君の持つ特異の存在將來伸びるであらう君の實力は、寸度中京名古屋には見當らない。

君の嚴父民義翁は、中京財界の巨頭、元老株で、其長男として生れた君は、神戸高商を卒へて一つ橋の專攻科に進んだ。當時故福田德三博士から、學徒として立つことを勸められたと云ふから、君の俊敏明晰な頭腦は想像が出來やう。名古屋の財界人は、一體に消極的で、あくまで古い型が拔けきらない。かうした環境の中にあつて、君は珍らしく明朗で、積極的で、さうして近代的タイプの實業家である。元來學究的な、理想家肌の人だけに、俗氣たつぷりの實業界に飛び込んで來た君には矛盾であり、憐みであつたらう。象牙の塔に立籠つて靜かな思索に終始する筈であつたが、卒業と同時に、青山で下山書店と云ふのを開業した。これこそ君の理想主義によるもので、學界の研

究物を世に出し度いと云ふのだから當然六七萬圓の損失を招いた。もともと書店などやつてゐるのは氣に喰はない、これを本意なく眺めてゐた父親は、それを機會に名古屋紡績の專務にした。これが俗氣みなぎる中京財界に踏み出した第一歩である。紡績業は買付、賣り共に相場であるから、仲々素人の出來るわざではない。君はスタートに於て、痛ましい失財を演じて退散した。

そこで、理想家肌の君の思ひついたのが東邦商業學校の經營、道樂息子が道樂をするよりかと云ふ氣持で父親も贊成したのであつたが、これは、エラク成功した。從來の劃一的な教育を人間教育に基調を置き着々君の理想を實現してゐる。

◇

今、君の實業家としての地位を見ると、名古屋取引所の理事長の外、社長六社、取締役、監査役十二社、その他十六社に大株主として表裏ともに關係してゐる。これで實業家としての地位、實力のほどが見當のつく筈である。この外、前記の東邦商業の校長、名古屋體育協會副會長、少年團理事長、商工會議所議員として理財部長を勤めてゐる。尙ほ君の關係會社は軍需インフレの波に乘つて相當の實績をあげてゐるものが多いから、このところ當り屋の雄なるものである。文字通り名古

屋御書子の花形と云ふ樣である。昔バイロンは一夜明けたら天下の大詩人になつてゐる自分を發見したと云ふが、實業界にいやいや足を入れてゐた君は、知らぬ間に財界人的地位と實力を兼ね備へる人物となつた。

君のセンチメンタリズムも、學者氣質の纖細さも、今ではもう或る程度まで克服精算されて實業家としての、あの手、この手も身について來た筈である。兎も角君が實業家としての演技ぶりを發揮して行くのはこれからである。果してどんな人物に成長するか世人は刮目して君の一擧手一投足に見入つてゐるのである。

正田貞一郎

◇

我國製粉業の生みの親として、製粉界第一位に數へられてゐる人正田貞一郎は、日清製粉の社長正田貞一郎と云ふよりか、正田貞一郎の日清製粉と呼ぶ方が遙に適當である。それ程この會社の隅から隅まで正田の威令は行き渡つてゐる。

明治三十年頃には、メリケン粉と呼ばれて、全然米國よりの輸入によつてゐた製粉業を、一人一業主義、製粉報國に精進して來た君であつて見れば、今日遂に日本の製粉業界の王座を占め、工場を有すること國内十一ヶ所、能力總數二萬二千二百バーレル、新式製粉全能力の四割强を占め、昨年中の輸出七百萬袋に及ぶ尨大な勢力を有するに至つた事も當然と云ひ度い。正何位とか勳何等とかの肩書きこそなけれ、又經濟聯盟や、工業倶楽部の專務理事など云ふ空な肩書きこそなけれ、そこいらの番頭重役やお扉ひ重役とは、少しばかり譯が異ふ。押しも押されもせぬ一國一城の主、裸相撲で向つて來いと云ふ貫祿がある。

◇

上州館林は紗たる城下町であるが、昭和時代の實業界に特筆すべき二人の大人物を送り出してゐる。その一人は三井合名の常務理事として池田正彰と並び稱せられ今を時めく南條金雄であり、今一人は正田貞一郎君、正田と南條の兩君は、幼時よりの竹馬の友で共に一ツ橋に進みんだ。正田は明治二十四年、南條は廿五年の卒業であると云ふから相當古い話で、鐘紡の前社長長尾良氏は正田

と同期、又兒玉正金頭取、三宅川三菱商事會長などは南條と同期。かうした同窓の榮躍榮進をよそに見て、傍目もふらず一意小麥粉製造に精進して今日に至つた。

明治二十四年、一ツ橋を出た頃には、一生製粉屋で終へやうなど云ふ考へは毛頭なく、天晴れ天下の外交官を志したものであつた。この外交官志願は一家の事情で君の希望に終り、青雲の志を抱いたまゝ鄉里館林の町で父祖傳來の醬油醸造業の旦那に祭り上げられてしまつた。

併し勃々たる功名心は遂に納まるものでなく、明治三十三年地方の有志を糾合して館林製粉會社を資本金三萬圓で、日本で最初の機械製粉會社を創立し、其後著實な經營が功を擧げ、殊に日露戰爭に惠まれて、長足の發展を遂げ、今は世界屈指の大工場たる鶴見工場を作つて堂然たる製粉王國の威容を築き上げたものである。

一時三菱系と目された日清製粉も、資本的に御世話になつてゐる筋はなく、獨立獨歩の事業である。君はこの唯一の金城湯地をまもり、社業本位、溫厚な君子人、眞面目一方の人物である。然し事一度社業となると算盤の命ずる處、道義を超えざる範圍に於て、思ひ切り切れる人である。合併問際の日本製粉に絶緣狀を叩きつけたり、理事長自ら共販組合の解散提議と云ふ放れ技もする。そんな辣腕が、君のどこに隱されてゐるかと云ふことになるが、家の子郎黨の獻策ではない。矢張り君自身の藝と云へやう。

序に君を根津一家と見る人が多いやうであるが、これは恐らく遺憾であらう。君は全く資本家らしくない、どこまでも研究好きの學者型である。例へば十年ほど前から、林博太郎、鈴木梅太郎、小平權一の諸氏と食糧研究會を起してゐる。食料の化學的研究を目的とするもので、既に多くの實績をあげてゐる。食料問題のやかましい時代、背後のブレーン・トラストとしてのこの研究會の存在は既に世間的に認められてゐてよい筈のものである。

瀨下清

◇

大學卒業が出世榮達の登龍門であつた大學萬能時代に、大學教育を尻目にかけて、實生活に入り三菱銀行會長の地位を贏ち得た君は、何と云つても立志傳中の人物である。

君は明治七年長野縣南佐久郡の生れ、二十歳の時東京高商附屬主計學校を卒へ直ちに百十九銀行に入る。後同行が三菱銀行に合併され、給仕にも等しい下ッ端から出發した。君は實地に業務を勵む時、語學の必要に迫まられて神田方面の夜學を片端から修業、更に外國語學校に通つて獨逸語、佛蘭西語を勉強した。

當時、君は毎日辯當を二度分づゝ拵つて家を出て、銀行が退けるとすぐ夜學生となつて語學にいそしむ。然もこれが入社以來、神戸支店詰となるまで一日も缺さず續けられたと云ふことである。

明治三十九年神戸支店の副支店長に拔擢されたを手がゝりに君の運命は段々と開けて來た。四十一年銀行業務視察の爲め海外に出て三年、大正三年大阪支店長、五年神戸支店長、六年本店營業部長、八年銀行部が獨立の際、選ばれて常務と文字通り躍進に躍進を續けて今日に至る。

一に銀行業務、語學に一家をなしてゐるのみならず、廣く經濟理論にも大きな精進を重ね來たものである。かつて三菱の元老莊田平五郎は、大學など出なくとも學問もあり、仕事も立派に出來て人物の點では、又づぬけて大きのが居ますよ、とよく瀨下を詰つたものである。

信州人獨特の氣慨と押しで、今日の地位を得た君は、一面頑固で理論を尊ぶ人である。剛膽で、

よい加減の事は君には出來ない。凡ゆる場合イエス、ノーが瞭りしてゐる。どんな事件、どんな依頼でもその秀れた洞察力にうつたへて最初から明解に解決して仕舞ふ。この判斷力こそ今日の君の信用を絶大ならしめたのである。自成の人瀨下は實に銀行家として典型の人と云へやう。

千石興太郎

◇

農村の經濟的凋落は、單に日本と云はず、實に世界的大勢である。我が國に於ても政治上、經濟上の各種懸案の中で、最も困難とされてゐる問題は此の「農村を如何にすべきか」の命題である。之に對して現在日本に於て如何なる識者も、學者も、爲政家も、明快な而して實行可能な解決を發表してゐる者を聞かない。此の困難極まる命題に對しては、當面の責任者である農林省當局では、所謂産業組合主義を中心とした農村經濟更生策を樹てゝ、之が實行に努めてゐる。日本に於ける産業組合發生の歴史は可成舊く、卅年以前にその發祥を見てゐるが、最近急激な强化擴大を來したの

は、右農林省の産業組合中心主義の確立を動機とするものである。併し此の産業組合保護助長は、一方に中小商工業者の生業を脅威し、剝奪してその犧牲の下に農村の更生を計る手段である。

今や此の産業組合の牙城を護る人に、右手に全購聯を握り、左手に産業組合中央會を踊らせて、自ら農村の救世主を名のる千石興太郎がある。「時世が進んで鐵道が敷かれるやうになつたら雲助が失業するのは當然である、雲助が氣の毒だからと云つて鐵道を敷かぬ譯には行くまい」鐵道を敷くため政府が補助するのに不思議はあるまい。産業組合中心主義は新日本の經濟政策だ」と豪語して中小商工業方面の反對を正面に受けて切り棄御免の活躍を續けてゐる。今は既に産業組合中央會の事實上の會長格である。だから專務理事たる君の椅子は、世間ありふれた專務級の椅子と違つて會長格、副會長格實質的地位を備へてゐる譯であつて、將に産業組合中央會は千石の獨裁下にある

君は生粋の組合子とも云ふべく、島根縣の農林技師を振り出しに、一路組合事業に突き進んだ人である。從つて農林省あたりの聲がゝりで降下り式にのさばり出した人々とは大分趣が異ふ。下から築き上げた組合人である丈けに、獨裁と云つても、萬事仕事自體に無理がない。從來の經過を見ると、産業組合中央金庫、大日本生糸販賣組合聯合會、全國購買組合聯合會、全國米穀販賣購買組合聯合會など一として君の息のかゝらぬものはない。而も立案の元祖であると云ふ。最近農會が組合に押し流されたとか騒いでゐるのも、君の樣な能卒的な獨裁官が中央會今日の繁榮を築いたからこそである。社會的情勢も勿論度外出來ないが、一人の良き指導者が齎す貢獻もなかなかに大きなものである。

◇

君は明治二十九年北大出身、其頃は産業組合など末だ影も形も見せない時代であつた。卒業後、前記島根に職を俸ずる頃より研究を初め、今は我が國産業組合運動の輝ける理論家であり、指導者である。

最近組合の異常な進出に對する農會側の反目嫉視、中小商工業者の反産運動等は漸く其の度を加へ、此の處、喬木風多しの感がないでもないが、君は農家自體の今日の狀勢では協調など以ての外まだまだ此の鋒先は納められないと意氣軒昂たるものがある。

君の努力にまつ懸案は、まだまだ山積してゐる。線の太い荒削りで、精悍な戰鬪を營む所實に風姿颯爽たるものがある。

末兼要

◇

民間鋼鐵業と云へば日本鋼管につひで小倉製鋼を聯想される。何れも積極主義者を主宰者となし内容も相伯仲して民間會社の双璧である。

小倉の社長は二代目淺野總一郎、併しこれは文字通りの飾り物で、專務の末兼要が獨り百人役を勤めてゐる。君は見るからに精悍すぎる程の男である。かの日鐵合併に於ては鋼管白石を凌ぐ闘士であつた。

先代總一郎が東京製網から小倉工場を買ひ取つた時、かねて見込みをつけてゐた君を引き込んだものである。入社後は寢食を忘れての努力の結果、正規の學問こそしてゐないが、一流の大家連も事製鐵に關しては二三目置いてゐる。

呉海軍工廠の一職工から身を起して、八幡製鐵所で膽を磨き、多年の勉强とガンバリで遂に我國有數のエキスパートとなつた。

元來が最初から借金會社で、その上に製鐵界多年の不況を全面に受けて最後の斷崖に立つた時、君は同族一同の猛反對を押し切つて昭和六年の大整理を敢行して今日の目ざましい更生を見た。勿論これは時世の力に負ふ處も多いであらうが、去る大整理がなかつたなら今日の成績も尠からず割引されたであらうことは確かである。

技術家としての君は早くより定評の人であつたが、經營者としての君が認められたのは、會社が立ち直つてからのことである。勝てば官軍とはよく云つたもの、先年の半額減資の時など、拙いものだと鼻の先で片付けられたものである。然し不成績は經營のまづいからに原因するものではない東京製網への借金の利子に追はれてゐる間は浮かばれやう筈がない。そこで君は思ひ切つた整理を敢行した。禍根は君の鑑識通り借金利子拂によるものであつた。今日經營者として買はるべきものがあれば、それはあの時、世間の物笑ひから出發したことである。さきの五萬株公開によつて一株七十五圓のプレミアムを稼いで、東洋汽船で蹉跌し、セメント、造船共におもはしくない淺野は、ほつと一意氣出來た筈である。爾來君の淺野財閥に於ける權勢は大したもので家付の長老連もタチ

タチである。

今鋼鐵界異變も傳へられて、多少のケチをつけたがる人もないではなかつたが、民間會社として の將來は洋々たるものである。

但し經營者としての君には、これから後に數々の問題が殘されてゐる。君は手も八丁、口も八丁 頭もよければ腕もすごい。おまけに負けず嫌ひで獅子奮迅黨の最たるものである。日本鋼管の白石 今泉の二人分を一人で背負つて行く處、會社は全く君のものゝ感がある。

鹽原又策

◇

人間の一生に必死の努力が必然であることは言ふまでもない。然し如何に運命が人間の一生を弄 ぶかも、また否定出來ない。今日東洋の製藥王三共製藥の鹽原又策が、今の運命は彼自身ですら夢 想だにもしなかつたであらう。

幼年時代横濱の日本製茶會社の一社員となつた。君は英語に達者であつた爲め、外人との取引に は社長大谷嘉兵衛の通辯の役を勤めたものである。その君が、當時やうやく外國商館に認められて 來た絹織物に目をつけて、横濱絹物會社を創立、自ら取締役支配人となつた。時二十二歳である。 主として羽二重の輸出に當つて、當時斯界に前途恐る可き青年として活躍を續けたものであつたが 燃える野望により絹糸業者としては相當の傷手を受けた。

君が東洋の製藥王と成長するに至つた契機は、明治三十二年、アメリカから歸つた一友人が、高 峰讓吉博士の發明による、タカヂアスターゼといふ新藥が米國で好評を博し、實に世界的發明の名 をほしいまゝとしてゐることを聞き込んだ。そこで炯眼なる君は直ちに高峰博士に交渉して日本內 地の一手販賣權の譲渡を懇願した。一面の識もなく、紹介者のあるでもない鹽原に對して、博士は その誠意と熱意に動かされて懇情を承諾したのである。そこで、あらゆる無理を押し通して宣傳賣 を作りあげ、自ら街頭にビラ散きに立つと云ふ努力の結果、二三年を出ずして、全國津々浦々にま で、タカヂヤスターゼの名を印象づけた。

これが今日の大三共製藥を築き上げた第一歩であつた。業礎の出來た後は、些の山氣なく着實一

方で漸進的に押しひろめて、今や資本金一千二百萬圓、東洋第一位の製藥會社となり、製品種目も數百を數へるに至つた。さうして、三共と云へば、安心して服用する事の出來る程の信用を博するに至つた。君の一番に多く買はれる處は、一切名譽慾のないことである。その製品が手堅い如くに又人間にもゴマカシがない。今や一つの三共コンツェルンを形成して、財閥資本家の域に達してゐる。數十に亘る直系傍系會社は其の性格の如く一切山氣がない。

澁澤正雄

◆

明治、大正、昭和三代に亘て我財界指導者として、輝しい足跡を遺した故澁澤榮一子には、現在貳之助、正雄、秀雄と三兄弟あるが、就中中堅財人として一番の活躍家は正雄である。

君はスチールメーカーとして富士製鋼を主宰する傍ら我國自動車工業の確立を目ざして石川島自動車の經營に寄心して來た。國內自動車も漸く將來の見通しもつひて國產自動車三社合同の一歩手前まで漕ぎつけながら、自ら社長の椅子を辭するの止むなき事情に迫られ、半生の一半を集中した自動車工業から全く手を引くことになつた。これは君に取つては內心未練を殘したであらうと察せられるが、君が自動車より手を引くに當つて、今日確立の緒に就いた自動車工業は他の適當なる人の力に俟つことゝして、自分は今後本來のスチールメーカーとして多端なる製鋼界の發展に專念することゝした、と聲明し、富士製鋼、日鐵合併後、日鐵の取締役として日鐵經營の一員となつた。日鐵成立に對しては、三井、三菱の大財閥以外の民間會社は、折りからのインフレ景氣に乘つて一勢に合同不參加を稱へたのに、製鐵國策上の見地から敢然合同に參加し、合同案通過の爲めには政治家方面へ氣敏に働きかけたと云ふことである。富士製鋼自體から云へば、合同しない方が目先の利益はあつたらうが、將來日鐵の覇權を握つて製鐵王カーネギーたらんとする遠大の計畫があるのだから、合同參加は豫定のコースだつたと云へやう。現在の官僚臭味紛々たる日鐵の人事が改新される時、卽ち鄕御大が日鐵の會長の椅子を占める時、君の常務昇格も亦實現確實のものと見て大過あるまい。三井、三菱の代表者が世間體から恐らく常務の地位を辭退するであらうことを思ふ時、君の製鐵業者としての將來は大いに開けるものと觀らる。

君は青淵翁の三男として明治廿一年生れ、一高、東大を出て第一銀行に入る。入社後間もなく米國商工界視察に出て、歸朝後同行を去つて、澁澤系諸事業に關與した。それより大いに同系事業の振興を計り、傍ら製鐵事業に關心を持ち、大正十五年富士製鋼重役となつた。又再度海外業界の視察により、後、石川嶋造船、同自動車、及昭和鋼管創立など、相當驥足を展ばしてゐる。

◇

未完成昭和鋼管は、極めて有利に日本鋼管に賣りつけたし、君は今や全身全靈を製鐵業將來の爲めに傾倒出來る筈。

漸次斯界の注視を受けつゝある君の將來は非常に興味深いものである。

四條隆英

◇

四條隆英は安田保善社の理事として、森廣藏、川崎清男と共に安田財閥の支配權を握り、安田生

命、東洋火災の兩社長を兼ね森が銀行を主宰するに對し、君は、主として保險部を統轄してゐる。豪毅にして果斷に富み、思ふ事を必ず實行に移す手腕は、大安田の柱石として遺憾なしとされてゐる。

君は舊公卿華族四條家の流れを汲み、世が世であれば、君も亦長袖を振り分けて雪月花を愛でる身分であるが、君の相貌は何處から見てもお公卿樣の片鱗だも留めてゐない。色は吊し柿に似て誠に澁味あり、眼は恍々として人を射り、鬚はクレマンソーの如く怒りを帶び、土木工事の現場監督にしても決して人後に落ちない賴母しさを持つ。人相既に然り、その識見、手腕も又遊蕩逕逸の風ある華族界に於ては得難き逸材である。

明治二十七年帝大法科を卒へて高文試驗を通過し、農商務省山林局に職を奉じた。豪毅果斷、然も至つて神經太く、小事に拘泥せず、常に大局を見て進むやり方は、小心翼々の官僚社會では異色を示してドンドン昇進した。工場視察の爲め外遊し、歸朝の後は、商工局工務課長、工場課長を經て、次官に昇進した。農林、商工兩省分離後は商工次官に轉じた。その間工場法の立案に大いに功あり、勞働問題にも造詣深く、國際勞働會議に出席して、各國代表を感嘆せしめたこともあつた。

役人としての生涯は順調であり、否、寧ろ異數の出世と云ふべく、君としても決して不滿はなかつたが、性來奔放にして氣慨に富み精魂を打ち込んだ仕事をせねば氣の濟まぬ君の性格は、因循姑息規則つぐめの官僚生活とは到底永く相容れなかつた。時來れば官僚生活から足を洗はんと希つてゐた際、高橋是清の推輓によつて大安田の指揮官として才腕を奮ふことゝなつたのである。

安田に迎へられた後は、高邁なる人格識見、優れたる經營の力によつて、安田一家の信任厚く、且つ又傲岸なる風貌に似ず、却つて溫厚に富む性格は、多くの社員から慈父の如く慕はれ、名實共に安田の大黑柱を以つて許されてゐる。

昭和七年、貴族院議員に選ばれ、公正會に屬して幹部となり、將來會の中心人物として重きをなすであらうと謂はれてゐる。元來公正會と云ふ處は一種不快の空氣を存し旱く頭角を顯はすと必ず多くの排擊を受ける處である。君はこの空氣を心得て、その全貌を表はさないであらうが、必ずや會を引きずり廻す勢力を得るものと思ふ。兎も角大安田の人としてはもとより、政治家としての君は將來刮目に價するものと思ふ。

× × ×

眞藤慎太郎

◇

浮沈の多い漁業界に、北洋の王者として君臨する日魯漁業の專務、眞藤慎太郎の活躍を語らう。

君はもと玄洋社に人となつて多年東奔西走、活躍をしてゐたが、後漁業界へ飛び込み今日を築いた人である。身自ら板子一枚その下は地獄の荒波と闘つて來ただけあつて、荒くれ男の統制などには實に妙を得た德を持つてゐる。それでこそ、日魯會社にあつては現場の常任重役として第一線に立ち、生命を的に活躍してゐる。元來性格は竹を破つたやうなキビキビした人物である。モジモジしてゐるのが大嫌ひと云つた調子、それで玄洋社時代露領方面に多年暗躍してゐた關係から、露語は十二分にこなせる。かつては漁業交渉でロシヤ人を煙に卷いて有利に解決したと云ふ。生來の江戸つ子張りの交渉が却つて有利に話をトントン拍子に進ませたものである。北洋漁業否日本水產業の爲にはなくてはならぬ人である。

尙、君は一に漁場方面のみにとゞまらない。一昨年のロンドンに於ける契約商品の値引問題のゴタゴタの際、自ら乘り出して、商品はこちらのもの、金は君のもの、嫌なら何時でも解除するとズバリと高飛車に出たので、流石に商賣上手の英國商人も降參して、日魯側に有利な解決を見たと云ふことである。これも君の氣一本、駈引なしの氣性に據るものと思はれる。昨年の歐洲旅行も日魯の爲め重大使命を帶びたものであつたが、意氣揚々目的を果して歸朝した。

會社は今年不漁と聞く。君の活躍部面を益々擴がらしめんとしてゐる。漁業現場、及日魯の爲めなくてはならぬ君、國家的な沖取漁業の統制問題など益々重大問題が君の双肩にかゝつてゐる。

白石元治郎

◇

時節柄、インフレの波高く騒いで居るが、かゝる中にそのトップを切つて居るのは何と云つても製鐵業者だ。實際製鐵業こそは「時代の寵兒」である。また、全産業の「心臟」でもある。しかも統制經濟の時潮に乘り八幡製鐵所を中心として製鐵大合同の成つたことは、未だにわれ〳〵に新らしき印象を刻んで居るが、之に一敵國として屹然と佇立して居るのがいはずもがな日本鋼管會社だ

こゝに采配を振つて居るのが白石元治郎君。蓋し、君も「時代の英雄」に數へられるところの一人ではなからう？　けれども、今でこそ日本鋼管が「時代の寵兒」として扱はれ、白石君また「時代の英雄」として遇されるやうになつたものゝ、君のこれまでの過ぎ來し方は、まつたく苦難そのものに包まれて居つたと云ふも過言ではない。

◇

君は人も知る如く先代淺野總一郎氏の女婿、明治二十五年の英法科出身。淺野翁に認められて淺野商店に入り、同店石炭部の支配人となり、同二十九年には淺野一族として東洋汽船の創立に參劃し淺野翁の片腕として君の拂つた努力は並々ならぬものがある。後間もなく海運業視察の爲め歐米に赴き、同支店社長として數年間彼地に駐つて、大に見聞を博めたのであつた。

が、明治四十四年、東洋汽船が好況に向ふや、君は退いて八幡製鐵所の鋼材部長だつた今泉嘉一郎君と共に資本金二百萬圓の日本鋼管會社を設立したのである。

當時、わが國に於ては鋼管類の全部を輸入に仰がねばならぬ實情にあつた爲め、之を內地で製造しようと云ふことが長い間の要望となつて居た。かゝる際に白石、今泉兩君の協力する時が來た。かくて、日本鋼管の運命が決定的となつて來たのである。

今日までの間、歐洲戰爭當時のスバラしき好況に惠まれたこともありはしたが、その後ずつと君の極度の苦境時代がつゞいた。

◇

大正九年から昭和六年までの反動期が、すなはち、君の苦境時代で、文字通り四苦八苦、月末が近づくと會社へも寄り附かれない始末、大は會社の運用資金から小は給仕の給料まで、一人で金策に奔走したものである。勿論、大銀行など當時の鋼管會社をテンから對手にしない。何處を怎ろ駈け廻つたものか、兎に角個人名義の借金も隨分嵩んだらしい。が、昨今懷ろ具合の回復と共にその借金も整理がついたと聞く。のみならず、盆暮にはその昔恩顧を受けた誰彼に對し何かと心盡しのお返しをして居ると傳へられる。そこにも君の床しき性格の一端が覗かれる。

曾つて、日本鋼管の社債九百萬圓を興銀が引受けたことがある。その因緣から、結城君は、あの

浚分曉漢笠原寛美君を興銀代表として重役に推薦した。この笠原君こそ久しく白石君を惱ました存在であつたのだ。

製鐵合同問題の起つた時も、この男單獨で贊意を表した。が、會社としては飛んでもない事。過去二回の減資斷行で漸く立直りの氣運に惠まれ、しかも爲替安、滿洲の經濟的建設、非常時局の展開等々、好材料續出の出鼻にこの始末、かくて、白石君の胸中私かに期する處があつた。

◇

が結局、問題は金だ。手切れ金調達の方法が無い。隱忍しながらその時期を待つた。その後の決算に於て、業績に準じて增配しようとすれば、興銀から、借金の無くなるまで一割以上の配當は罷りならぬと來た。採算の良い大口徑鋼管工場を作らうとすれば、借金會社は積極政策不可と横槍が入る。之では何時までも浮ぶ瀨がない。

そこで白石君等も百方奔走、遂に生保團との間に金融の道を構じ、綺麗サッパリ興銀との緣を切つたのである。流石傲岸を以て鳴る結城君もこの時ばかりは「ナーにそんなに早く返して呉れなくとも――」と、內々語つた相だ。

それからの白石君は思ふ存分驥足を延ばして仕事をすることが出來るやうになつた。君等一流の積極主義でノシ上げて行く。八分配當から一割二分、それから一割七分と大巾の增配をしながら躍進する。

數十年前君が未だ若き學生だつた頃街頭で宏壯な邸宅を仰ぎ見て「男子一生の中にかくの如き家に納つて見度い」と嘆じた相だが、君、いま、往時を追懷せば今昔の感なきにあらずであらう。

上甲信弘

◇

生糸の横濱か、横濱の生糸か、などゝ生糸はそれほど横濱財界の中樞的な存在である。誰でもがこの生糸の重要性を知らずして、横濱を語ることは出來ない。それは生糸が横濱の生命線であるが爲めであり、また「生糸の國日本」にとつても飛行機のプロペラにも比すべきものだからである。

横濱財界に躍る人物と云へば、必ず生糸に特殊な關係を持つ。その中に藤然衆望を負ふ人に上甲信弘がある。

自由の市、横濱に似ず、財閥意識が傳統的にこびり付いてゐる處。從つて横濱財界では新人の登場を仲々に許さない。出現を待望しない。寧ろ、これを輕蔑し、敬遠する傾向が殊に濃厚である。反動的に古い時代的精神から脱却しきれない爲めであらう。

その中にあつて、横濱財界人として、濱革新の爲め、限りない活躍を續けてゐる君は、愛媛縣松山在の產。土地の中學から、一高に學び、後、南洋方面を歩いて明治三十二年歸朝、横濱に矢野半治と矢野上甲合名會社を起した。それが今日の上甲を產む第一歩であつた。一時當社は屑繭の全日本總產額の七割强を一手に引受けて氣を吐くと云ふ豪勢さであつた。尙屑繭を鼻でかぎわける職能的才腕に於ては天下に列ぶものなき技能の人として知られてゐる。

大正二年横濱取引所取引員を開業し、四年取引員組合委員となる。又六年にはアルゼンチン、ニューヨーク等に支店を設け、其後益々發展を加へて、七年獨立して上甲貿易株式會社を設立、今日に及んでゐる。以來營々として働き、遂に今日横濱財界一流人物として、重きをなすに至つた。寸度書きつらねて見ると、多額納稅、横濱撚糸織物株式會社、朝日スレート

會社監査役、實來ゴム相談役、横濱絹織物人造絹織物輸出組合理事長、神奈川縣東亞輸出組合理事長、日本絹業協會長、横濱自由通商協會長、横濱貿易協會々長、横濱取引員組合委員長、横濱實業組合聯合會々長など五十餘の公職及會社に關係し、夜に日をつひだ頭腦明徹なる活躍ぶりである。

◇

君は勇猛果斷、鼻先の強いばかりの人物ではない。德の人として又深き感銘を持つ。

横濱に於ける君の礎石、矢野上甲合名會社の後身上甲信弘商店には、以來物質的にも深い關係を續けてゐる。夫人の岳父でもあり、事業の指導者とも云ふ可き矢野を失つた以來、業務一切を擧げて心の友丸山寅五郎氏しに任せきりにした。この丸山は又取引所開設以來の生糸人で、同業者間の人望を一身に蒐めて事業は延びに延びた。丸山は濱の大久保彦左衛門として自他相許すものだつたが、昨年夏、濱の人あげての哀惜の甲斐もなく卒然として世を去つた。事業の代辨者、智腦の友を失つた上甲の悲歎は、一人とり殘された遺子適吉君にも優るものであつた。以來、父業を繼がせやうと云ふ考へから早稻田大學在學中の適吉君を中途退學させて、業務一切を適吉君の支配に任せてひそかに後見の役を努め、財界人のとしての成長を見守つてゐる。政界に人物がないと同樣、財界又温い愛情に生きる人物の跡を斷つ時聽くさへも涙する濱の語り草とされてゐる。

膳桂之助

◇

實業界の世話役、鄕誠之助男の懷刀として、剃刀のやうなすどい切れ味を示す人に、日本團體生命保險の膳桂之助君がある。

君は未だ工業倶樂部の理事の頃から、日商會議所理事の渡邊鐵藏博士と共に、わが國財界の行進途上必ず何かしら存在を示す双璧と謳はれたものだつた。經濟聯盟の高島理事が、儀禮と語學と社交とを以てその地位を護つて居るに對し、渡邊、膳兩君はその見識と强烈な鬪爭力とを以てその團體を引きづり廻して居た觀がある。が併し、すでに渡邊、膳兩君ともその團體から離れて仕舞つた蓋し、兩君とも多くの小姑を持つべく餘りに悍馬であり過ぎた爲めであらう。たゞ、渡邊君が泰然として辭表を叩きつけて日商を去つたに對し、膳君は圓滿自然に工業倶樂部を去つて行つた。そこ

に二者の性格に若干の差が見出されるのでまことに興味深きものがある。

◇

君は、曾ては農商務省の役人であつた。また、蠶絲局の創始者であり、高等蠶糸學校に教鞭をとつたことさへもある。チツとして今頃まで役人生活をして居つたならば、恐らく商工か農林省あたりにも次官の椅子を占めて居た筈だ。現に、君の赤門時代からの同窓の友吉野が商工次官となつて居ることに見ても解る。

それは兎に角、君は途中役人生活をサラリとやめて全日本の資本家の金城湯地たる工業倶樂部に高給を以て招かれることゝなつた。當時工業倶樂部は商工會議所と並んで、凡ゆる經濟問題に就き研究し、討議し建議する有力なる機關であつた。

昭和五年、濱口内閣の安達内相が、勞働組合法を全資本家群の反對を押し切つて强行せんとした時、工業倶樂部は全國の資本家團體をその傘下に糾合して勞働法排擊の大運動を展開した。その最前線に立つて奮鬪したのが膳君。そして戰は勝つた。だが、倶樂部は全國勞働大衆の怨府となつたその焦點をボカすべく創立されたのが「全産聯」であり、工業倶樂部は純然たる社交機關化して仕

舞つた。かくて君は工業倶樂部と袂を別つたのだ。

◇

君は「私は社會のために三つの大仕事をして死ぬ」と常に語つて居る。その一つは勞働組合法の扼殺であつた。君は「あれで私は勞働ブローカーからは大變怨まれて居るが、天下の勞働者諸君も誤解して居る。私は勞働ブローカーの毒手から彼等を救はんが爲めに勞働組合法に反對したのだ」と語る。が果して然るか？

第二の事業と云ふのが、昨年開業の團體生保事業である。すなはち君は、この事業こそ自己の後半世を託すべく決意したらしい。大體團體生保を考案したのはわが國では河合良成君であつた。併し、商工當局としてはその營利的經營を許可しないので、河合君はその全計劃を「全産聯」に無償で提供し、全産聯之を繼承した譯である。

團體生保は、絶對非營利を目的に、一般保險より遙かに低率で、更にそれに失業保險をも兼ねる作用を有たせ、全國勞働階級の福利增進を圖ることになつて居る。

◇

が併し、例の遞信省とのイサゴサから、この團體生保も矢張り資本家の懐ろを肥す具だと見られたのは膳君として最も千萬に感じたことだらう。しかし、配當は公債利子程度たること、重役賞與一切罷りならぬこと、株券投資は一々商工省の監督を要すること、銀行預金は商工省の指定銀行たること等々の規則より見ても餘り資本家の飛びつくやうな儲け仕事でないことだけは明白なことだ

君は全產聯會長たる關係から社長となつた鄉男の下に專務となつて、三面六臂の大活躍をつゞけて居る。傳へられるところに據れば、膳君は昨春以來、この事業の說明と加盟勸說との爲めに、全國を三たび平均に駈け廻つたと云ふ大熱演で、往年、勞働組合法排擊の爲め全國の資本家團體を糾合して奮ひ起つた當時以上の大活躍である。

併し、君が私かに期待した程速かにその實は結ばない。目下の營業內容はまことに微々たるものである。けれども、吉野次官を初めとして商工當局は全的後援を惜しまないし、事業の性質は健全であり着實だし、當事者として膳君の如き鬪志滿々たる者が居るし、本事業は蓋し刮目して期待さるゝであらう。

× × ×

高島菊次郎

◇

製紙王國王子製紙會社大成の蔭に三十年一日の如く緣の下の力持ちをなし續けた人、高島菊次郎の寬厚な姿に心をひかれつゝ筆を執る。

君は東京高商を卒業後直ちに大阪商船會社に入り、後臺北支店に在勤することゝなつた。當時藤原銀次郎は、三井物產の臺北支店長として果敢な活躍をしてゐた。丁度當時日露戰爭出征兵士に臺灣在庫米の輸送を專行した時、高島は商船の代表者として藤原と相識る仲となり藤原の推薦で三井物產に轉じた。其後四十五年に藤原が王子製紙の整理を引受けるや、無理矢理王子に引ぱられて今日に至る。藤原の王子の改革は背後にかくれた高島の力がなかつたら出來なかつたと云はれた程で王子製紙の功勞者として君の名は又不朽のものと云はねばならぬ。藤原がとんとん拍子に出世した蔭には常に高島の善智善謀があつた。藤原は外部に働き、社業一切は高島の双肩にあると云はれる

位で、大王子の大世帯を切り廻してゐるのである。

君は一見茫洋としてゐるが、極めて手堅い人、根本的に研究せぬと氣のすまぬと云ふ性格の所有者である。從つて事務に關しては、微に入り細に至ると云ふ嚴肅さである。君の書類點檢の嚴格は既に定評のある處であるが、人としては頗る溫厚、部下を愛することは亦財界佳話の一とされてゐる。

藤原が勞働問題等で華々しい活躍をする時、君は書畫の蒐集、郊外散歩と頗る靜寂な心境を樂しんでゐる。然しこれは君の全部では勿論ない。表面に出して喋りこそしないが、軍人の話に耳を傾け、若い新聞記者の意見を聞き、又勞働運動、社會運動の推移に深い關心を持つてゐる。

次代社長は君が好むと好まざるに拘らず、決定的のものである。女房役として天下一品と定評きれた君が、その滋味ある寛厚溫容の風格を以つて大トラストの主宰者として君臨する日も遠くはあるまい。

× × ×

田中鐵三郎

◇

今度の日銀理事移動で大阪支店長から、理事の椅子を得た人に田中鐵三郎がある。

國際經濟問題に關しては總裁深井と共に日銀切つてのエキスパートである。元來日銀は下の中堅所に却つて多士濟々の感がするが、田中を深井の後繼者として重役陣に一枚加へたことは、中央銀行としての面目を更に光輝あらしめることゝなるであらう。

田中は歐洲戰爭中はスイスにゐて、ドイツの財政經濟狀態を研究調査した。さうして休戰となるや直ちに獨逸へ入つた。君がベルリンから報告した獨逸の財政經濟に關する調査は、內地では全く手に入る可くもない事で、隨分と當時は尊重されたものださうである。彼の講和會議の際には、牧野全權が君をホテルへ招んで「聯合軍が餘り獨逸に苛酷にすると獨逸は再び戰爭の態度に出るかも知れぬがどうか」と質問した。君は獨逸の財政的窮乏をつぶさに研究して既にそれ以上の戰鬪力の

ないことを告げて、大いに安堵を與へたと云ふことである。二度目は昭和四年から八年までゞ、丁度世界恐慌に遭遇し、ロンドン監督役のかたわら、國際決濟銀行創立委員となり、つゞいて同行理事、其他ヘーグ賠償會議、對獨金融委員會國際聯盟財政委員會など、多くの國際的會議に委員として出席した。そしてこの間に於て、海外金融界の大立物と常に往來し多くの知己を得たのである。かうした人々とは、今でも猶ほ交渉があつて、普通の人には知り得ないことに觸れてゐる。將來大に國際的に伸びて行かねばならぬ日本の爲めには、田中のやうな人物を實際必要とするのではあるまいか。

田中は實際家で、理屈は云はない。君の履歷から見ると、關東震災後の金融多難時には、營業局調査役、昭和二年金融恐慌のときには、問題の發生地神戸に支店長となり、と云ふ具合で非常時局には大抵問題の中心部で活動して來てゐる。理論家であるよりか、より實踐家であるゆゑんは、かうした經驗からも來てゐるのであらう。君は自分もよく勉強するが、又他人に勉強さすことも上手である。行員に問題を與へて、一夜の間に幾十頁の調査報告を書かせたり、外國書の批評を云ひつかつて徹夜させられたりすることは珍しくない。

大阪支店長としての君は、半年ばかりの沈默を續けた。その間に大阪財界の機構をすつかり把握して斡旋役をつとめ、九州人らしく春風蕩々たるものであつた。

武智直道

◇

臺灣自治問題が世人の注視を受けてゐる時、毅然として臺灣農民に君臨してゐるものは、糖業資本である。日清戰爭を楔機として、臺灣が我が版圖と化して將に四十年を閲してゐる。そうして其間移植して根を張り枝葉を延した資本の中で、最も大をなしたものは、矢張り糖業資本である。

日本の砂糖業と云へば、最近まで外糖の輸入によつて、辛ふじて國民の消費を滿してゐたものである。それが今日では、自給自足の域を脱して、一轉輸出國となつた。この間我が糖業は終始政府の保護政策のもとに成長したものとは云ひながら、糖業者の苦心も非常のものであつた事勿論である。今日の成果、今日の偉業の前には、糖業資本を支配して來た人々の血の努力の跡がある。

この糖業界に於て、身を以て貢獻、已れの天職とした人に藤山雷太、益田太郎、山本悌二郎等多くの人物を認めるが、我が國製糖會社の第一位を行く臺灣製糖の支配者武智直道も亦その一人である。

彼は明治三年生れと云ふから、既に六十七歳の老齢である。青年時代から海外進出を志し、慶應中途退學後直ちにハワイのオアフ大學に學んだ。傍ら、糖業研究に沒頭した。當時に於ける日本の糖業は、全く舊式のもので、未だ家内工業の域を脱しない狀態であつた。この幼稚な糖業界に近代科學を持ち込み、資本主義的工業化を具體化したのが武智直道であつた。

即ち彼はハワイから歸朝するや、明治三十三年三井の益田孝男と共に、現在の灣糖會社創立に携つて、創立と共に取締役に擧げられた。爾來糖業界に殘した足跡は、實に偉大なものであると云へやう。

當時の臺灣と云へば、匪賊横行して、身に迫る危險は想像も及ばぬものであつた。彼は寢食を忘れて、糖業界發展の爲めに努力を重ね來たものである。彼の移植した糖業資本は成長し、發展し、今日の大をなすに至つた。さうして彼は、常務、專務、昭和二年山本悌二郎社長の後を受けて、推されて社長へとなつた。彼の灣糖に於ける地位は、山本との地位の轉換によつて築かれたものではない。專務時代から、既に彼は灣糖會社の總支配者であつた。即ち山本は、糖業聯合會々長として又政友會巨頭として外部的に活躍し、社内の統帥、業務は總て彼の獨斷により處理されてゐたのである。

この間に於ける彼の生活は、全く一卷の苦鬪史であると云へやう。灣糖は資本の點に於ても、また耕地所有の點に於ても、實に牢固とした社礎を持つてゐる。然し今日を構築する創立者としての精進の前には、絶えまない波瀾重疊の苦鬪があつた。即ち世界大戰後の反動期、その後に於ける深刻な不況の襲來、等しかし彼はこれからの危機を巧みにきりぬけて、灣糖を磐石の泰きに置いた。この點に於ても、糖界、人多しと雖も第一位の存在と謂へる。實に一生を通じて糖業界の爲め一身萬務に當つた人と云へる。

人となりは、お雜さまのやうに優しい半面、仕事にかけては目から鼻へぬける俊敏さがある。然し人をおしのけても偉くなり度いなど云ふ野望は微塵もない。元來が江戸子で上品に出來て、ガツガツした點は微塵も見られないから、何處までも棟梁の見識ある德望の人と云へる。

瀧山米太郎

◇

凡て世間に名をなす程の人の經路に、坦々水の如きものゝある可き筈がない。艱難苦心を重ねて來た位は勿論のこと、人生の行路難を味ひ盡してゐる位のこと、全く日常茶飯事であらう。だからそれはしばらく閑話休題として、直ちに君の奮闘の時代を見やう。

現に驚異的の發達を示してゐる石綿スレート界は、即ち君の今日あるに至つた出發點であり、礎石でもあるが、その加速度的進展の裡に、不斷の努力を續けた君の存在こそ、本邦石綿工業史を彩るものである。伊豫松山の商業學校を卒へた君が、希望に燃えて神戸埠頭に立つたのは、時恰も石綿スレートが國產品として初めて市場性を帶びた大正初年の頃であつた。偶々スレート會社の一販賣員となつて石綿工業界に第一歩を印する機緣を作つたのである。後、ある事情に刺戟されて昂奮と反感の裡に東京へ轉じたのであるが、君の石綿工業界へとしての苦闘は實に此の時代からである

爾來一二年間、死力を盡した健闘が酬いられて、初めて瀧山商店の名で獨立となり、更に合名會社、株式會社と組織變更の上銳意擴張を計つた君の躍進振りは全くトントン拍子の觀があつた。而も終始淺野スレートの製品を販賣して、遂に淺野財閥に接觸する機會を掴み得たことは將來の爲め實に一大收獲であつた。一販賣店主から淺野スレート會社の專務となり、次に日本スレート販賣會社、大阪石綿工業、日本ヒューム管會社、旭コンクリート工業をその傘下に收め、幾何もなく淺野セメント株式會社スレート部長に起用され、更に又淺野セメントの營業部長の地位を得、愈東洋第一位を誇るセメント王國の營業上の全責任を擔ふことゝなつた。實に異狀の飛躍と云へば飛躍に違ひないが、君のそこに至るまでの過程を顧みると、いかに苦難の道であつたかを察することが出來る。

◇

嘗ては神戸の野澤スレートを假想敵國として抗爭し來つた君も今後大半をセメント界に盡さなければならぬことになつた。從つてさしも賑であつたスレート界も、何となく一抹の寂寞味を感ずる狀態となつた。されど金子喜代太の愛刀となつて大同セメントを創立、更にセメント界の生產販賣

兩方面を馳せ廻つて、寢食を忘れた活躍をなし、小野田セメント一黨を向ふに廻して神算鬼謀を廻らしてゐる。

一度冷めると容易に動かうとしない鐵のやうな性格の持主である君には、ともすると、餘りに理智的すぎると見られる傾がある。それが時に他の批判を受ける種となつてゐるが、精力に於て、機智に於て、術策に於て、又辯舌に於て他の追隨を許さぬ長所が今日の君を產み出したものである。

セメント界の現狀は、表面平靜を裝ふても、裏面的の對抗には、尙幾多の問題が伏在してゐる。從つて今後の動向如何こそ最も注視すべき時期であるにより、君の活躍の舞臺は益々多忙ならんとしてゐる。

津田信吾

◇

溫情の武藤が無情の兇刄に倒れて、まもなく大鐘紡の社長となつた。人は君を幸運兒と云ふ。成程、明治四十年鐘紡に入り今日まで廿餘年、年もまだ五十を出たばかり、其上に、先輩も一人や二人でない。さう言つた周圍に繞らされた常規の垣を乘り越えて社長となつのであるから、幸運兒と言へば幸運兒と云へやう。併し幸運兒と言ふ言葉には、偶然の機會に偶然惠まれたと言ふ意味が多分に含まれてゐる。言はゞ棚ボタの味覺者であらうが、一使用人からスタートを切つて重役陣營の末席に列し、一躍社長に躍進した急テンポの進出、それは云ふ如く幸運のみが君を社長にさせたのであらうか。

君は明治十四年、岡崎に生れ、慶應義塾政治科を出て直ちに鐘紡に入社、月給三十五圓の工場見習員として兵庫工場に行き、岡山、久留米、淀川工場を最後の工場長として重役陣にゴールインした。斯ふ書いただけでは、これと取り立てる程の事もないが、君の廻つた工場が鐘紡工場中の重要工場であり、不振の工場であり、又何れも加工工場と云ふことである。從つてその何れもの工場に君が成功したと云ふことは、君には重要工場を託し得べき資格があり、不振の工場を轉換して之を殷賑に導くべき力があり、いかなる加工技術も之を完成させる技倆があると言ふことを、その足跡が雄辯に物語つてゐるのである。かの淀川の加工工場の成否は君の運命を賭した職務であつた。こ

れにうまく成功して、重役陣にゴールインした。そして武藤社長自らが改定した定款によつて昭和七年社長を退き、當時副社長であつた長尾良吉を昇格させてその後任に据え、末席重役であつた君を副社長に拔いたのは、畢竟君が入社以來の各成績を總合評價して得た偉業によるものである。當時溫情主義の當社に淀川工場爭議の勃發した時、君の執つた態度は君を副社長に推薦した武藤の面目を辱めるものではなかつた。新聞は多年の溫情主義の破綻なりと書き立て、勞働組合の猛者連は我等の勝利と叫んで、危く鐘紡の大釣鐘を叩き壞すかと思はれた。爭議團はあらゆる戰術を弄して肉迫の手を弛めない。仲裁和解の手も伸びて來た時、家族主義を傳統として來た當社に執つて他からの仲裁は、鐘紡の光榮ある傳統を破壞するものだから、身を賭しても之に應ずることは出來ないと悲壯な聲明を發表して一切の仲裁を斷ち、聲明通り身を以つてこれが解決に當つた。さうして武藤が築いた溫情の城壘を一歩も汚さなかつた。總ては正面から眞正直に、熱と力との限りを盡してひた押しに押し切る鐵腕と、君の人格によるものである。

◇

君が技術家出身でないにもかゝわらず、技術的の加工工場の經營に成功してゐるのは、一見不思議に見えるが、それは機械本意の工場經營者でなく、人間中心の經營者だからである。如何によい機械でも、工場の能率をあげるのは、機械ではなくて人にあると云ふ持論によるものである。各工場とも職工が工場長を呼ぶのに「工場長さん」と言つたものだが、それを君は必ず津田さんと呼ばせ、そして君は職工を「さん」づけに呼んだ。こんな事は小さいことであるが、そこに職工と共に働くと云ふ君の經營的精神が現はれて面白い。無論缺點もあれば、弱點もあるであらうが、ケレンもない。婆婆氣もない。少くとも財界中、表裏を持たぬ進退共に判然たることに於ては第一人者であること確である。大鐘紡の安泰と共に君の成長も亦大きいものがあらう。

十河信二

◇

昭和五年から昭和九年の間、滿洲國成立と云ふ大きな舞臺に立つて、滿鐵の理事として成功名を擧げ、今又お隣の北支へ移ることになつた十河信二とはどんな人物か。

滿鐵理事としての君の職場は、最初商事部長であつた。販賣、購買共に多年の仕來りもあるので別に君の手腕にまつ程の職場ではないが、時たまたま新滿洲國の發生に出合つて、君の前途には大きい分野が開展された。滿洲國經濟建設に關して、最高の指導者の役目を背負ひ込むことゝなつた君は、滿鐵内に新に經濟調査會を作りそこで製造した經濟建設案を關東軍特務部に提出し、軍と滿鐵と協力して計畫經濟の基礎方針を煉り上げることにした。その結果として發表されたのが、昭和八年三月の滿洲經濟建設要綱である。これは滿洲の經濟憲章といはれ、今後に開發すべき仕事について根本方針を確立したものである。

◇

滿洲國經營に參劃してゐる間に性來大きい度胸の君は一歩進んで日滿支經濟提携まで行くことを計畫するやうになつた。そして滿鐵理事の時代から日滿支經濟提携運動をはじめて、北支の大官要人は勿論、江を越えて南支の巨頭をも根氣よく歴訪した。昭和九年、理事の任を退いてからは一層努力を重ね、結局實を結んだのが、滿鐵の新設傍系會社、興中公司の社長なのである。

興中公司は、資本金は一千萬圓の小會社であるが、北支那の資源開發を目的とし、將來は第二の滿鐵にまで發展させる積りであらう。また其可能性は十分にある。興中公司が滿鐵として發展するに將來何年を要するかは別問題として、君自身は東亞經濟建設の大望を抱いて發刺とした活躍が出來やう。

君の親分は、先年物故した仙石貫である。あの變り者の氣に適つた、と云ふからには君が又非凡な人物であることがわかる。何でも鐵道省の經理課長時代、時の大臣仙石老と大論判をやり、以來すつかり老の信任を得るに至つたと云ふことである。

復興局疑獄事件の痛手で、君の人生を見る目は深くなつた、と自ら云ふ。人間はいつ難境に沈むかも知れないから、その時には自分で立ち上る力を持つてゐなければならぬと云ふことを語つた。そこで君は息子を全部下谷萬年町の貧民學校に入れて、貧乏の世態を體驗させると云ふが、このあたり、相當の變り者である。

君は子分を養生することは特に好きである。大低二三十人の學生を養つて補助してゐるとである食客三千人を養つた孟嘗君には及ばぬが、ともかくこんな點にも大陸的な俠士の面影がしのばれてゐるのである。

遠山元一

◇

株式街に遠山の名を以て聴へてゐる人が二人ある。遠山芳三と遠山元一である。兩人はすぐ隣り合せに店舗を開き、然も從兄弟同志と云ふ血縁關係でありながら、商賣の上では自ら別の道を辿る寧ろ違り方に於ては、極端な對照をなしてゐるものと觀ちる。

遠山芳三は味方もあれば敵もある。どこまでも尖鋭機敏、世に謂ふ刺刀型のキレモノである。遠山元一は敵は絶對に作らない。何處までも圓滿温順、腹藝的人物である。今までの兜町と云へば、一體に活馬の眼を拔くやうなキレ型が尊ばれたものであつたが、時代の變化は兜町にも浸潤して落附いた腹藝の人、特に抱擁力の大きい人を要請するやうなつて來た。つまり遠山元一など時代の要求に添ふた一つの型で、將來期待される處非常に大きい。

◇

君が川島屋商店を創立するまでの歴史は正に奮闘立志の連續であつた。君は埼玉縣の産明治二十三年の生れ、青雲の志を抱いて上京したのが十五歳、先づ水野練太郎の邸に身をよせた。翌年半田庸太郎に認められて小店員となつた。半田は當時株式界の獨眼龍と噂された飛將軍である。間もなく天稟の閃きを見せて、二十二歳にして市場代理人に拔擢され、其動振りは、斯界の老功者をさへ一驚させたものと云はれてゐる。當時同店の三羽烏の名を以て謳はれたのに遠山芳三、岩井猪三とがある。君の好潮も間もない事で半田の失脚により、市村金次郎、平澤實太郎の店を轉々する狀態となつて、不遇時代を不遇らしく過してゐる間に、俄然歐洲大戦の財界好況の波に乗じて現物屋を開いた。これが大正六年、越へて大正九年津田七五郎の店を買收して川島屋商店を創立した。

◇

株式會社川島屋商店を弱年卅五歳にして創設した君の株式店經營方針は、あくまで時代に添ふた合理的なものであつた。先づあの徇ではあまり歓迎されなかつた學校出を網羅して、調査機關の確立を劃つた。當時に於て此の經營方針が直ちに有識者の注視する處となり、銀行保險會社方面の信用を博し、殊に特殊銀行までが篤く信用する處となつた。

君は身をクリスチヤンに奉じて、終始一貫誠實派であつて、確に從來の兜町人の型を破つた進歩的人格である。四十七の若年で、取引組合の理事、短期取引組合の委員長及東株代行の社長におされ、街の人望を一人でせをつてゐる狀態である。

犬養內閣成立直後の金再禁止で新東が百二十圓臺から百七十圓まで昂騰した時、君はその頂上をねらつて一齊賣りを遣つた。その後反動安があつて一時は百三十圓臺をさへ割つたが、再禁止によるインフレ景氣で、新東百五十圓、六十圓と昭和八年の大發會には、果然二百三十圓臺と云ふ大正九年以來の新高値、それまで買ひに買つた君のふところに入つた金は、ざつと五百圓と噂された。されど君とても常に順風の航路のみにめぐまれてゐるものではない。が越後の中野、大阪の石井と並び稱せられてゐる京都のうつぼが背後に、身を提しての後援を惜しまぬと云ふ。これが君に取つての磐石の重みである。昭和七年一月築地の某所に「五百萬圓借金祝賀」の宴を張つて以來、僅か二年足らずの間に今日の川島屋を築き上げたのであるが、借金祝賀の宴と云ふも君の風貌がしのばれて面白いではないか。

◇

當時世間の注視を引く取引所改革問題に就ては、君は極端な會員論者である。取引所の强制擔保制を廢し、組合の共同擔保にしなければならぬ、そして取引所は證券金融機關に歸らねばならぬ、と云ふのが君の持論である。君はこれを卒直に披瀝する。主張する。此處が君の好む處である。温順ではあるが、信念には强い。或點では一面自我の强い押し屋である。しかし君は好く己を知り常に潛勢力の上に立つ信念を持つてゐる。將來悠々超然と斯界の衆望の上に立つ人である。

利光鶴松

◇

利光の名は知らなくとも、小田急、帝都電鐵、鬼怒川水電となると小學校の小供までが知つてゐる筈である。此の經營者が誰れあらう利光鶴松なのである。否君の采配する利光家の事業なのである。君は經歷に於て實に委曲に富み、從つて風格に於ても殊異性を持つた人物である。君の經營にかゝる三社重役陣にも瞭りとその風氣を傳へてゐる。もともと君は政治家たらんとの希望に燃えて

郷里大分を出でた。麻の如く亂れた政界の淨化を夢みて、明治法律學校に學び、卒業と同時に、敢然自由黨に參加した。藩閥政治を罵倒し、その弊を糾彈すること數年、その鬪志に滿ちた青年は一世の英傑星亨の認める處となつて、自由黨より東京市會議員、衆議院議員と打つて出た。かくて政治に奔走する間にも、君は單なる慷慨悲憤の政治家ではなかつた。

日本の確立は產業の確立にあることを知つて、振鑑期の日本資本主義發展の爲め、敢然身を提して實業界に身を投ずることゝなつた。市電の前身東京市街鐵道、東京瓦斯の一分身千代田瓦斯などに關係を持つてゐる內に、君の腦裡に最も深く刻みつけられたものは「事業と電力」であつた。かくて明治四十三年鬼怒川水電會社を起し、發電能力全部をあげて東京市電に供給して今日に至つたのである。然し現在は實際上の仕事は一切あげて常務利光學一に任せきりにしてゐる。兎に角東京市政、及東都電氣政策に於ては最大の大先輩にして電力界の書宿たる言葉に恥ぢない人物である。

因みに事業の繼承者利光學一は親戚に當る利光近松の二男、大東獨法を出ると、鬼怒川水電の人となり、電力界でたゝきあげた人、今年五十二と云ふから、今が働き盛りの人物である。俊敏な頭の持主、鬼怒川重役陣の薫陶を受けて肚も出來てゐる。現在の處電氣局への供給契約を守り立てゝ行くのには有能すぎる人物である。但し財閥資本の重壓に苦しむ斯界にあつて嚴然牙城を守つて行く處將來とも君の才腕にまつ所殊に大きい。

遠山芳三

◇

バーナード・ショウが其戯曲ナポレオンに於て、ナポレオンと云ふ男は、三角形の二邊が他の一邊よりも長い、直線は最短距離であることを確實に認識した最初の人である。と云つてゐる。遠山芳三も我が經濟界に於て、經濟理論を最初に認識した男であると云つてもよい。所が君のこの性行が其表現に於て、餘りに卒直である點に誤解されんとする傾向がある。

日本人は、由來支那の道德の影響を多分に受けてゐる爲め、上品ぶることに依つて人格が高まるものだと考へ勝である。君は最も卒直を尊ぶ男である。物事が卒直に取り運ばれる方が能率を上げる上に於て、いくらよいか判らない。遠山は能率を上げる爲めに含蓄をてらはぬ性格である。

彼は過つて改むるに憚ること勿れ、と云ふ金言を實行してゐる點に於て他に比類を見ないかも知れない。兜町に委員として堂々と自己の所信を述べることに決して遠慮する處はないが、之れを反駁する議論が自分のそれよりも優越してゐると考へた場合には、卒然として自說を取消す。さうして何等のわだかまりもなく霽風光月と云つた顏をしてゐる。店員の非を卓を叩いて面責するが、店員の辯明が理由の諒りする場合は、主人の威嚴など云ふケチな氣分は毛頭持たない。忽ち「宜しい萬事君に委す、金が要るなら會計から取れ」と云つて朗な顏をする。

君は他人に物を聽くことに對して、少しもハニカミを感じない。小僧にでも敎へられる處があれば有難うと感謝する處など、實に恬淡なものである。この種の態度が、日本の紳士道から云ふと、少しく輕卒に見へるのださうである。然し、この態度に對して、誰が批難し得るか。勿體ぶるとか氣取るなどは君には考へられないことである。物事に對して、餘りに卒直であるため、感じが强く當り過ぎる。其爲めに一部の人々に深い誤解を受けてゐる。

◇

彼は權利を主張すると同時に、義務には非常に忠實である。義務とは法律上のものではなく、道德的にもである。親や兄弟や部下に對しては、一面熱情に近いものを持つてゐる。小店員を敎育するのに、毎朝自ら講義をした。ところが丸上の店員は役に立つと云ふので、高級を以てどんどん他に引き拔かれて、君はガツカリしてこれを中止したことがある。小店員に洋服とゲートルと云ふ身仕度をさせた。當時丸上の小僧は兵隊の樣だと笑はれたものだが、其後二三年で、市場には洋服以外では、入場出來ないことになつた。

又努力と熟慮斷行が君の長所である。廣告を始めることになれば明大の講座を聽く。外貨公債の輸入を始めると云へば、英人に就いて英語を勉强する。凡てがこの調子で商賣に對する研究は、經營に於ても、投機に於ても實に熱心である。

◇

君は相場師としては、東西相通じて、先づ第一人者であらう。之れが又極めて卒直に行はれる。一度見通しをつけて市場に嵌れば、手を振る時に目をつぶつて買つてゐるのは、有名な話である。幾ら確信の上に立ても、賣物が多いと手が鈍ぶつて一萬が五千となる。目をつぶつて居れば、一萬が一萬五千になると云ふ。が見込は確信の上に立つたものであるから多過ぎることは、想像以上に

傳けることではないかと考へてゐる。君が熟慮の上に立てば、この勇氣を持つてゐる。買ふ時はオウビラでも逃げる時は大低他店からソット逃げる者が多いものであるが、君は自分で市場に投げて朗なものである。凡てに對して一切小策を弄せず、實に天馬空を行くの慨がある。

この大相場師の氣慨を正確に認識する大資本家の現はれないのが不思議である。ひとたび大資本閥の後援を得るなれば、我財界の重鎭となる可き素質を克く具へた人物である。この點に於ては、君の努力もまだ足りないのではないか。一方君の男性的性格から、賴むに足りるか、否か不明のものに對して伏依することなどは、夢出來ない事であるかも知れない。けれども、今後一段の發展を期するには、大財閥の背景を必要とするのではあるまいか。只に兜町の快男兒として終らしむるには餘りに惜しい素材である。

長所は何人にも同時に缺點である。直情遲行を必要以上に發揮して、よく他人の感情を害する。かつて所有の名馬が五千圓の原價で、三年の間に十萬圓稼いだ。店のもので馬ほど稼ぐやつは誰もないなど平氣で笑つてゐる當りが、兎角君の德を云々される點である。司馬遷の書いた項羽のやうな處を持つ男である。だが君は從來の投機本意を轉向して實物本意で行くと聽く。丸上の名は兜町に於ける最高峯の地位を得るのも遠い將來ではあるまい、

中村庸

鐘紡は東京が本社であるけれど、社長津田は神戸の營業所に頑張つてゐる。從つて手腕、德望共に社長津田につぐ重鎭を東京探題として置かなければならぬ。現在社內外の要望を負ふて中村庸が東京本社をひきしめてゐる。

君は水戸藩の生れで、明治二十八年東大出身、明治三十二年に鐘紡入りをしたのだから、社歷から云つても、今は最古老である。勿論一介の平社員として第一歩を踏み出した。君の精勵と才腕は數年にして前社長武藤山治の認める處となつて、工場長の位置に拔擢され、住吉、久留米、高砂、洲本等の各工場を歷任して令名あつたが、殊に洲本工場の經營に於ては拔群の偉功を建てた。其の後、參事に昇進し、昭和五年本社調査課長に命ぜられた。

濱口內閣の財政政策の影響により、當時鐘紡は非常な苦難時代であつた。此の時に當つて、調査

課長としての君は、國内の消費狀態、各社の内容新計畫、世界各國の生産及び消費狀態を始め、爲替相場の變動、輸出市場の研究など、内外經濟の動きに對して、常に細心の注意と檢討を拂ひ、鐘紡の經濟參謀本部とも云ふべき地位をつとめたものだつた。當時特に調査課長の地位は、鐘紡の知能幕僚として最も重要視せられたものであつた。君の此の仕事に當つての最も强味とする處は歐米視察の體驗が物を云つた點で、平素の研究熱心はよく世界綿業界の實狀を腦裡に刻み込んでゐた。此の正確な調査と透徹した頭腦から劃り出された劃策は、よく適中して、遂に鐘紡再飛躍の礎石を築き上げたのである。津田が社長就任に際して、君は東京探題の重位に就いた。

◇

君は水戸出身だけに鄕黨の先輩藤田東湖に私淑して思想學風に共鳴してゐる。從つて淸廉剛直でよく水戸つ子の長所を生かしてゐる。君は鐘紡入社以來、絲の下の力持ち的な努力を續けて更に一身榮達や名譽に拘泥するやうなことがなかつた。實名を忌むこと蛇蝎の如くだと云ふが、君の性格としては、さもありさうなことである。鐘紡の苦難時代を通じて、筆舌に盡きぬ下積みの勞苦を嘗めて來た上、遠く鐘紡將來の飛躍のため、碎身の努力を勵んで來た君の偉業こそは鐘紡の史上特筆すべき事柄ではあるまいか。

君は一見甚だ溫厚な人物のやうであるが、その内心には常に燃えるやうな鬪志を持ち、而も一徹な正義觀は秋霜のやうな嚴肅さを思はせる。同時に部下を愛すること頗る厚く、其の人情味たつぷりな所は全社員敬慕の的となつてゐる。本年六十四歳だが、元氣は益々盛で津田社長を助けて鐘紡の第一線に立つてゐる。人物は齡と共に益々圓熟を加へ、識見の豐富さ氣宇の廣さ相俟つて鐘紡東京探題としての貫錄を表はしてゐる。

名取夏司

◇

我が國生命保險界に名專務の呼聲の高い人に、帝國生命の名取夏司がある。第一の石坂泰三、三井の野依辰治共に三羽烏と云はれてゐるが、其の才腕、人格、世評と云ふ視野から評して此の三人の筆頭に推されるのが君であらう。

帝國生命は、現在でこそ業績隆々たる勢で東洋生命の合併にも成功した程であるが、極く最近震災前後までは、相當內部は陰慘な空氣に閉されてゐた會社であり、かなり退嬰的な存在であつた。殊に震災には五大會社中、唯一の燒け出され會社となつて益々沈滯、やがては手の施しやうもなくなる狀態にまで惡化するではないかと危まれた。現在の朝吹、名取兩重役が古河財閥を代表して經營の任に當ることになつたのがこの時代である。

君は長野縣の人、早稻田を出ると、直ちに古河に入つて働いてゐた所を、昆田文次郎の斡旋によつて專務として帝國生命に入り、後新に社長として入社した朝吹とは姻戚關係でもあつたので、社業は極めてなだらかに行き、沈滯會社としての帝國生命は案外順調に持ち直すことゝなつた。

君は先づ改革の第一手段として、社內の陰慘な空氣一掃に努め、人の和、內外兩翼の明朗化を强調する傍、人材の拔擢を計り、消極から一轉積極政策へと轉向した。生命保險界で最高率の五分配當付新保險販賣を初めたのも此の時代で、今は五大會社に於て其の果敢と明朗性を特異とするに至つたのである。世に十年一昔と云ひなされてゐるが、沈滯の迷路に樹つた帝國生命を背負つて立つた君の身になつて見れば、感慨無量のものがあらう。

◇

君は、あくまで實力尊重主義の人で、人材はどんどん拔擢する。然も非常に冷靜に實行する。從つてよい專務であり、又怖しい專務である。一面又社員の病氣などと云ふ場合には、自ら見舞に出かけると云ふ溫い所を持つ人、冷靜と理智の中庸を行くことの出來る人である。

多忙の職にありながら、寸暇を利用して勉强を怠らない所、君の面目躍如たるものがある。從つて靑年社員以上の若さを失はない。現在一言居士矢野恒太老が生命保險界大御所としての貫祿に變りはないが、明日の生保界を背負ふ人は、君であらうとは生保界の定評である。

中川末吉

◇

わが國財閥の中に隱然たる勢力を扶植するものに古河財閥がある。その古河財閥を代表する人に中川末吉がある。

古河家は、故古河市兵衛氏の一代に築き上げられたもので、氏は明治財閥發展史上大きな足跡を印した人である。當主虎之助男は先孝の事業を繼承して其のよろしきを得、同家の事業は日一日と發展の道を辿つてゐる。今は古河合名會社を中心として、古河鑛業、古河電氣工業、帝國生命があり、傍系として、日本電線、横濱護謨、富士電氣、其他幾つかの事業を掌握してゐる。

君はこの產業資本財閥に於て古河電氣工業、日本電線、富士電機、横濱護謨の社長たるの外、同財閥系の事業の首腦者として、その智囊を傾け、尙ほ古河合名の理事で事業の中樞をなしてゐる。今や財閥古河の柱石であると云つても敢て過言の譏りを受けるものではあるまい。

中江藤樹を以て知られてゐる江州小山村の程遠からぬ今津在が君の搖籃の地である。君の岳父武三と古河家とは深い關係があつたので、少年時代から、古河家で成長した人である。早稻田大學の前身たる東京專門學校、エール大學を經て歐洲大陸に渡り、歸朝後足尾銅山の會計課長となつたのが古河での振り出しである。間もなく電線部の設立された時部長に任ぜられた。これが古河家の幹部に列せられた最初である。

所が途中君は何を感じてか、多望な前途を振りすてゝ政界入りを志した事がある。君は政治革新の理想に燃えてか、第二次西園寺內閣の時、鄕里よりおされて、逐鹿戰場に初陣の駒を進めたものだ。それを知つた古河家の最高幹部では大いに物議を起して使者は江州に飛んで、立候補は直ちに斷念となつたのである。その時を楔機として政界入りをしたことが幸か不幸か、それは運命の神よりか知るよしもないが、兎に角依然古河家の人として精進したばかりに今日の地位を我が財界に築き上げた譯である。

君はその昔、米國に學んだゞけに、世の重役諸公とは趣を異にし、何人にも好感を以て迎へられる良き觸面を持つてゐる。しかも其半面には重厚にして動ぜざる一種の風格を持つてゐる。智育、體育兩面に意を用ひ、身自らそのおさき棒を努めてゐる。一方、社會問題、勞働問題に對しても常に一見識を持ち、時勢の推移に關して一日も關心を離すことがない。精銅所や鑛山の從業員に對しては、常にその待遇方法に先鞭をつけ、委員會制度を採用したのは古河がまづ最初であつたであらう。これらは凡て君の發議によるものである。

◇

あの歐洲大戰の當時には、他の凡ゆる部門の事業にも增して鑛山業者の活況を觀た。その後平和

來と倶に業態一變して、産業資本家又あらゆる方面共に衰ろへを見せた、古河財閥またその例に漏れず足尾の榮華もそろ〳〵うらぶれやうとした。

而し乍ら經濟界明暗の波のウネリは、財界各斷面に思ひ掛けぬ事實を發生するもので、今は小財閥の興隆や老衰財閥の若返りも、第一期工作完了の型となつた。が時勢は急轉する。資本主義經濟の動向には大きな諸問があり、財閥の勢力には大きな變遷がなければならぬ。

斯ふした多端な將來に際し、財閥古河が如何なる方向を歩むか。それは古河財閥の中軸をなす中川末吉の雙肩に懸るものである。

南條金雄

◇

三井合名は昨年以來池田成彬の獨裁で、安川を追ひ、有賀、福井兩氏を物置にまつり上げて南條金雄を合名常務理事に据ゑた。愈池田は南條を將來の後任者に擬し、池田の獨裁强化策は完成した

三井物産の方向轉換、合名の報恩會など、種々の道德的工作により、三井に對する社會的反感は次第に和らいだから、次は政界腐れ縁の精算、軍閥との因緣解消をやらうと云ふのである。政客軍人と交渉の深かつた福井、有賀に替つて池田の獨裁强化となつて現はれたのであらう。

南條は三井物産時代其の後衛として金融方面を擔當したものである。安川は飽くまで强く、聊か情味のかげる所あつたに對して、南條は多分に人間味を蓄へたところに相違があつた。君が合名理事の椅子を得たのもその邊に原因するか。

君は明治六年群馬縣に生れ、二十五年東京高商卒業の後、アメリカン、ブレーヂング商會、大正海上保險を經て、三十四年三井物産に入り、主任、支店次長を努めて四十三年大阪支店長となつた更に大正二年倫敦支店長に榮轉し、七年には取締役に列し、十年歸朝後、常務重役となつた。君は一言にして評すれば、聰明な男である。明晰な頭腦から迸り出る智惠はすべて防禦的方面に使はれる。商賣上手であるが、殊に引締める方面に立働くことを特徴とする。

一面讀書家であり、多趣味である。殊に西洋畫の鑑賞については一家をなしてゐると云はれる。從つて常識が至つて豐富で、凡ての事件の眞相を掴むに妙を得てゐること特筆すべきである。

さて南條は物産常務時代には例の安川雄之助とコンビをなして、安川は商賣の方に突激し、南條は又後衛として却々に強い人であつた。合名の總指揮者としての君は今後どう働くか。

長尾欽彌

◇

筆を大にすれば、國民保健の重任に堪え、小さく云へば、個人衛生の源泉に備へると云ふのが、街の藥屋の表向きの看板である。藥屋さんと云へば、三井の遺つてゐる三池の染料會社も、三菱の旭硝子も、住友の肥料會社もが工業藥品を市場に出してゐると藥屋である。夜店のナフタリン屋も亦藥屋である。表語葉の衛生保健とは何の事だか知らずに、女の病氣と云へば、中將湯を、頭が痛いと云へばノーシンを賣りつけてゐる者があるかと思へば、一方には醫師法違犯もやり兼ねない程出すぎた藥屋もある。一の業體で之れほど千差萬別あるものは稀であらう。

これら種々雜多の中から、經濟的に興味あるもの、又は話題となるものを求めると、自然に大頭株に止めをさすことゝなるが藥品屋としての三井、三菱を說くのは、牛を割くに小刀を以てするの感があるので、一般人に最も心安さをもたせる「わかもと」を俎上に昇することゝした。

◇

昨年の春だつたか、松本双軒遺愛品の賣立があつた時に、呼物であつた仁濟の色繪壺を骨董蒐集家根津嘉一郎と張り合つて、十八萬何千圓かの、壓倒的高値を以て競落し、天下の耳目を聳動せしめたのは、實に、わかもと本舗の長尾欽彌である。當時骨董商仲間の豫想では、根津とか益田とかの蒐集好事家にゆくか、さもなくば三井、住友の巨頭へ納まるのではないかと見られてゐた。世間的に餘り名が聞へてゐない一賣藥屋本舗が、天下の根津の向ふに立つたのみか、完全に鼻を折つて凱歌を擧げて、國內無双の仁濟の逸品を手に入れたので、一般好事家に、君が容易ならぬ富豪であることが認識された。

昭和七年だつたか、博物館で蕪村展を開いた時、民間出品者は、村山龍平、住友、山口と何れも全國に聞へた蕪村蒐集家であり、且つ天下の富豪であつたに對し、屏風が一双長尾欽彌の名で出品された。その頃こそ、君が漸く百萬の金を握り、骨董道樂の第一歩を踏み出した時であつた。

君は全骨董に向つて大々的の逸品蒐集を企てゝゐるらしい。「わかもと」が主婦の友の二頁記事廣告に姿を表はしたのは、十年ともならぬ前のことであるが、七八年間にして巨富を積んだのは奇蹟的の成功とも云へやう。

◇

いま、君の片鱗に觸れると君は滋賀縣の產で、まだ五十內外の壯年である。新聞の廣告部員から一度はニキビ藥の本舗となつたが、一敗地に塗みれて東京を賣つた。關西落ちの後、改めての旗上げである。金持ちでも、二三年前まで社交界入りを躊躇してゐた位であるが、實際は名譽慾は多分に持つてゐる人間である。田中光顯伯との姻戚關係も、その名譽慾の發露の一端だと云ふことである。然し金持ちともなれば吾々では想像の出來ぬ氣持になるものであらうから、一概に攻擊の言葉に使用するなどには當るまい。根津嘉一郎、野間淸治、長尾、共に良く書く人はそれの樣であるがそれは、それらの人の一面だけを觀るからではあるまいか。

君の深澤の本邸は、總坪數一萬五千坪と云ふ擴大なもので、流れに敷かれた砂利一粒にさへ君の趣味をうち込んだ豪華なものである。

今また、普通には使ひ道もなささうな高莊なものを計畫中と聽くが、其のコリ方が又並大低でない。骨董と云ひ、住宅と云ひ、こゝに君の徹底したコリ方が現はれて面白い。この徹底味が今日の「わかもと」の大成をなしたものと觀られる。これが事業の上に現はれる時、タンクのやうな壓力と軍爆擊機のやうな迫力と化するのである。毎日の廣告に見る如く追擊實に急なるものがある。問屋筋では「わかもと」は年五百萬圓賣れると云ふ。工業藥品を除いて一品で五百萬圓の賣上げは將に世界のレコードと聽く。

中井勵作

◇

齋藤內閣當時の中島商相の下で、わが國に於ける製鐵業の合同が企圖されたのであるが、一時は揺つた揉んだの大騷ぎで、容易に譲り相にも見えなかつたけれども、日本鋼管等と云ふ大物を逸ししはしたが、兎に角、日本製鐵株式會社と云ふ資本金三億六千四百六十五萬八千圓を擁するところ

の、わが國では滿鐵、東京電燈に亞ぐ大會社がデッチ上げられたことは未だわれ〳〵の記憶に新た
な所である。

ところで、この製鐵王國の初代の社長と云ふ榮譽を擔つて、日本の財界に華々しく馳驅して居る
のは中井勵作君である。

由來わが國の財界と云へば多く老人連が跳梁跋扈して居つて、若年者の影寥々たるものであるか
ら、本年慥か五十七歳の中井君であつて見れば、若者ならずとするも、老人の部に入る程老けては
居まい。蓋し、格好の人物と云はるべきであらう。

◇

君の經歷を覗いて見ると、明治三十六年に東京帝大の獨法科を卒へ、その翌年、農商務省試補を
振り出しとして、爾來二十年間の吏僚生活を送り、大正十三年、商工事務官を最後として長き官界
の生活に暇を告げたのであつた。

その後少時の間、閑地に在つて悠々自適して居つたのであつたが、たま〳〵時の八幡製鐵所長官
白仁武君が郵船社長として財界入りをし、その後任難に陷つて居た際とて君に白羽の矢が立つて拔

擢されたのであつた。かくて、それ以來、まる十年と云ふもの一意專心製鐵所長官として奮鬪して
來たのだつた。

かく一瞥して見ると、君はわが國の資本主義の上昇期に當つて、極めて順風滿帆のコースを辿つ
て來た。格別に特筆すべき點も無い一介の官僚に過ぎなくも見える。だが、わが中井君をしかく單
純に片附け去つてはならない。

と云ふのは、大體わが國の鐵工業は、その原料の大半と云ふよりも、殆んどその全部を國外より
の輸入に仰がねばならない實情に至つた。だから、他の自給自足の可能な產業部門の如き安易さは
容されなかつたのである。これ八幡が歷代の長官に有爲の人材を擁しながら、事業成績の芳しから
ざりし所以でもある。

◇

殊に、君の就任した當時の大正十四五年頃と云へば、經濟恐慌の樣相漸く深刻性を加へ來つた時
かくて、君は就任早々まづ生產コストの切下を斷行した。そして、外部的には販賣上先物契約の方
針を採用し、一般市場品の種目の單純化を圖り、また、陸海軍注文の整理協定を行ふと共に民間製

鋼業者と生産分野の協定をし、鐵鑛資源の擴張を確保した。また、對内的には業務分掌制度を改善して從業員の個別的能率の增進を圖り、技術會議を創設して君自身定期的に工場内を巡閲した。

また、鐵鋼工業合理化の核心とも云ふべき「鐵鋼一貫作業」は君の手によつて一層徹底したのだつた。先物契約に基く製品の單純化によつて壓延工場の能率は增進するし、副産物の捕集量は增加した。かくて、八幡製鐵所は君の著任以來わずか四五年の短時日にして驚くべき躍進を遂げたのだつた。すなはち、從來と同じ固定資本、同數の職工を以て、殆んど倍額の生産を擧げ十數倍の純益を擧ぐることを得るに至つたのである。

◇

未曾有の爲替安と軍需インフレと云ふ條件の波に乘り製鐵業は躍進に躍進を遂げ、國内の業者を打つて一丸とする日本製鐵會社なる企業合同の實も結ばれた。かくて、君は今やその最高指導者として重責を双肩に擔つて起ち上つた。今こそ君は何等のハンデイキャップなしに素つ裸かになつて斯界野育ちの古强者共と揉み合はねばならないであらう。

思へば、その需要に、その資源に、その設備に、將また機構に條件等々に百パーセントに惠まれて居る。併し、斯業は何と云つても、權力を背景として、手厚い保護によつて成長した溫室の花と云つたものだ。低爲替と軍需インフレ、これのみですでに最も良き條件の下に置かれて居る。

この秋に當つて、君の胸中に、斷乎として關税の撤廢を敢行し、國産鐵鋼を以て廣く世界の市場にまで馬を進むるの氣魂果してありや。

とまれ、君の眞の力量を示すの機會は總て今後のことに屬する。君の切なる自重を祈つて筆を擱かう。

中根貞彦

◇

中根貞彦が日銀大阪支店長から三和銀行の頭取に轉替して、もう二ケ年になる。三和銀行の將來がどうなるかよりか、その預金が、どれ位の速度で減少して行くかの方が興味を持つ問題だなど噂されたものである。それが合併後第一期決算に於て、合併三行（三十四、山口、鴻池）の最終期決

算の合計利益金額より上まわつて四百三十五萬圓を擧げ、七分の處女配當を決行して、幸先よしとされた。又預金高に於ても却つて太つてゐる。現在、預金高では、將に天下隨一で十一億圓に達し第二位の住友、第三位の安田といへども、仲々追ひ拔く術もあるまいとされてゐる。

君は生え拔きの銀行屋ではあるが、日本銀行と云ふ御威光で押し通した身分で、民間銀行家の苦難は嘗めてゐない人物である。日銀內に於てもトントン拍子で、順調にのみ住み慣れた人である。日銀の逸足、必ずしも民間の逸足たりうるかどうか、三和入りの當時 多分に危まれたものであつた

銀行頭取として年には不足のない五十九歲、明治三十八年に東大を出ると、すぐに日銀入りをした人だけに、君が三和入りに決つた時、誰もが考へたことは、愈これから一苦勞と云ふことであつた。淀屋 の日銀樓上から、大小銀行をにらみつけてアゴでえしやくして濟まされてはゐられまい殊に大阪はオカミの力が東京ほどに光らない。もう一つ五月蠅いことには舊三銀行が中小商工業者相手の銀行であつた。おまけに山口、鴻池のお連枝連の目が光つてゐる。だから、中根も並大低の苦難ではない。かうした豫想の立てられたのも、決して無理ではなかつた。

しかし町人銀行家としての君は先づ成功した。五尺たらずの小軀ながら、なかなか覇氣滿々として闘志あくまで強い。世の中の多くの重役業者のやうに、自分の無能さを尊大ぶつた態度にカムフラージするでもなく、あくまで書生流にテキパキ物を捗つて行く所、相當の如才なさを持つてゐる悧巧で目から鼻へぬけるほど判斷力がするどい、と云はれてゐる。

大分生れの九州兒にしては、意外にかどがとれて、觸りもよしであるが、內剛外柔の譽れは、遠く日銀ロンドン時代から有名で、井上準之助が生きてゐれば、或は日銀總裁の椅子も遠い將來の夢でなかつたかも知れない。多くの會社重役の自動車濫用の特權も一切御面で、儻のガソリン代さへ銀行に迷惑を煩さないと云ふ處、生來の銀行屋中根の面目がある。

◇

今や、三井、三菱、安田、住友など財閥銀行連を向ふに廻して、合併三行の歷史と傳統を尊重し商工都市大阪の生命である中小商工業者の爲めに、わが民衆銀行の宰領として、至大の信任を得てゐるのである。

君は又金融界歌人として名を成すところ川田住友氏につぐものと云ふ。あながち冷たく黑光する金庫とのみ睨みこをしてゐるにあらず、一面豐かな超あららぎ派の情趣がある。

中野金次郎

◇

「聽くは收入、しやべるは支出」と云つて、人生のバランスを取つてゐる人に中野金次郎がある。

彼はそれほどに衆智を吸收して、自らの人生をあやまらぬやう、棹さして行く男である。人生の行路は自然に拓けて行くものではない。人皆自らの開拓によつて、己れの運命を決定して行く。從つて幸、不幸はその人の努力如何によつて決定するものである。勿論時の潮と云ふものは否定すべくもなく、その人の運命の上に、大きな支配となつて現はれるものであるが、彼中野は、この點うまく潮に乘つて來た男と云ふことが出來る。

彼の青年時代は最も學校教育の尊重された筈であるが、彼は其時代、學閥運を悠々尻目にかけて堂々人生へのスタートを切つた。彼の學歴と云へば、小學校を出ただけである。然し彼は人百倍の努力をした。筑豐鐵道の給仕時代孜々として獨りよく勉強した。彼が今日の「聽くは收入、しやべるは支出」の哲學を學んだのはこの頃である。

人はよく知らぬくせに知つた振りをするものであるが、彼には少年時代から、そんな虚勢振つたことは微塵もなかつた。知らぬことは、誰れ彼れの別なく、つらまへてよく聽いたものである。聽くだけではない。彼の頭はよくこれを消化した。今日世に云ふ反産運動の牙城とも云ふべき東京商工會議所の副會頭の地位にゐる。この地位を守るのは非凡の人のよくなし得るものではない。

誰でも知つてゐるやうに、東京商工會議所は、鄕誠之助を始め、反産の元祖渡邊磯藏博士など、數多非才の策士が群居してゐた。その中に學歴を持たぬ彼が飛び込んで行くには異狀の勇氣を要する。彼は九州產、勇氣は人一倍あるが、副會頭は單なるロボット役ではないから、仲々に頭の冴えを必要とする。殊に東商と云へば、ウルサイ事にかけては既に定評のある處である。彼はここに敢然乘りこんでゐるのである。運送屋の總元締と云へば、一見荒けづりの野人を想はせるが、彼はこれを何時しか謙讓の美德によつて被ひかくしてゐる。こゝが、今日東商副會頭をやつてのけ、一方財界におもきをなす所以である。人間中野金次郎の面貌はこゝにありと云ふものである。

◇

我が國の運送業を、近代企業にまで、引き上げて來たものは彼であると云つてよい。それほどに我が國運送事業界に於ける彼の足跡は大きいものであつた。

彼は筑豐鐵道の給仕をふり出しに、明治三十八年の日露戰爭當時には、門司で回漕店巴組を引受けて經營してゐた。これが即ち今日を築くスタートであつたのである。戰爭中は文字通り海運業全盛時代であつた。從つて彼の事業たる巴組は存分の活躍をした。所有船は數隻に過ぎなかつたが、彼は傭船二十隻を運航して、莫大な利益をかち得た。彼が潮に乘つて成長した男であると云つたのはこの事である。

人生の目的は常に飛躍の中にある。彼の目的又この飛躍の中にあつた。「俺は事業家として大成する」これが彼の信念であつた。三十代で門司商業會議所の會頭の椅子を占めて、一樂關門の雄となつた。

かくて彼の非凡は努力と共に益々發揮された。中央財界に進出したのは和田豐治の手引きで、大正十二年、和田豐治の死後、今の鄕誠之助に轉換したのである。即ち當時伏嶽殿とまで云はれた內國通運の實權を掌握して整理に着手した。大正十五年には鐵道省の肝煎りで全國運送屋の大合同が行はれた。それに彼は卒先して起ち、數社の合併を策して今日の國際通運を設立したのである。今は又新に滿洲への飛躍を策してゐる。十分に延び得る男である。力以上に延び得る男である。今は鄕誠之助でもあるまい。原邦造でもあるまい。副會頭中野金次郎は立派に財界の頭目である。

西藤右衛門

◇

染料工業が、原料、設備、工程、技術の點に於て火藥、毒ガス製造に相等しい處から、染料工業の國家的獨立の必要を叫ばれること久しい。染料の自信、これは、今や、各國とも國家總動員と同意義の重要性を持つことゝなつた。

かの歐洲大戰を發生の初期として、漸く第三期の成長とも觀らるべき時代の我國染料界は低金利資金の貸出、或は補助、保護關稅、輸入禁止などの國家助長のうちにありながら、過ぎ來し方は實に波瀾重疊の荊の道であつた。

今や、化學工業日本の世界的進出、染料工業の自主なつて、先進諸國に伍して堂々制覇を決せんとする時、斯界の向背を背負ふ人々は尠しとしない。大資本の力を擁し、業界を我もの顔に活歩してゐる人々を語るには他に人もあらう。筆者は勞々辛苦、染料工業化に研鑽を重ねながら、死力を盡して新興日本の礎石を築きつゝある人、染料界暗黑時代を突破して個人經營者として我國最大の工場を自營する人、西藤右衞門を拉して寸評の筆を走らせやう。西とはどうした人か。筆者は君の苦難を想ふ時、先驅者の苦衷を稱歎するものがある。

◆

世界大戰は世界染料界に一大波瀾を惹起した。世界の供給國であるドイツの染料輸出が全然杜絶したからである。日本は勿論、各國とも染料饑饉時代に襲はれた。當時英國の如く相當生產增加を來した國ですら、國產品は消費の二割程度にしか當らなかつた。それも硫化、媒染、直接染料のみで、インデイゴーの如きに至つては一封度も生產出來ない狀態で、染料は擧げてドイツの獨占工業の觀があつた。一面日本の染料工業はと云へばまだ數字にさへ乘らない幼少時代であつた。尤もコールタール染料が內地で初めて使用されたのは文久二年と云ふから歷史は相當に古い。輸入統計に

表はれたのが明治十六年。明治二十四年、生田益雄と云ふ人が染料製造を工業化しやうと計畫したが、これは一人の共鳴者も見出せないで其儘立ち消えとなつたと云ふ。爾來大正三年に至る長い間ドイツ品の跳梁を擅にするものであつた。

世界大戰は實に我國染料工業の發足をなし、二十七の染料工場が亂立して、粗惡ながら供給に應じてゐた。需要は益々急增して、市價は大正二年に比して平均四十倍、ものによつては百廿倍と云ふ狂騰ぶりで、染料界永遠の基礎をなすかに思はれた。然し、大正八年十月休戰と同時に、市價急轉直下、漸く芽生へやうとした染料工業は、再起不能の狀態に打ちのめされた。爾來國策による政府の救助と整理、合理化により、微弱ながら比較的堅實な推移を辿つて昭和四五年の本格的工業化時代を迎へるに至つたのである。それに昭和六年十二月の再禁止、これが一大轉機をなして海外進出の希望さへ持てる一本立の工業となつたのである。從來は海外市價の意の儘に動かされて一日の安定も覺られない狀態であつたが、再禁止後は、外國製品の驅逐に成功し、同時に高級品の增產が實現されて、今や實質的自給自足の時代到來とまで發展した。これが我國染料工業の現狀である。

君の事業がこの變轉極まりない波瀾の線に浴ふて、明沒常なき苦難を克服して來た事勿論、大正

五年藏前高工の染色科を出て、一時食料品工業に身を投じたが、これは文字通り失敗に終つた。其後幾變轉かの後、專門とする色素工業に手を染めて今日に至る。今や有力小數大會社の一手に制約せられて、中小染料製造業者が兎角に進出の道を閉され勝ちである時、君の事業は巍然たる發展力にめぐまれてゐる。依然、微動だも感じない堅實味を持つてゐる。

それは君の染色化學に對する造詣の深さと、怠らざる君の研究心である。これと資本的背景があるでないのに、たゞ一つ燃ゆる理想を抱いて、近々十年の間に君の畢生の事業「日本色素研究所」をこゝまで築き上げたのである。君の知明を土臺に君の理想の實現し得たことは、時勢の波に乘つたからだとも云へるであらうが、これは君の負けず嫌ひな氣魄と、鹿兒島縣人特有とも云ふ可き剛放と、優れた才腕に負ふ處である。君には如何なる荊の途をも切開き、克服して行く氣概と迫力がある。

政治的立場は絶對無色透明である。云ふならばあの理論と人格を以つて大衆に眞價を問ふて見る野心はないか。筆者はまるはだかになつた君の立候補するを待望するものである。有能な事業家は德に缺げ、德望の人は經倫に於て缺げる。兩者兼ね備へてゐる事業家は極めて稀である。こゝに、德、理論を兼ね備へてやがて斯界の指揮者たらんとする君を語る所以である。

沼間敏朗

◇

株式取引員の素質向上が稱へられてゐるとは云へ、所詮は株式街、金々で萬事が解決する町である。こゝに物慾に恬淡で、義俠に生きる人があるとすれば沒間敏朗に指を屈しなければなるまい。

君は生粹の江戸子で、東京毎日新聞の創立者で明治政界の巨星である沼間守一を父とする。最初教育家たらんとして師範に入つたが、後日本大學に學んで、中途より父の東京毎日新聞の經營に參加した。これも思はしくないので、第一銀行に入り伊勢町支店長まで累進したが、大正五年世界大戰の活況の際、身を期米界に投じて、投機人としての第一歩を踏み出した。時の利を得た點も幸してか、一二年の間に四五百萬を握つて毅然頭角を顯し、更に餘力を驅つて、株式界に入り、大正七年の米騒動を機に期米界と絶緣して一念株式界に精進した。のち數年にして兜町一流筋と雁行拮